

# 高槻市文化財年報

昭和63・平成元年度

I 埋蔵文化財の調査	1
1. 昭和63・平成元年度の調査	
2. 調査の概要	
高槻城三ノ丸跡	鐘ヶ江一朗・宮崎 康雄
II 指定文化財	9
III 指定文化財の保存整備	10
1. 清福寺太子堂復元工事	
2. 阿武山古墳環境整備工事	
3. 説明板などの設置	
IV 文化財保護啓発事業	12
1. 昭和63年度	
2. 平成元年度	
V 資料紹介	14
高槻城跡出土の将棋駒	鐘ヶ江一朗
VI 研究ノート	20
大阪北部の古代後期・中世土器様相	
橋本 久和	

1991年3月

高槻市教育委員会

## I 埋蔵文化財の調査

### 1. 昭和63・平成元年度の発掘調査状況（図版第1～3）

昭和61年度以降の調査件数の増加傾向は、63年度、平成元年度にも受けがれ、63年度では68件、元年度では72件を数えた。届出別では、個人住宅の造・改築に伴うものが最も多く、年間30件近くを数え、増加傾向がみられる。増加傾向にあるものとして、宅地造成工事（分譲住宅建設を含む）があり、61・62年度では10件以下であったものが10件以上となった。同様に共同住宅建設も増加傾向にあるが、これらは好景気に伴う住宅需要の結果生じたものである。公共事業関係では、道路・水路改修がやや減少したものの、上下水道整備はほぼ同じ調査件数で推移している。その他の項目に含めたが、福祉センター・文化ホール建設に伴う発掘調査も実施されている。

遺跡別では、鷲上郡衙跡と安満遺跡が例年どおり調査件数が多く、鷲上郡衙跡に隣接する郡家今城遺跡でも増加傾向にある。市域西部の塙原・土室・上土室遺跡では、61・62年度の試掘調査等によって遺跡が確認されたため、開発に伴う発掘調査が実施されるようになった。また、高槻城跡では前述の福祉センター・文化ホール建設に伴う発掘調査で中・近世の高槻城跡が解明されようとしており、周辺地域での発掘調査件数が増加している。

届出別 年度	個 人 住 宅	共 同 住 宅	倉 庫 等	造 成 工 事 等	道 路 ・ 水 路 改 修	上 下 水 道 整 備	そ の 他	計
63	29	4	1	14	12	2	6	68
元	27	8	1	10	8	6	12	72

表1 昭和63・平成元年度調査件数

遺跡名	63年度	元年度	遺跡名	63年度	元年度	遺跡名	63年度	元年度
鷲上郡衙跡	24	22	郡家本町遺跡	1	1	悉檀寺跡	4	
塙原遺跡	1		大歳司遺跡	2	4	安満北遺跡	1	
上土室遺跡		2	天神山遺跡		1	安満遺跡	6	10
土室遺跡	3	1	芥川遺跡	2	1	天川遺跡	1	1
宮田遺跡	2	1	上田部遺跡		1	堀原寺跡		2
郡家今城遺跡	14	7	高槻城跡	4	6	堀原南遺跡		1
前塙古墳	1	1	富田遺跡	2	2	神内遺跡		1
水室塙古墳		1	津之江南遺跡		2	堀原古墳群		1
今城塙古墳	1		芝生遺跡		2			

表2 昭和63・平成元年度遺跡別調査件数

合計 68 72

No.	選定名(地区)	所在地	提出者	用途	面積(㎡)	担当	調査期間	備考
1	海上部衝跡 II-J	郡家町本544-4	金堂文俊他	個人住宅	101.628	大船	63. 4. 11	海上部衝跡開発計画登録資料 - 13に記載
2	84-M	今城町151-9	伊藤 明夫	共用住宅	66.95		63. 4. 11~ 4. 13	
3	84-E	今城町151-1	伊藤 卓一	個人住宅	431.13	宮崎	63. 4. 14	
4	26-I	清福寺町852	宮田 和子	個人住宅	88.51		63. 5. 9	
5	74-P	郡家町町159-13	田中和也	個人住宅	105.82		63. 5. 12	
6	4-C・K	郡家町本934	岩本義一	詔示施設	424.97	大船	63. 7. 5	
7	22-A	郡家町本528-5	石野和也	個人住宅	681.58		63. 7. 18	
8	22-B	郡家町本423-3	羽野ノブエ	個人住宅	56.0	越ヶ江	63. 8. 23	
9	48-H	川西町1丁目954-12	上田 雄	個人住宅	45.99		63. 8. 29	
10	48-I	川西町1丁目959-13	田村 雄	個人住宅	78.59		63. 8. 29	
11	27-H	清福寺町85-4	和也男	個人住宅	148.38	高橋	63. 9. 12	
12	54-1・M	郡家町新351-1	長治	個人住宅	552.0	越ヶ江	63. 10. 12~ 10. 22	
13	E-D, E-A・E	清福寺町876他 F	高橋 市長	水路改修	112.9	本	63. 10. 17~ 11.	
14	8-I・M, 16A	清福寺町886-2他			190.5		63. 10. 17~ 11.	
15	28-J	清福寺町848	高橋市教育長	堂宇整備	76.0		63. 10. 28~ 11. 2	
16	1-D・G・H	郡家町本710他 K	高橋市長	水路改修	314.5	宮崎	1. 1. 5~ 1. 31	
17	85-1	今城町154-44	黒田 雄治	個人住宅	167.54	大船	1. 1. 26	
18	28-I	清福寺町地内	高橋市長	下水整備			1. 1. 27	
19	28-1他	郡家町876-1他	高橋市長	水路改修			1. 1. 27	
20	36-1	郡家町新276-1他			85.14	高橋 本	1. 1. 30~ 3. 31	奈良時代柱穴・土器
21	25-F	郡家町新283他			50.0	宮崎	1. 2. 1~ 2. 6	園地・13C雨歌
22	33-I・M	郡家町新402, 403			140.0	越ヶ江	1. 2. 6~ 2. 18	遺構・遺物なし
23	38-F	清福寺町915-7	進地之造	個人住宅	206.15		1. 2. 7~ 2. 9	摘要・13C雨歌
24	4-A	郡家町本896-1	土戸	実験	319.78	大船	1. 3. 9	
25	74-L	郡家町本159-7	戸	実験	80.53	大船	1. 4. 7	遺構・遺物なし
26	28-H	清福寺町828-10	舟川 洋一	水路改修	54.5		1. 4. 11	
27	73-P	郡家町新149-1	郡家町新358-1他	高橋市長	256.63	大船	1. 4. 13	園地・14C雨歌
28	45-A・B	郡家町新920-3	高橋市長	改修	68.5	越ヶ江	1. 4. 24	遺構・遺物なし
29	38-D	郡家町本534-2	山田 敏雄	個人住宅	103.03	宮崎	1. 4. 24~ 4. 25	園地・14C雨歌
30	12-N	郡家町本534-2	久保田 政	個人住宅	495.0		1. 5. 8~ 5. 29	
31	48-P	川西町1丁目985	吉田 弘	個人住宅	188.0	高橋	1. 5. 23	
32	67-C・G・K	清福寺町1丁目1180他 O	高橋市長	水路改修	821.1	大船	1. 6. 14	包含層確認
33	17-C・G	清福寺町808-1他	太田 八郎	共同住宅	870.0		1. 6. 14	園地・14C雨歌
34	48-I	川西町1丁目953-15	住谷 広樹	個人住宅	48.34		1. 7. 12	
35	49-N	郡家町新305-42	三原国夫	個人住宅	71.2		1. 8. 7	
36	38-N	清福寺町915-3	玉 康幸	個人住宅	184.7		1. 8. 24	
37	28-G	清福寺町828-5	長沼ハウジング	下水整備	105.84	高橋	1. 8. 31~ 9. 4	包含層確認
38	57-J・M他	清福寺町内地内他	高橋市幸吉	個人住宅			1. 9. 27	
39	48-F	郡家町新395-22	高橋市幸吉	水路改修	86.72	大船	1. 11. 4	園地・14C雨歌
40	55-J・K・L	郡家町新250他	高橋市幸吉	個人住宅	161.0		1. 11. 24~ 12. 8	
41	45-A・E	郡家町新341他	高橋市幸吉	水路改修	155.3		1. 12. 11~ 12. 22	
42	23-A	郡家町本417-1	高橋市幸吉	下水整備	518.73	高橋	1. 12. 12~ 12. 26	包含層確認
43	28-M	清福寺町内地内	高橋市幸吉	個人住宅	27.8		2. 1. 25	遺構・遺物なし
44	27-A・B	"	高橋市幸吉	水路改修	214.72	大船	2. 3. 28~ 3. 30	
45	4-I	郡家町本913-1	高橋市教員	高橋市幸吉	85.14		2. 3. 17	園地・14C雨歌
46	45-G・H	郡家町本276-1他	高橋市幸吉	改修	6,582.81		1. 3. 10	遺構・遺物なし
47	原原通跡	原原通跡3丁目613他	高橋西住	改修	72.8	大船	1. 10. 17	
48	上土室遺跡	上土室6丁目131-35	大三建設	改修	13,014.36		1. 12. 8	
49	"	上土室6丁目17-1	内外カーボン	工場改修	4,000.0	森田	63. 5. 23~ 8. 20	遺構・遺物なし
50	土室遺跡	上土室1・3・5・6	高橋市長	水路改修				
51	"	上土室1・3丁目			2,000.0	大船	63. 8. 22~ 11. 14	園地・13C雨歌
52	"	上土室5丁目489他	吉田 志男	駅舎	4,876.54	森田	1. 3. 6	包含層確認
53	"	上土室6丁目5	大弘建設	整地工事	934.9	大船	2. 2. 7	遺構・遺物なし
54	宮田遺跡	宮田町3丁目101, 431	吉田工務店	改修	1,206.0	森田	63. 4. 12~ 5. 21	摘要・13C雨歌
55	"	宮田町3丁目94-2	加藤伸	個人住宅	2,019.0			
56	郡家今城遺跡	郡家町新4の一帯	西田正	駅舎	912.0	大船	1. 11. 6~ 12. 9	園地・14C雨歌
57	"	"	東工務店	改修	905.04	森田	63. 6. 15~ 6. 18	園地・13C雨歌
58	"	永室町1丁目784-3地	萩田	駅舎	791.0		63. 6. 10~ 6. 30	
59	"	"			261.85	越ヶ江	63. 9. 7~ 9. 14	

表3 昭和63・平成元年度調査一覧

No.	遺跡名(地区)	所 在 地	調出者	用 途	面積(m <sup>2</sup> )	相 当	調査期 間	備 考
60	郡家今城遺跡	水庭町1丁目787-1	水庭町	人 宅	63.05	越ヶ江	63. 9. 7~ 9. 14	概要・13に掲載
61	水庭町1丁目788-13	武田男爵邸	人 宅	135.49	"	"	"	"
62	水庭町1丁目781-17	高橋屋	人 宅	135.87	高橋屋	63. 9. 13~ 9. 14	"	
63	"	高橋屋	人 宅	64.65	高橋屋	63. 9. 20~ 9. 21	"	
64	"	高橋屋	人 宅	57.31	高橋屋	63. 9. 21	"	
65	郡家新町51-1地	成宅	人 宅	183.58	越ヶ江	63.10.15	"	
66	郡家新町47.45の一部	木船	人 宅	1,990.0	木船	63.11.21~12. 10	"	
67	水宮町1丁目788-1	木船	人 宅	216.9	木船	63. 12. 8	"	
68	郡家新町42,45,46,48,49	木船	人 宅	58.0	木船	1. 1. 30~ 2. 23	"	
69	郡家新町43-3地	越ヶ江	人 宅	745.95	越ヶ江	1. 2. 26~ 3. 11	"	
70	水宮町1丁目779-7	人 宅	人 宅	91.8	人 宅	1. 3. 8~ 3. 11	"	
71	水宮町1丁目786-16,17	人 宅	人 宅	87.0	人 宅	1. 4. 24~ 4. 27	概要・14に掲載	
72	水庭町1丁目781-28地	人 宅	人 宅	109.0	高橋屋	1. 6. 12~ 8. 13	"	
73	水庭町1丁目773	高橋屋	人 宅	981.0	高橋屋	1. 8. 8~ 12. 7	"	
74	水庭町1丁目781-31	大船	人 宅	45.6	大船	1.10.24	"	
75	水庭町1丁目781-48	大船	人 宅	59.0	大船	1.11. 7		
76	郡家新町・今城町地内	高橋屋	人 宅	32.2	高橋屋	1.11.27	包含施設記	
77	水庭町1丁目781-5地	大宮	人 宅	123.93	大宮	2. 2. 13	遺構・遺物なし	
78	窮屈古墳	大宮	人 宅	906.0	大宮	63.10.24~12. 5	概要・14に掲載	
79	高高高高	大船	人 宅	816.385	大船	2. 2. 28~ 3. 31	概要・14に掲載	
80	水窓原古墳	大船	人 宅	156.15	大船	1.11. 2	"	
81	今城町古墳	富田	人 宅	293.26	富田	2. 2. 2		
82	郡家町道跡	工事	人 宅	335.94	大船	1. 4. 18		
83	郡家町1560-5	人 宅	人 宅	1,812.0	人 宅	63. 4. 22~ 5. 7	概要・14に掲載	
84	大藏司道跡	人 宅	人 宅	756.894	人 宅	63. 9. 7		
85	大藏司2丁目294-1	人 宅	人 宅	578.83	人 宅	1. 6. 14~ 6. 21	概要・14に掲載	
86	大藏司3丁目123-1	人 宅	人 宅	261.96	人 宅	1. 8. 17~ 8. 15		
87	大藏司3丁目295-6	人 宅	人 宅	100.24	人 宅	1.11.16		
88	大藏司3丁目295-10	人 宅	人 宅	45.84	人 宅	2. 1. 17		
89	大藏司3丁目295-14	人 宅	人 宅	5,464.72	人 宅	1. 10.18	遺構・遺物なし	
90	天神山遺跡	人 宅	人 宅	478.77	人 宅	63. 4. 22	概要・14に掲載	
91	芦川遺跡	人 宅	人 宅	908.448	人 宅	63.12. 8	遺構・遺物なし	
92	城壁64,68の一帯	人 宅	人 宅	77.38	人 宅	1. 8. 8~ 8. 4	概要・14に掲載	
93	廢塁70-1	人 宅	人 宅	2,400.0	高橋	2. 2. 5~ 3. 23	中世柱穴・溝、土器多数	
94	上田道跡	車場	人 宅					
95	高麗城跡	福地セントラル	人 宅	1,900.0	越ヶ江	63. 3. 22~ 8. 9	本書に掲載	
96	城内町1-35	高代館長	人 宅	8,120.0	高橋	63. 7. 23~ 9. 12	"	
97	大手町・城内町地内	高富富市	人 宅	131.95	越ヶ江	1. 2. 13~ 2. 18		
98	城内町1105-7	宇北高	人 宅	102.1	高橋	1. 3. 17		
99	城内町1015-19	人 宅	人 宅	115.7	高橋	1. 5. 31		
100	城内町1105-11	人 宅	人 宅	3,800.0	越ヶ江	1.10.23~ 2. 3. 14	本書に掲載	
101	野尻町1150	人 宅	人 宅					
102	城内町1045-7-8	人 宅	人 宅	268.17	大船	1.11.21	概要・14に掲載	
103	野尻町1251-18	人 宅	人 宅	269.13	大船	1.12.19	"	
104	城内町1002-13	人 宅	人 宅	86.36	大船	2. 2. 3		
105	大手町地内	人 宅	人 宅	7.44	大船	2. 2. 20		
106	富田町4丁目2516	人 宅	人 宅	370.24	大船	63. 7. 4~ 7. 6		
107	富田町6丁目2553	人 宅	人 宅	383.835	大船	1. 3. 25		
108	富田町4丁目2543-2	人 宅	人 宅	150.48	大船	1. 5. 8		
109	岸之江北町地内	人 宅	人 宅	125.44	大船	1.11.14		
110	岸之江北町17地	人 宅	人 宅	632.4	大船	1. 7. 1		
111	津生遺跡	人 宅	人 宅	222.5	大船	1.12. 4		
112	芝生遺跡	倉庫	人 宅	4,255.39	大船	1. 5. 15		
113	成合寺寺社	浴槽	人 宅	888.4	大船	2. 3. 28		
114	成合寺647-1地	火葬	人 宅	762.3	木船	63. 7. 20~ 7. 28		
115	成合寺804-1地	火葬	人 宅	765.0	木船	" " " "		
116	成合寺605地	火葬	人 宅	409.0	木船	" " " "		
117	成合寺中町488	火葬	人 宅	65.8	木船	63. 7. 27		
118	高須町85-1地	火葬	人 宅	1,315.0	越ヶ江	63.12.12~12.22		
119	高須町225-69地	火葬	人 宅	3,151.0	木船	63. 2. 5~ 5. 15		
120	高須町230-1地	火葬	人 宅	870.52	木船	63. 4. 25~ 6. 2		
121	高須町230-1地	火葬	人 宅	881.7	木船	63. 8. 8~ 9. 16		
		人 宅	人 宅	57.2	木船	1. 3. 6~ 3. 8	春生時代柱穴検出	

No	遺跡名(地区)	所 在 地	届 出 者	用 途	面積 (m <sup>2</sup> )	組 当	調査期間	備 考	
122	安 潟 遺 跡	八丁堀町12-1	京 都 大 学	淨化路整備	58.0	幕 成	1. 3. 6	包含層確認	
123	八丁堀町238-1他	"	高 橋 市 長	水路整備	20.0	"	1. 3. 22~ 3. 31	×	
124	安 潟 東 の 口 399-1	高 橋 市 長	農 連 改 修	50.0	大 船	1. 4. 10	✓		
125	高 橋 町 34-1他	高 橋 市 長	分譲住宅	733.0	高 橋	1. 4. 17~ 5. 9	包含層確認		
126	八丁堀町12他	高 橋 市 長	下 水 整 備	560.0	大 船	1. 6. 12	包含層確認		
127	八丁堀町270-1	高 橋 市 教 育	電 鉄	100.0	高 橋	1. 7. 31~ 8. 11	弥生前斯波・土器		
128	八丁堀町154-21	高 橋 市 教 育	フ ェ ン ス 建 設	38.11	鐘ヶ江	1. 8. 1	遺構・遺物なし		
129	八丁堀町154-20	須 藤 有 司	個 人 住 宅	72.77	大 船	1. 11. 17	概要・14に掲載		
130	八丁堀町319-1	麻 生 勇 治	"	85.37	"	2. 1. 18	✓		
131	高 橋 京 教 育 長	フ ェ ン ス 建 設	16.0	宮 崎	2. 2. 13	遺構・遺物なし	✓		
132	八丁堀町内	高 橋 市 長	施 路 改 修	33.0	"	"	✓	✓	
133	八丁堀町154-1	高 橋 市 長	施 路 改 修	297.5	大 船	2. 3. 5	✓	✓	
134	天 川 遺 跡	辻 子 1 丁 目 3他	高 橋 市 長	水 路 改 修	2,000.0	宮 崎	6. 12. 12	✓	✓
135	高 橋 市 長	辻 子 1 丁 目 287-2	高 橋 市 長	新 墓 成	661.0	"	2. 1. 8	概要・14に掲載	✓
136	高 橋 市 長	高 谷 田 1 丁 目 1367-1	高 橋 市 長	保 留 墓	166.89	"	1. 5. 10	✓	✓
137	高 橋 市 長	高 谷 田 1 丁 目 392-5	高 橋 市 長	個 人 住 宅	112.09	"	1. 5. 30	✓	✓
138	高 原 南 遺 跡	高 原 4 丁 目 598-1・2	上 村 昌 実	資 材 整 場	1,266.53	鐘ヶ江	1. 9. 18	遺構・遺物なし	✓
139	高 原 古 墳 群	上 枚 北 駅 前 口 101-3他	若 木 正 一	整 地 工 事	574.0	高 橋	2. 1. 16~ 1. 27	概要・14に掲載	✓
140	高 原 古 墳 群	高 原 1 丁 目 34-3	田 中 雪	個 人 住 宅	182.51	大 船	2. 3. 15~ 3. 16	須 水 機・瓦 片 を 挿 出	✓

## 2. 調査の概要

### 高 橋 城 三 ノ 丸 跡

鐘ヶ江一朗・宮崎康雄

昭和63・平成元年度は、近世高槻城の三ノ丸東郭・北郭において公共工事に伴う事前調査を3件実施した。

東郭では、東北隅を確認した昭和61年度調査地の西側で2か所を調査した。A区は、61年度調査地に接し、東西約50m、南北45mをはかる。B区は東西約160mあり、東郭を横断するトレチを設定する形になったため、一括して略述する。

今回検出した遺構は、元和3年(1617)幕府修築にかかる外堀と内堀、修築以前の溝3条、廃城後の水田化に伴う井戸などである。修築以前の溝(堀)については、すでに61年度の調査で年代が推定されており、本次調査でもその連続性と年代観が追認さ

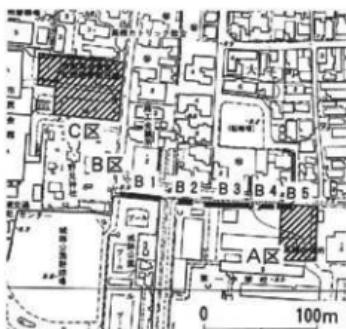


図 1. 調査位置図

れた。したがって溝1の年代は16世紀後半、溝2は16世紀後半～1617年頃、外堀・内堀は1617年～18年頃と考えられる。

溝1 幅4.5mをはかり、断面は台形を呈する。外堀に斜交して検出され、その交点で外堀掘削時にどのうと杭で土留めがおこなわれていた。埋土は自然堆積の状況を呈し、遺物はまったく検出されなかった。

溝2 幅6mをはかる断面台形の東西溝である。A区中央で屈曲し、東半部は溝1に平行して南東につづく。途中一部とぎれているが溝底に段差があったためであろう。埋土の状況から、人為的に一気に埋められたとみられる。

溝3 幅24m、深さ4～4.5mをはかる断面台形の南北溝である。溝1より新しく、すぐ西側の内堀とほぼ平行している。溝2との平面的関係は不明であるが、埋土の状況は共通しており同時存在と考えられる。規模は溝2と隔絶しており、位置的にも近世城郭以前の内堀に相当すると考えられる。

外堀 A区で南肩、B区で東と西の肩を検出した。この結果、外堀は幅約30m、深さ約5mをはかり、上部は25度、下部は40度の傾斜をもつ段階であることが判明した。堀の肩付近では、横木と杭の護岸施設を検出した。堀内堆積土は、砂礫層と泥質土質に2分され、前者は湛水後の早い段階で城側から流入しており、護岸施設はこうした流土対策であったとみられる。泥質土層は堀中央部で厚さ2mに及び、さらに約2m盛土されてその上面は明治期の水田となっている。盛土は土壘下約1mまでを削平して得たらしい。

遺物は、主としてA区の護岸施設付近から多数の陶磁器類・瓦類のほか漆器碗などの木製品や煙管など金属製品が出土している。泥質土層上面では瓦類が多数出土しており、廃城と堀埋め立てに伴って土壘上の築地塀を取り壊したものと思われた。

内堀 腰郭と三ノ丸を区画する堀である。B区で約75mを隔てて北東と北西の隅部分を検出した。深さ約3mをはかる段堀で、護岸の杭列を検出している。なお、内堀は、約100m南側で昭和60年度に調査している。

三ノ丸北郭では、野見神社のすぐ北側で東西約65m、南北45mの範囲を調査した(C区)。近世の武家屋敷地にあたり、多数の遺構が検出されたが、明治後半期以降の擾乱のために近世の生活面は全く失われており、武家屋敷にかかる建物や土地区画は明確にできなかった。

遺構面は、元和修築のさいに行われたと考えられる盛土層の下から2面検出した。上層・下層とも全面に柱穴・井戸・溝・土坑などが密に分布し、年代は上層が16世紀

後半、下層が12世紀代と考えられる。ただし井戸などでは19世紀に下るものがある。

遺構の中では、上層北端部で検出した幅8mほどと推定される段掘りの大溝（溝4）が注意される。溝中から漆椀のほか、永正6年（1509）銘の卒塔婆が出土しており、東郭で検出した溝1よりも古い段階の可能性が高い。

また井戸については全部で61基検出したが、大半が近世に属するもので下層で検出したものは9基と少ない。構造的には、近世以前の井戸が下段に桶、上段に石組・桶と井戸瓦・井戸桶・素掘りとさまざまであるのに対し、近世では石組1基をのぞきすべて井戸桶を使用していた。さらに上総掘りと称される井戸桶内に竹管で導水するのも7基あり、近世後期～近代初頭とみられる。

遺物は土器・陶磁器・瓦・木製品・金属製品と多様で、時期は弥生時代から明治時代に及ぶ。溝や井戸の一括資料のなかには比較的まとまったものが含まれており、今後の課題としたい。

高櫻城跡の調査は、近世城郭の規模を確定する作業のなかで中世城郭に関する資料を蓄積している段階にある。近世の堀沿い以外では今後さらに古い時期の遺構が確認される可能性が高く、その点今回紹介した中世の堀割や集落遺構は、これまで高櫻城下層遺跡と総称してきた遺跡の実態を知る端緒をひらいたといえよう。

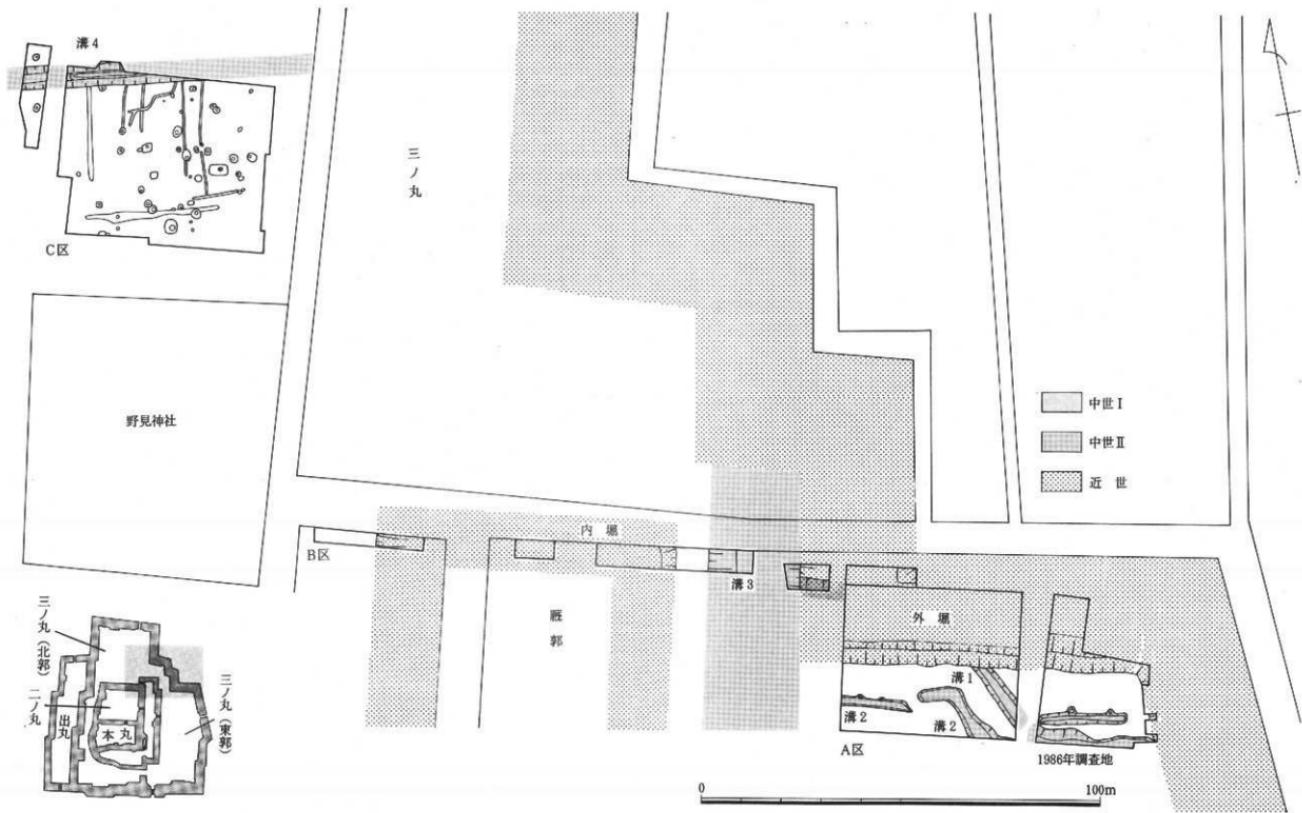


图 2. 遗構配图

## II 指定文化財

### 慶端寺仏像の指定

さきに、大阪府指定文化財にされていた慶端寺仏像は、平成元年3月28日付けで、国文化財保護審議会から文部大臣に対し、重要文化財（美術工芸品）として新指定する旨答申があり、平成元年6月12日付けで国指定となる。

〈種 別〉 重要文化財

〈名 称〉 木造菩薩坐像一軀

〈所 有 者〉 高槻市昭和台2-25-12 慶端寺

〈時 代〉 平安時代

〈指 定 日〉 平成元年6月12日

〈指 定 理 由〉 櫃とおもわれる一材から両脚部を含むほぼ全容を彫出し、内削りも施さない一木造の像である。目鼻立ちの大きい異国的な相貌に際立った特色をもち、平安時代初期でも早いころの優品として注目される。

〈説 明〉 カヤの一木を用いた代用檀像の古作で、おそらく觀音菩薩を表したものとみられる。胴部が引き締まり、足膝部の奥行きが深くとられている点や、髪・肉身・衣文などの感触は、奈良時代の乾漆像の様風を木彫に移しかえた感がある。一方、冠帯が肩のあたりで大きく翻るあたりは、檀像に倣ったものであろう。また、当初の本像は、上半身がかなり後方へ反ったポーズをしていたことが、地付面の構成の修正によって明らかであり、これも一木造の古式のものに多い。

本像の製作年代は一応9世紀とするのが適当であろうが、以上のような点からすれば、8世紀に遡る可能性も考えられよう。檀像系古密教尊像に多くみられる個性的な表現として、長く引かれた秀でた眉、眼頭が鼻梁にまで及ぶ切れ味の鋭い眼、そしてやや分厚い唇など、唐を経て伝えられたインド風を偲ばせるものがある。わが国代用檀像の初期作品のなかに、新たに個性的な一例を加えることになった。

### III 指定文化財の保存・整備

#### 1. 清福寺太子堂移築復元工事（図版第6）

〈名 称〉 清福寺太子堂

〈移 築 地〉 高槻市清福寺町848番地

〈解体工期〉 昭和63年9月9日～9月28日

〈復元工期〉 昭和63年12月5日～平成元年3月15日

高槻市有形文化財建造物第2号の清福寺太子堂（昭和63年3月指定）は、近年屋根などの破損が著しく、倒壊寸前の状況となつたため、隣接地へ移築復元することになった。工事は、高槻市文化財保護審議委員・京都大学名誉教授川上貢氏が監修した。  
〈移築復元工事の意義〉

江戸時代の清福寺は旧芥川村にふくまれ、大工集団が集まる、いわゆる大工村であった。大工集団である「大工組」は、江戸時代をつうじて京都御大工頭を世襲していく中井家の支配下にあったが、組同士・組内部には中井家からの伝達事項などを知らせる連絡網があった。この大工同士の密接な交流のよりどころとして、太子信仰があり、聖徳太子は大工の職業神として、崇められていた。とくに、2月20日の忌日には、大工が一同に集まり、会食するのが習わしであった。その際、組の運営や交際について協議されることが多かった。

清福寺町の太子堂は、このような大工集団の象徴であり、大工達の太子信仰を有形的に示すものである。しかし、かつての大工組の存在した地域の多くでは、清福寺町の太子堂のような建物は現存せず、極めて貴重な建物であるといえる。また、太子堂造立や修理のための奉加寄進の依頼や寄附が記録にみられ、その工事が当時の人々にとって大きな負担である一方、摂津地方大工組の密接な関係を示し、太子信仰の篤さがうかがえる。

このように、清福寺周辺地域の歴史的記念物であり、地域にねざした文化財を後世に伝え、同時に地域文化を知るうえで、太子堂の復元移築は有意義なものである。

#### 2. 阿武山古墳環境整備工事（図版第7）

〈名 称〉 阿武山古墳

〈所 在 地〉 高槻市大字奈佐原

〈工 期〉 昭和63年12月20日～平成元年3月15日

阿武山古墳は、昭和9年に京都大学地震研究所の増設工事によって発見され、石室とその内部に納められた棺が調査された。調査では、夾紵棺や玉枕・金糸などが出土し、他に例をみない葬制であることが判明し、「貴人の墓」としておおきく反響をよんだ。出土品は調査後、埋めもどされたが学術上重要な古墳であると位置づけられている。

昭和57年に、文化庁から史跡指定の意向が示され、同年不明確なままであった古墳の外形を高槻市・茨木市教育委員会が合同で発掘調査を実施した。その成果をもとに、翌58年8月30日に文部大臣から史跡指定を受けた。

昭和62年には、「阿武山古墳X線写真研究会」によって、被葬者の生前の体格や冠帽・玉枕の復元がおこなわれ、この古墳の被葬者が藤原鎌足であるとの説が再提示された。しかし、発掘調査によって出土した須恵器の年代観からは、被葬者が藤原鎌足とするには問題点が残っている。

いずれにせよ、古墳時代終末期の葬制や三島地方の古代史を考えるうえで、極めて重要であり、おおくの見学者がおとずれている。このため古墳の保存と見学者への普及啓発を図るために、下記のような環境整備工事をおこなった。

- ①史跡指定地の境界標および囲柵の新設
- ②管理用通路および石室周辺の舗装など
- ③説明板などの新設
- ④史跡標柱設置

### 3. 説明板などの設置

市内各地域の古墳などを訪れる見学者の理解を深めるために、平成元年度に説明板・駒札・プレートを市内8ヶ所に設置した。設置場所は下記一覧表のとおりである。

名 称	設 置 場 所	内 容	設 置 理 由
芝 谷 古 墳	芝谷町中央公園	駒 札	新 設
塙 原 O 1 号 墓	塙原北公園	"	"
塙 原 E 1 号 墓	大和南公園	説 明 板	建て替え
塙 原 E 2 号 墓	郡家新町702-3	"	新 設
今 城 塙 古 墓	公園墓地	"	"
安 满 山 A 1 号 墓	埋 文 セン ター	"	"
弥 生 時 代 復 元 住 居	"	"	"
横 穴 式 石 室	阿武山古墳	プレート 3 基	"
阿 武 山 古 墓			

設置場所一覧表

## IV 文化財保護啓発事業

### 1. 昭和63年度

#### (A) 現地説明会

・昭和63年 7月30日

高槻城三ノ丸跡（参加人数120人）

・平成元年 3月26日

新池遺跡Ⅰ区（参加人数850人）

#### (B) 展覧会

・昭和63年 8月26日～28日

「夏休み子供文化財教室－古代の腕輪つくりー」（参加人数延べ287人）

#### (C) 歴史講座

『古代の高槻』（参加人数延べ368人）

・平成元年 3月 7日

「平城京と畿内」 毛利光俊彦（奈良国立文化財研究所室長）

・平成元年 3月15日

「長岡京と山陽道」 高橋美久二（京都府立山城郷土資料館々長補佐）

・平成元年 3月20日

「三島評から嶋上郡へ」森田克行（高槻市教育委員会技師）

・平成元年 3月28日

「難波宮と攝津」 中尾芳治（大阪市文化財協会）

#### (D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数5,205人（延べ68,240人）

#### (E) 市立歴史民俗資料館入館者

総数17,273人（延べ120,389人）

### 2. 平成元年度

#### (A) 現地説明会

・平成元年12月 3日

新池遺跡Ⅱ区（参加人数1,120人）

#### (B) 展覧会

・平成元年 7月28日～30日

「夏休み子供文化財教室－古代の技術（彫金と象眼）－」（参加人数延べ287人）

(C) 歴史講座

・平成2年3月24日

『よみがえるハニワのふる里』（参加人数270人）

「新池遺跡にみる“埴盧”」 森田克行（高槻市教育委員会技師）

「古墳祭祀と埴輪」 和田晴吾（立命館大学助教授）

「新池遺跡と土師氏」 和田 萃（京都教育大学教授）

(D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数5,628人（延べ73,868人）

(E) 市立歴史民俗資料館入館者数

総数14,140人（延べ134,529人）

## V 資料紹介

### 高櫛城跡出土の将棋駒

鐘ヶ江 一朗

平成元年10月から平成2年3月まで、近世高櫛城の三ノ丸北郭の一部を調査した。調査地は武家屋敷地と推定される地域で、調査面積は約2,500m<sup>2</sup>である。近～現代の大規模な擾乱によって、近世の遺構面は削平されていたが、12～19世紀にかけての井戸61基や多数の柱穴・溝を検出した。

ここで取り上げる将棋の駒は、調査地南西部の井戸41一括遺物の一部である。近世に属する将棋駒の出土例は比較的少ないなかで、ふつうの将棋の駒とともに「中将棋」とみられる駒が含まれており、今回紹介することにした。

「中将棋」は、盤面12×12、駒数92枚を使う将棋の一種である。14世紀ごろから行わられ、江戸時代にも愛好されたものの、ルールが複雑で勝負に時間がかかりすぎるためいまではほとんど行われていない。これをさらに発展させたものが「大将棋」で、駒数130枚を使うとされる。中将棋と共に通する駒が多く、今回出土例ではいずれとも決めかねるが、大将棋は実際に指されていたかどうか疑わしいといわれている。そのため以下では「中将棋」、及びそれと区別するため盤面9×9、駒数40枚の将棋（現在の将棋と同じ）を「小将棋」として記述する。

#### 〔出土遺構〕

井戸41は、不整円形の掘形に直径約0.8mの桶状の井戸枠を納めたと考えられる井戸で、深さ約0.75mをはかる。井戸枠を抜いてから埋め戻しており、出土品は埋め戻しのときに投入されたらしく埋土の層位は分別できない。なお掘形埋土には全く遺物を検出しなかった。

遺物は、底に近い方に木製品（木箱、付札、刀鞘・柄、駒など）や金モール・土師皿・中位に棲瓦片、中～上位で土師皿・陶磁器類をまとめて検出している。出土陶磁は肥前陶磁IV期にあてられ、この井戸の廃絶はおおむね18世紀末～19世紀初め頃と思われる。

#### 〔中将棋の駒〕（図1・図版第8）

21枚出土した。幅1.2～1.5cm、厚さ0.3cmほどの極目の薄板から、高さ1.5～2cmの

五角形を刃物で切り出し、墨書をほどこしてある。当初は携帯用の小形駒かと思っていたところ、「奔猪」や「獅子」の存在から中将棋の駒とわかったものである。表1に中将棋の駒の並べ方と駒の成り方を示した。

判読・特定できた駒は、歩兵〔と〕4、横行〔奔猪〕1、豊行〔飛牛〕1、飛車〔龍王〕1、麒麟〔獅子〕1、銀将〔豊行〕1の9枚、ほかに王将かと思われる1枚がある。各駒には朱線で動かし方が記されており、その痕跡が認められるものがある(注)。

これらは寸法・形ともに不揃いで、いかにも手づくりを思わせる。素材については、一見してスギ材と判断されるものとそうでないものの2種がある。駒の種類によって材や大きさを揃えるようなことはしていないが、墨書の字体や筆運びはいずれもよく似ており、同一人の手によるものと考えられる。

#### (小将棋の駒) (図2・図版第9)

26枚出土した。駒の種類や大きさ、形などいまとほとんど変わらぬものが出土している。これらは1と2を除き、すべて字を彫り込み、そこに墨(14のみ朱)を入れたものであって、描駒(1・2)と影駒(3~26)に分けることができる。

(描駒) 2点とも歩兵である。1は両面とも彫り込みに漆で描いたもの、2は表面が彫り込み、裏面が漆塗りである。この2つは高さに比べて幅が狭い点でも、他の影駒とは趣が違っている。

No.	名 称	高さ	幅	厚さ	備 考
1	(歩兵)	1.4	1.2	0.2	裏面・と
2	(歩兵)	1.5	1.2	0.2	“
3	歩兵	1.5	1.3	0.2	“
4	(“)	1.8	1.4	0.2	“
5	(横行)	2.0	1.4	0.3	奔猪
6	(豊行)	1.7	1.2	0.2	飛牛
7	飛車	1.8	1.4	0.2	龍王
8	麒麟	2.1	1.4	0.2	馬
9	銀将	1.8	1.4	0.2	(豊行)
10	王将?	1.9	1.5	0.3	朱点透存
11	不 明	1.7	1.3	0.3	“
12	“	1.7	1.3	0.2	“
13	“	1.9	1.5	0.2	“
14	“	2.1	1.3	0.2	“
15	“	1.7	1.5	0.3	“
16	“	1.8	1.5	0.3	“
17	“	2.0	1.3	0.2	“
18	“	1.9	1.4	0.3	“
19	“	2.0	1.5	0.3	“
20	“	2.0	1.5	0.2	“
21	“	2.2	1.5	0.3	“

表2 中将棋の駒一覧 (単位cm)

No.	名 称	高さ	底 幅	厚さ	備 考
1	歩 兵	2.6	1.7	0.8	漆の描駒
2	“	2.8	*1.7	0.7	表は影込
3	“	*2.5	2.1	0.8	形込後、巻入
4	“	2.6	2.0	0.8	(以下同じ)
5	“	2.5	2.1	0.9	
6	“	2.6	2.1	0.8	
7	“	2.7	2.2	0.9	
8	“	2.8	*2.1	0.9	
9	“	2.7	*2.2	1.0	
10	飛 車	3.1	*2.6	1.0	
11	“	3.0	2.7	1.1	
12	角 行	3.0	2.8	1.2	
13	“	3.1	2.7	1.1	
14	香 車	2.9	2.3	1.0	
15	“	2.8	2.2	1.0	
16	桂 馬	2.7	2.6	1.0	
17	“	2.7	2.5	0.9	
18	“	2.7	2.7	1.0	
19	“	2.8	2.5	0.9	
20	銀 将	2.9	*2.5	0.9	
21	“	2.7	2.6	0.9	
22	金 将	3.0	*2.4	1.2	
23	“	3.1	2.6	1.2	
24	“	3.1	2.7	1.2	
25	王 将	3.2	3.0	1.1	表のみ朱書
26	“	3.2	3.0	1.1	王将か

表3 小将棋の駒一覧 (単位cm, \*は現存長)

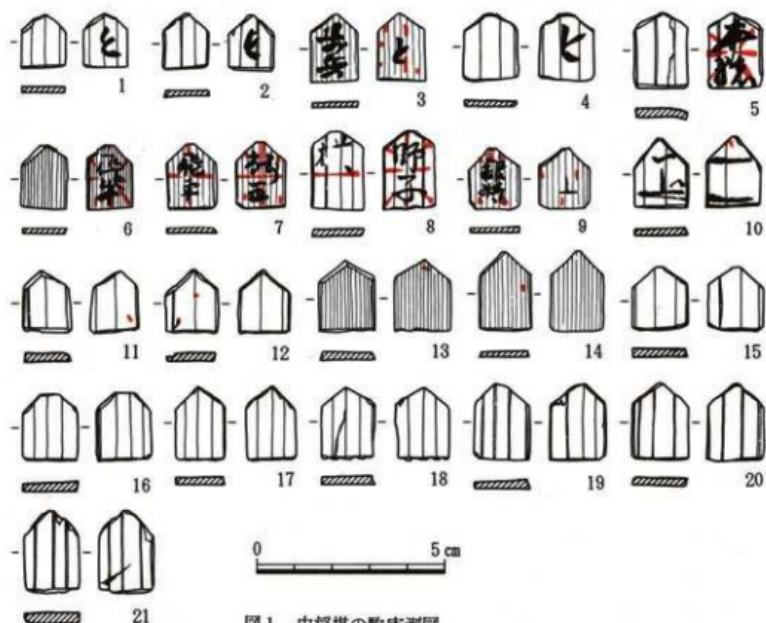


図1. 中将棋の駒実測図

	仲人																					
歩兵																						
横行	竪行	飛車	龍馬	龍王	獅子	奔王	龍王	龍馬	飛車	竪行	横行											
反車		角行		盲虎	麒麟	鳳凰	盲虎		角行		反車											
香車	猛豹	銅將	銀將	金將	王將	醉象	金將	銀將	銅將	猛豹	香車											

表1 中将棋駒の並べ方(左)と成駒(右)

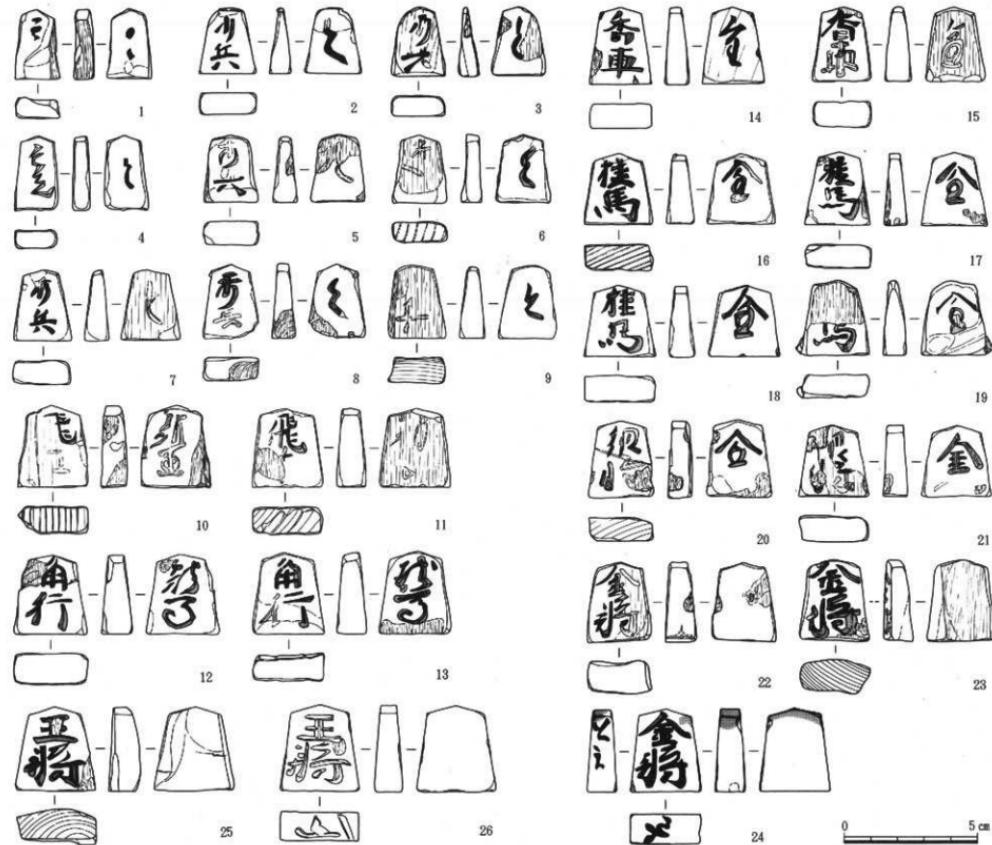


図2. 小将棋の駒実測図

(彫 駒) 8種24点ある。その内訳と各部の寸法を表3に示した。駒の種類ごとに比較的よくまとまつた数値を示し、さきに紹介した中将棋の駒とは対照的といえる。しかし書体はさまざまあって、たとえば香車や金将にみられるように、同じ種類の駒でも彫り手または書き手が違うとみられるものが混じっている。また24(金将)には、下面及び左側面に墨書がある。所有者または製作者の符丁と思われる。

駒の素材については未確定であるが、年輪が明らかな6・9・11・16・20・23・25はスギ材と思われる。

これらの駒は、種類や枚数からみておそらく1組で使用されたと思われるが、上記のように材質や書体の異なるものが含まれている。なかでも14と24は、他の駒に比べて書体・彫りともに優れ、摩耗も少なく良好な遺存状況にある。一方、スギ材とみられる一群の木取りは一定しておらず、とくに金将や王将など、裏返す必要のない駒の上面は湾曲している。あるいは桶板材などを再使用した可能性もある。

小将棋の駒にみられるこうしたばらつきを、入手当初のこととみると、失った駒を手製のもので補って使った結果か、判断する材料を欠く。いずれにせよ、いまの目からみれば不揃いにうつる駒を手に、勝負に熱中する二人の姿が思い描かれる。同時に出土した中将棋の駒は、あるいは彼らの将棋好きが高じた結果、自作したものかもしれない。駒面に記された朱点を頼りに、ああだこうだと時間をつぶす、泰平の世の武士なればこそその仕業に見える。

本稿執筆にあたっては、社団法人将棋博物館の小泉信吾氏にたいへんお世話になりました。この場をかりてお礼申し上げます。

(注) (6)の裏面〔飛牛〕は、駒の動きを示す朱線が八方に引かれている。江戸時代棋を網羅した『象戴図式』では、飛牛の動き方を「上下四角走」と記しており、今回出土品は食い違いをみせている。しかし、赤外写真からは1字目「飛」の墨書が明らかなので、ここでは(6)を竪行(飛牛)としておく。

#### 【参考文献】

- 小泉信吾「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』 第1集  
編: 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 水野和雄「将棋の流行」「古代から中世へ」「古代史復元」10  
講談社 1990年
- 増川宏一「将棋 I・II」 法政大学出版局 1977・1986年

## VI 研究ノート

### 大阪北部の古代後期・中世土器様相

橋本久和

#### 1. はじめに

本稿は高槻市における最近の古代後期・中世土器様相に関する資料を紹介し、若干の問題点を述べようとするものである。

筆者はかつて、『上牧遺跡発掘調査報告書』において、「中世土器研究予案」とする章を設けた。そのなかで、中世土器の編年と瓦器椀の地域色について論じた。この論文を契機とし、中世土器の地域色の把握と編年論が各地域において精力的に論じられるようになった。その結果80年代前半には11世紀から14世紀にかけての編年大綱ができあがった。土器研究の活発化に伴い国産陶器、輸入陶磁器の研究もおおいに進展した。加えて、最近の研究動向は、中世土器の成立をめぐる諸問題や近世移行期について論議が活発となっている。

このようななかで、筆者も古代から中世への移行についてしばしば論じたが、その際古代土器の変容を語らずして、何も語ることはできない。従来、古代的な土器様相が崩壊していく平安時代の土器研究は、地域差が顕著であり、これを扱う研究者は少なかった。最近ようやくこの時期を研究テーマとする研究者も多少増加し、90年12月にはシンポジウム「土器からみた中世社会の成立」が開催された。このシンポジウムは古代から中世への移行を土器・陶磁器から研究するうえでひとつの到達点といえるが、なお各地域における資料蓄積が課題である。このため、本稿では、編年基準となるような最近の調査資料を中心に紹介してみたい。

#### 2. 大阪北部の調査・研究状況

各市町とも宅地開発、市街地再開発による調査が主体を占め、調査面積は比較的小規模である。古代・中世関係の遺構・遺物は従来に増して報告されるようになり、最近は戦国期以降の城郭関係の調査も実施されるようになった。

大阪府最北端の豊能町・能勢町は山間部のため、従来は開発行為も少なく、能勢町出野の若宮八幡宮経塚が知られている程度であった。80年頃から国道173号線拡幅工事

や廻場整備に伴い調査が実施されるようになった。とくに、調査が継続した能勢町大里遺跡や中筋遺跡などでは古代から中世にかけての資料が知られるようになった。

このようななかで、大阪府教委技師を中心に能勢町内の埋蔵文化財に関する調査・研究会が実施され、そのテーマとして古代・中世土器の生産・流通・消費がとりあげられた。その成果は『能勢町における埋蔵文化財の調査!』としてまとめられている。事実誤認も多少みられるが、能勢地方の状況を知るうえで貴重な一冊である。

これとは別に、大阪府関係の調査資料とともに森隆氏が「能勢の古代末・中世土器」をまとめ問題点を明らかにしている。

池田市では、五社神社（鉢塚古墳）経塚が從来から知られているが、外容器の東播系須恵器甕・鉢は一部の研究者以外あまり注目されていない。

池田城は戦国期の北摂における争乱の舞台となったが、68年・69年に本丸跡の発掘調査が実施され、礎石を伴う建物跡や庭園跡などが検出されている。また、最近は本丸跡南側に大手口が存在することや内堀も確認されている。89年度からは池田城整備計画に伴う調査が実施されるようになり、全容解明が期待されている。遺物類は未報告のものが多いが、土師器皿や染付類の報告が行われるようになった。

この他、神田北遺跡などで、11・12世紀の楠葉型瓦器椀や土師器杯・皿が出土しているが、調査面積が小さくまとまったものではない。

豊中市では、新免遺跡・服部遺跡において10世紀代の黒色土器を中心とした遺物が出土しているのをはじめ、上津島南遺跡では楠葉型・和泉型瓦器椀の共伴する資料が知られている。また、ここでは黒色土器B類椀の良好な資料も出土している。しばしば調査が実施されている小曾根遺跡では、12・13世紀の造構・遺物が豊富に出土している。

箕面市では、13世紀前後から15世紀にかけての如意谷遺跡の調査で楠葉型・和泉型瓦器椀をはじめ中国製陶磁器・国産陶器など豊富な資料が知られている。

吹田市では、最近古代から中世にかけての資料が蓄積してきた。各時期にわたるものとして五反島遺跡があげられるが、この遺跡は祭祀的な意味あいも指摘されているが、瀬戸内西部の回転台土師器が目立っている。古代の資料としては垂水南遺跡の河に投棄された遺物群があり、黒色土器を中心に9世紀代の良好な資料である。中世では、12世紀以降の良好な資料があり、主なものとして護国寺旧伽藍・都呂須遺跡・藏人遺跡があげられ、和泉型瓦器椀の胎土分析も行われている。

茨木市では、東奈良遺跡・郡遺跡・宿久庄遺跡・中河原西遺跡などで楠葉型・和泉

型瓦器椀が出土している。また、免山篤氏採集の中国製陶磁器を筆者が紹介したことがあるが、いずれも断片的なものである。

このようななかで、中条小学校遺跡では11世紀前半から中頃とみられる黒色土器A類椀と土師器皿が出土している。この資料は後述するように、大阪北部における瓦器椀成立直前の様子を知るうえで貴重である。

島本町では資料の蓄積は少ない。そのなかで、島本第1小学校造改築によって調査された広瀬遺跡では9世紀以降の資料が断片的であるが知られている。

目につくものとして、京都系の軟質・硬質の綠釉陶器、近江系の綠釉陶器がある。13世紀代の柿葉型瓦器椀と土師器杯・皿もあるが、土師器杯・皿は口縁を二段ナデするものが多く京都系の影響が強く感じられる。中国製陶磁器も白磁IV・V類碗をはじめ、同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗がある。

京都に最も近い島本町には、古代の東大寺領水無瀬庄や承久の乱の舞台となった水無瀬離宮もあり、今後の調査に期待される。

本市では、個人住宅の改築、道路・下水道整備に伴う調査が多く、多量の一括資料を得ることは少ないが、相当資料が蓄積してきた。

古代では、嶋上郡衙跡・郡家今城遺跡・大藏司遺跡において9～11世紀の遺物類が得られている。とくに、郡家今城遺跡・大藏司遺跡では黒色土器を中心とした一括資料が多い。また、緑・灰釉陶器も嶋上郡衙跡・郡家今城遺跡を中心に認識してきた。中世も嶋上郡衙跡の調査が重要で、これに安満遺跡・梶原南遺跡などが加わり、瓦器椀を中心とした遺物類を豊富にしている。

近時は高槻跡関係の調査が進行しているため、戦国期から近世にかけての資料も知られるようになったが、出土遺物は多量であり全容を知るのに多少の時間がかかる。

### 3. 高槻市出土資料の検討

編年や年代観の基準となるものを中心に平安時代以降の土器様相を概観するが、記述を進めるにあたって、次のように三時期に分けた。

I期は黒色土器椀の使用される時期で、黒色土器B類椀出現を境に前半（a期）・後半（b期）に分ける。II期は瓦器椀の使用される時期で、外面ヘラ磨きの省略と相対的に製作が簡略化される時期を境に前半（a期）・後半（b期）に分ける。また、土器様相や技法・形態変化をもとにa期・b期をいくつかに細分した。

III期は瓦器椀消失以後である。I期・II期に較べ資料数が少ないため細分しないこ

とした。

## 1) I期

### 郡家今城遺跡(図1~3)

70年の三島高校建設時以来、数多くの調査が実施されてきた。主として、校舎北側から資料が出土している。I期の資料に限られ、それ以降は知られていない。

1~12は87年度調査の井戸2出土資料で、杯Aは口径15~16cmを測るもの(1~3)と口径14cm前後(4~8)の2タイプがある。皿Aもやはり15cm前後のもの(5~7)と14cm程度のもの(6)があり、同一器種内での法量分化がみられる。手法的には外面をヘラ削りするc手法と体部未調整で口縁のみ横ナデのe手法がある。比率はc手法が7、e手法が3である。杯B(9~10)は外面をていねいにヘラ磨きしている。黒色土器は内外面をていねいにヘラ磨きする杯Aの破片が若干出土している。緑釉陶器は底部円板・軟質で淡黄緑色の釉が全面に施されるが剥離が著しい。皿(11)と碗(12)があり、洛北窯の製品とみられる(図版第18a)。

13~22は70年度調査の井戸8出土資料で、土師器杯・皿は数量比を論じる程ではないが、e手法によるものが多数である(図版第10)。皿A(13~14)、杯A(15~16)とも口径約14cmのものと約15cmのものがある。杯B(17)はc手法によるもので、前述の井戸2出土例よりかなり矮小化している。黒色土器は杯A(18~19)、杯B(20~22)があり、いずれも外面はc手法による。ヘラ磨きが加えられているが、磨耗のため良く判らない。内面はていねいなヘラ磨きが観察でき、杯Aでは暗文もみられる。須恵器杯A(23)と硬質・蛇の目高台の緑釉陶器(24)が伴出している(図版第19a)。

25~27は74年度調査井戸5出土資料で、e手法の土師器杯A(25)と黒色土器杯A(26)、硬質の緑釉陶器(27)が出土している(図版第19b)。

28~35は88年度調査の井戸2出土資料、36~47は87年度道路改良関係調査の井戸出土資料である。土師器杯・皿はすべてe手法によるもので、杯Aの法量は口径14~15cmにはほぼ統一されている。黒色土器は杯Bのみで、外面ヘラ削り後、比較的ていねいなヘラ磨きを加えている。

88年度井戸2の黒色土器は口径15~16cmにはほぼ限られるが、87年度道路改良井戸では口径が17cm以上、20cmを測るもの(45~47)もある。土師器杯・皿からみるとほぼ同時期とみられるが、黒色土器の法量を考慮すると88年度井戸2の方が後出とみられる。

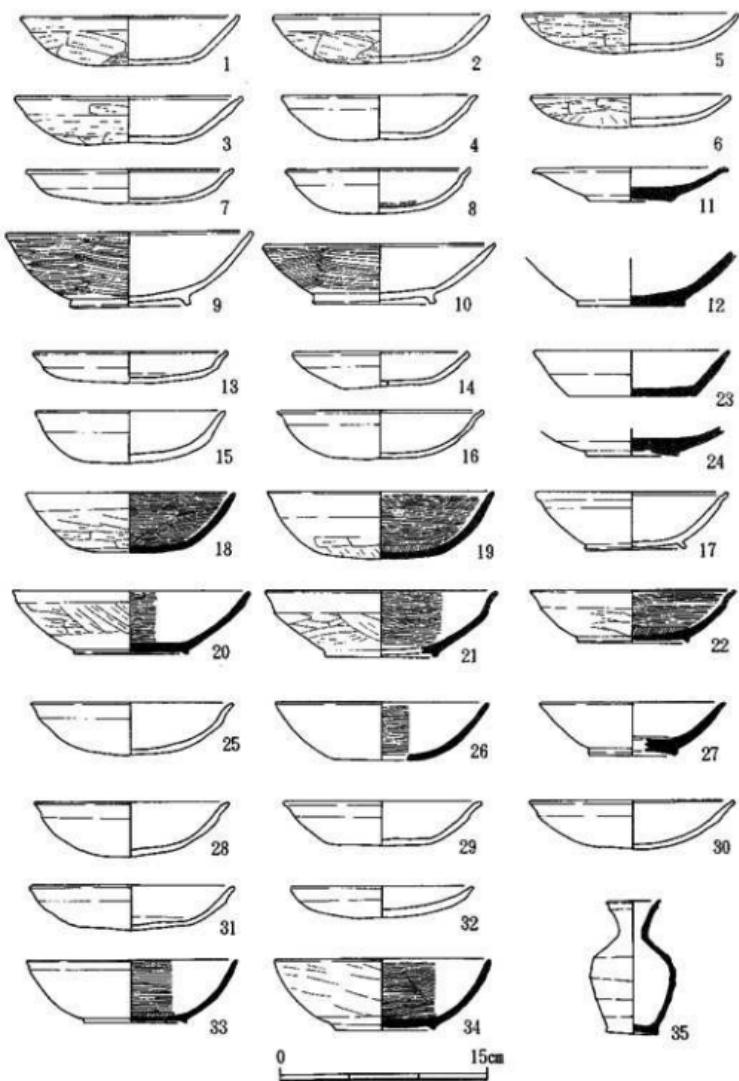


図1. 郡家今城遺跡 87年度井戸2 (1~12), 70年度井戸8 (13~22)  
74年度井戸5 (25~27), 88年度井戸2 (28~35)

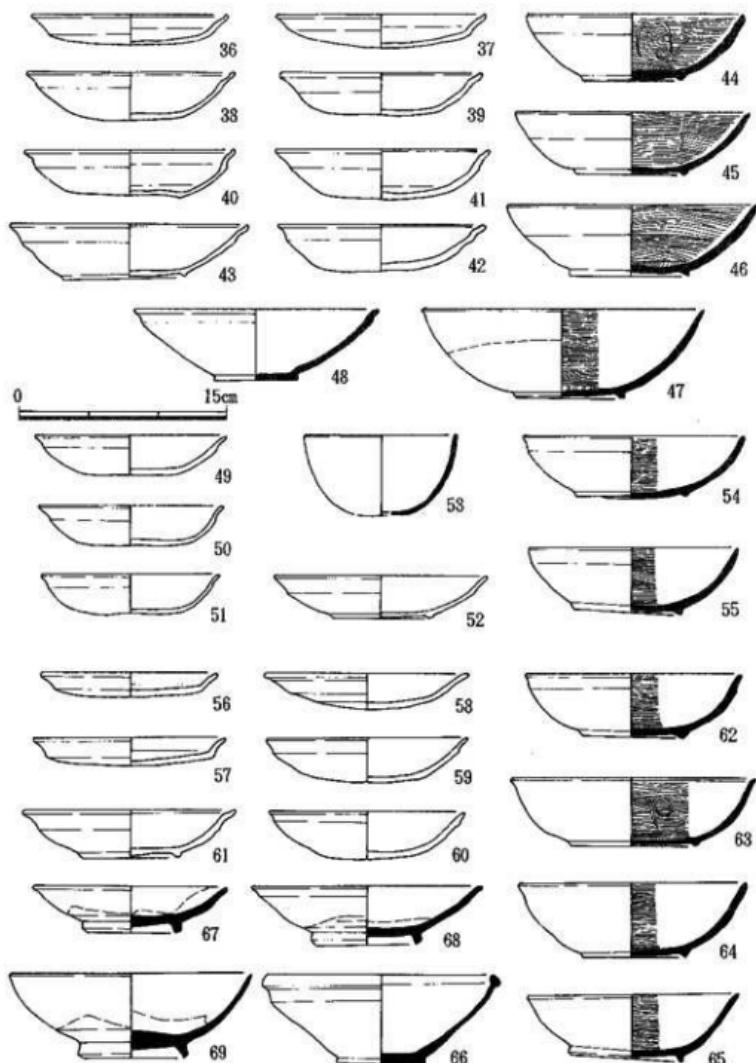


図2. 都家今城遺跡87年度道路改良井戸 (36~48)

大蔵司遺跡87年度土壤1 (49~55), 84年度土壤2 (56~69)

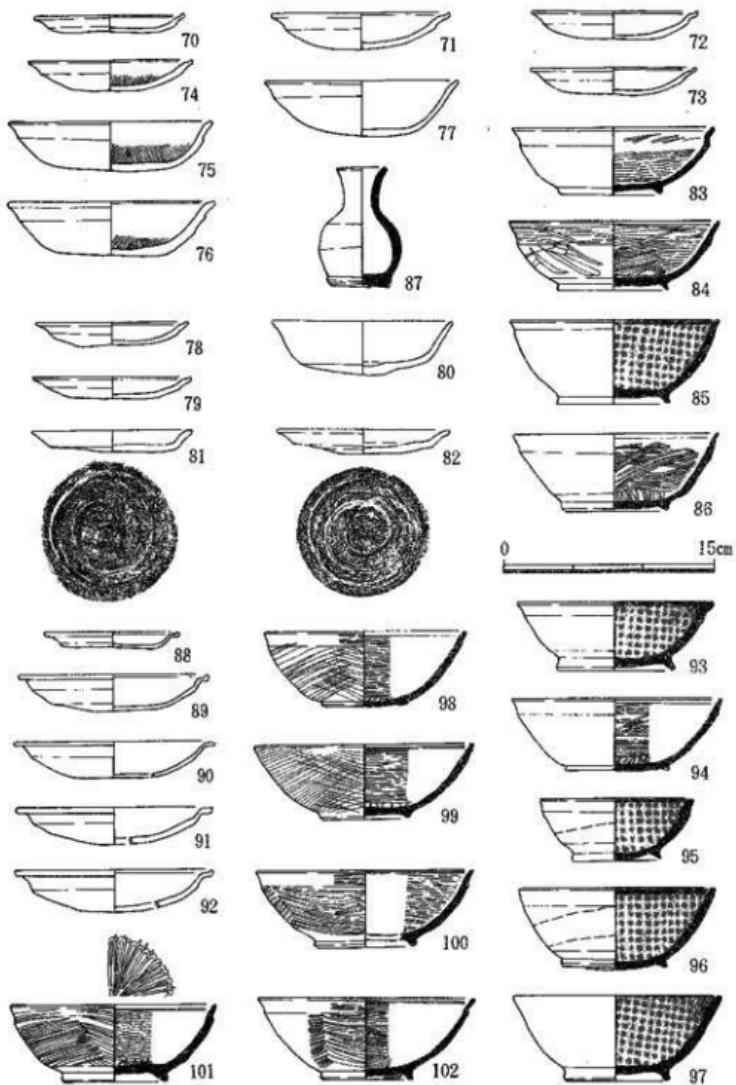


図3. 郡家今城遺跡70年度井戸5 (70~87)

鷲上郡衙跡6 J地区井戸1 (88~102)

両方の井戸から亀岡市篠塚産の須恵器が出土している。88年度井戸2からは小型の壺(35)、87年度道路改良井戸からは椀(48)が出土している。伊野近富氏編年のE期(9世紀中葉とする)、G期(10世紀前葉)に相当する。

70~86は70年度調査井戸5出土資料で、井戸内部と井戸廃棄後の上層から出土したものに分けられる(図版第10・11)。井戸内部から出土した土師器杯Aはe手法で、

口径14~15cmを測り内面に刷毛目のみられるもの(75~77)もある。皿Aは口径12~13cmで、刷毛目のみられるもの(74)もあるが、71~73は口縁が屈曲し、胎土も比較的精良であり、上層の土師器皿に近い。黒色土器は杯B(83・84)で、内外面ヘラ削り後、ていねいなヘラ磨きを施す。須恵器小型壺(87)が出土している。

上層からは京都系の口縁が屈曲する土師器皿(70)と、これに近い形態の皿A(78・79)が出土している。80~82は底部に回転ヘラ切り痕を有した、いわゆる回転台土師器である。皿A(81・82)と杯A(80)があり、胎土は粗く、淡褐色である。黒色土器は、口径約15cm、器高約6cm、高台径約8cmの完形品2点があり、外面のヘラ削り、ヘラ磨きはわずかしかみられず、内面のヘラ磨きも省略気味である(85・86)。器形的には杯Bとするより椀の方がいいであろう。井戸内部はIa期、上層はIb期として位置づけられる。

#### 大藏司遺跡(図2)

49~55は87年度調査の土壙1、56~69は84年度の土壙2出土資料である。調査区も隣接し、同時期の資料である。土師器杯・皿は84年度土壙2に1点のc手法皿A(58)があるのみである。杯B(52・61)は高台がかなり形骸化し、最終段階のものであろう。

黒色土器は87年度土壙1で小型の鉢(53)があるだけで、他は杯Bのみである。法量は口径15~16cmにはほぼまり、63のように内面に暗文が施され杯Bの形態をとるものより、64・65のように椀とした方がいいものを中心とする。

84年度土壙2からは尾北窯・篠岡S4'期の灰釉陶器皿・椀(67~69)と、篠塚産の鉢(66)が出土している。鉢は伊野氏のG期(10世紀前葉)にほぼ相当する。

他に、散発的に黒色土器B類椀(図5-126・128)が出土するが、128は外面のヘラ磨きがみられず、瓦器椀出現後のものかもしれない。

#### 島上郡衙跡(図3・4)

88~102は80年度調査の6J地区井戸1出土資料である。土師器杯は口縁の屈曲するものが中心で、Ia期のもの(89)もあるが、小皿(88)と同時期のもの(90~92)

が多い。

黒色土器はA類杯B（93・94）と椀形態のもの（96・97）、小椀（95）もある。椀は外面を簡単にヘラ削りしたあとヘラ磨きしている。この井戸からは黒色土器B類椀も出土しているが、101のように厚い高台で内底面のヘラ磨きが菊花状のものや、高台の不安定なもの（98）があり、器形的に安定していない。I b期でも前半と捉えているが、出土した緑釉陶器には近江系の末期のもの（426・427）があり、井戸埋没年代は幅をもって捉える必要がある（図版第20a）。

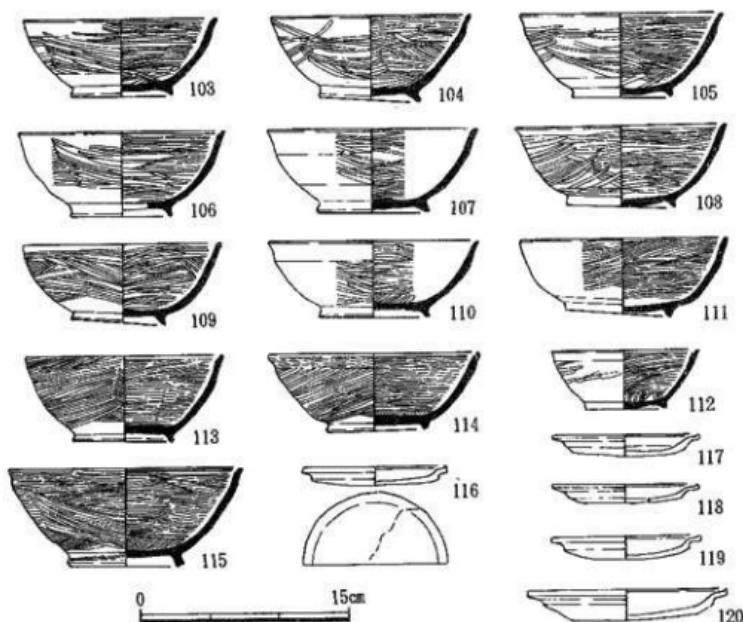


図4. 鶴上郡衙跡 70地区井戸 (103~120)

103～120は90年度70地区井戸出土資料で、瓦器椀出現直前の様相を知るうえで重要である。土師器皿、黒色土器A類椀・B類椀、縁軸・灰釉陶器が出土しており、同一時期のものとして捉えられる（図版第11）。

土師器皿は口径10cm代で、いずれも口縁が屈曲し、搬入品とみられるものも存在するが、淡褐色で在地産のものが中心である。平安京内膳町跡SK18にはほぼ相当する（116～120）。なお、粘土板結合痕にみられるもの（116）があり、成形法が良く判る。

黒色土器はA類椀（103～112）とB類椀（113～115）が存在するが、4つに分類できる。①は口径15cm前後、器高6cm前後、器高指数40前後を測り、体部に丸味をもつ（103～109・113）。②は①より器高がやや低く、器高指数35～37を測る（110・111・114）。③は口径17cm、器高7cm、器高指数41を測る大型の椀である（115）。④は口径11cm未満の小椀である（112）。①・②はA類椀、B類椀に共通しているが、A類椀には口縁端内側の沈線が無く、内外面のヘラ磨きが太い。このヘラ磨きはA類椀の外面では波状に近いが乱雑であるのに対し、B類椀の外面は3分割の波状を呈している。また、B類椀は底部外面までヘラ磨きされている。A類椀・B類椀とも、粘土紐巻きあげによって成形されたことを示唆する痕跡や底部の盛りあがりが認められる。

#### 安満遺跡（図5）

88年度調査の土塙3は島上郡衙70地区井戸出土例に近いもので、土師器皿（121・122）は厚く、口縁部の屈曲はゆるい。黒色土器はB類椀のみで、深手のもの（123・124）とやや浅手のもの（125）がある。外面のヘラ磨きは磨耗のためよく判らないが、底部外面の磨きは省略気味である。

#### 2) II a期

##### 大藏司遺跡（図5）

84年度調査の土塙1からは口縁の屈曲する土師器皿（129～145）・杯（150・151）・高台付杯（152・153）が出土している。これらに、底部ヘラ切りの皿（147・148）と糸切りの皿（146）・杯（149）が混じっている。黒色土器B類椀の破片（154）があるが、この時期には瓦器椀が出現しているものとみられる。

##### 津之江南遺跡（図5）

86年度の水路改修工事に伴う発掘調査で良好な瓦器椀資料が出土している。溝3出土の瓦器椀（160・162）はいずれも口径15.6cm、器高6cm、器高指数38.5を測る。内外面とも密なヘラ磨きを施し、内底面には刷毛目を施したあと大きな鋸歯状暗文を施

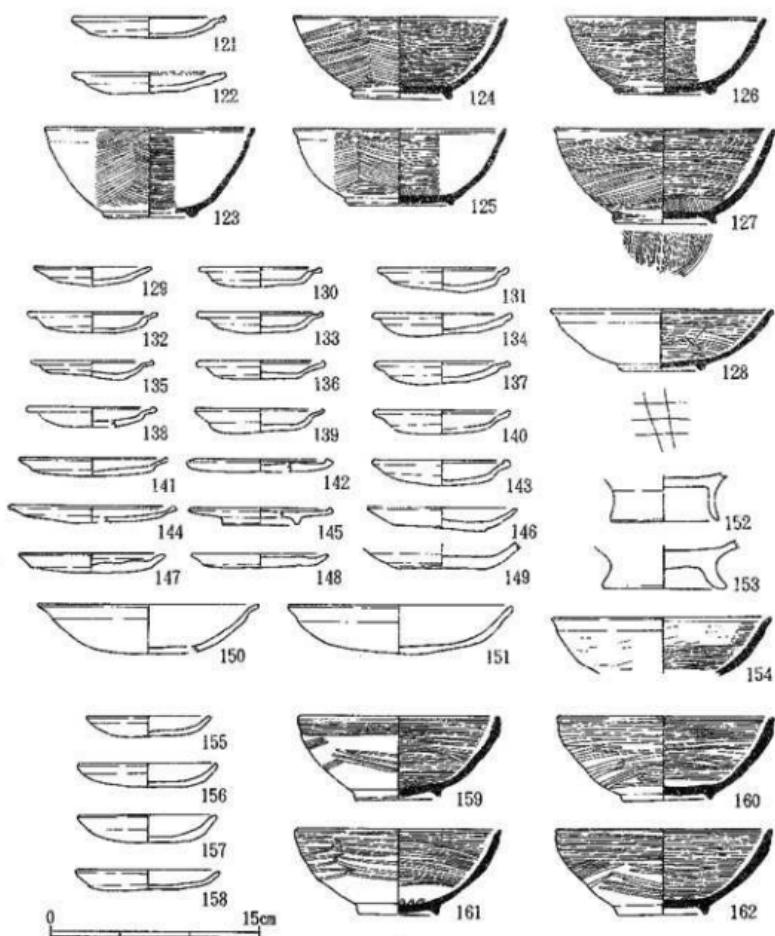


図5：安満遺跡88年度土壤3（121～125），大藏司遺跡（126・128），嶋上郡衙跡（127）

大藏司遺跡84年度土壤1（129～154），津之江南遺跡溝3（160・162），井戸1（155～159・161）

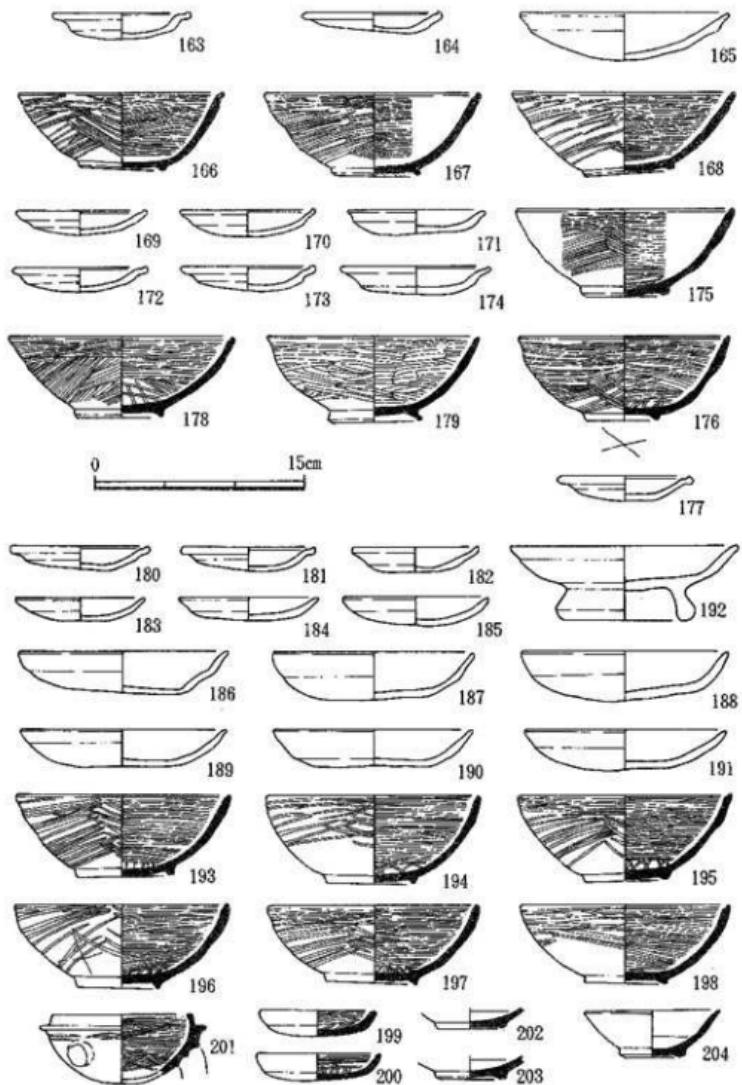


図6. 安満遺跡88年度P27(163~168)・P211(169~175)・井戸4(176・177)  
宮田遺跡土壙1(178・179)、梶原南遺跡方形土壙(180~204)

している。器壁は厚く、外面には指頭圧痕が目立つ。楠葉型I-2期に属す。

井戸1出土の瓦器椀(159・161)は口径14.6~14.8cm、器高5.9~6.1cm、器高指数40.4~41.2を測る。溝3出土のものより器壁が薄く、ひとまわり小さい。内外面のヘラ磨きも省略され、楠葉型II-1期に属す。共伴の土師器皿(155~158)は口径10cm前後を測るが、胎土が精良で淡褐色を呈すものと、やや粗く黄灰色を呈すものがある。東播系須恵器鉢や白磁IV類碗も出土している。

#### 安満遺跡(図6)

88年度の遺跡東部での中世集落の調査で、瓦器椀初期の資料がいくつか出土している。

P27(163~168)・P211(169~175)・井戸4(176・177)からは口縁の屈曲する土師器皿とともに内外面をていねいにヘラ磨きした楠葉型瓦器椀が出土し、いずれもI-2期あるいはI-3期と編年したものであるが、器形やヘラ磨きの状況から井戸4出土例が古く位置づけられる。

#### 宮田遺跡(図6)

71年度調査の土壌1から楠葉型と和泉型の瓦器椀が1点づつ出土している。いずれも初現期のもので、両者の並行関係を知るうえで重要である。また、初現期において、高槻市西部では和泉型も使用されていることを示すものである(図版第12)。

楠葉型(178)は口径16.3cm、器高5.8cm、高台径6.4cm、器高指数35.8を測る。器壁は厚く、高台も断面方形である。内外面ともていねいなヘラ磨きが施され、外面は4分割され、内底面は鋸歯状である。

和泉型(179)は口径15.4cm、器高6.2cm、高台径6.8cm、器高指数40.3を測る。器壁は厚く、内外面とも幅広のヘラ磨きが密に施されているが、楠葉型のように規則正しく分割されたものではない。口縁部周囲のみ炭素が吸着し、重ね焼によることを示している。

#### 梶原南遺跡(図6)

上牧遺跡北側の府営住宅改築工事に伴う調査で瓦器椀などがまとめて出土し、最近も隣接地で区割溝をもつ屋敷地が検出されている。

瓦器椀などは、87年度方形土壌から出土している。口径15cm前後、器高5~6cm、高台径5.8~7cmを測る。器壁が厚く、内外面のヘラ磨きがていねいに施される。器形・手法から二つに分けることができる。ひとつは193・194で法量的に他よりもやや大きく、器高指数も37.6・40.7を測る。これに対し、195~198はヘラ磨きが外面下半では省略され、内面もやや省略気味である。また、器高指数も36前後である。前者は楠

葉型 I - 3 期、後者は楠葉型 II - 1 期に相当する。瓦器小皿 (199・200) は口径 9 cm 前後を測り、口縁外面の磨きが省略された II - 1 期である。

小型の瓦質土釜が出土している (201)。後に多量に出土する三足付のものに類似しているが、内外面をヘラ磨きするもので、手法的には楠葉型瓦器碗 II - 1 期に相当する。土師器杯・皿も形態・法量から新古に分けることができる。皿では口縁の屈曲が強く、口径約 10 cm を測るもの (180・181) と屈曲が弱く口径 9 cm 代のもの (182) がある。これは瓦器碗の新古に対応するものであるが、口縁がまっすぐなもの (183~185) では口径 10 cm を目安に分けることができるが、あまり厳密なものではない。杯では、口径 15 cm・器高 3 cm 以上を測るもの (186~188) とこれを下まわるもの (189~191) がある。

この他、高台付杯 (192)、白磁碗 (202・203)・皿 (204) が出土している。

### 3) II b 期

#### 安満遺跡 (図 7)

88年度調査の井戸 11 (211・212)・井戸 12 (213・214) 出土の瓦器碗は口径 14~15 cm、器高 4~5 cm で、楠葉型 III - 2 期としたものである。外面のヘラ磨きは省略され、内面も省略化が著しい。

80年度調査の井戸 103 も同時期の楠葉型瓦器碗 (215・216) が出土し、瓦質の三足土釜 (218・219)、土釜 (220)、土師質土釜 (221) が出土している。この他、東播系須恵器鉢も出土している。

図 14 の 337~341 はやはり 80 年度調査の井戸 101 出土資料で、瓦器碗は出土していない。無段の口縁がやや外反する瓦質土釜 (341) と口縁の外反する土師器杯 (337~339)・皿 (339・340) が出土している。杯は京都系の土師器を模倣したものであろう。皿は口径約 7 cm で、瓦器碗終末期に作るものである。

#### 上牧遺跡 (図 8)

『上牧遺跡発掘調査報告書』で報告すみであるが II b 期の参考資料として溝 1 出土資料を掲載した。

今日的視点でみると、土師器皿には口径 8 cm 台のもの (222~224) と口径 9 cm のもの (225~230) があり、瓦器碗にも内外面のヘラ磨きが比較的ていねいさを保つもの (249・250) と外面のヘラ磨きが省略され、内面もかなり省略化されるもの (239~248) があり、II a 期後半から II b 期中頃までの幅をもっている。

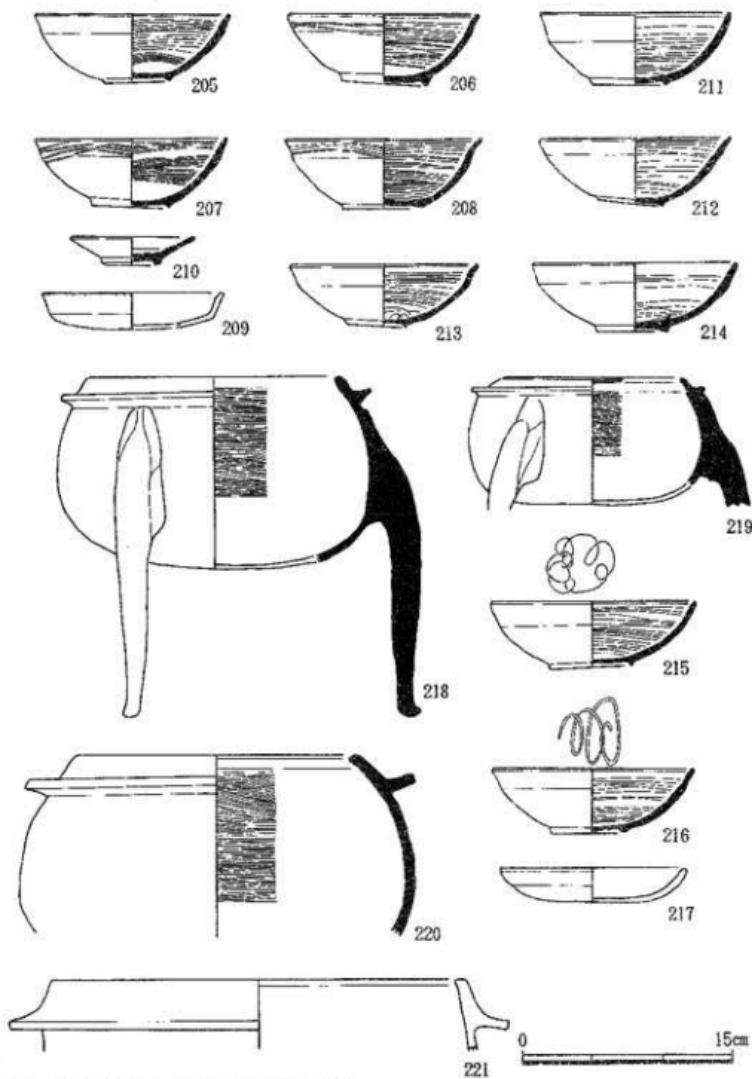


图7. 鳴上郡衙跡16L地区井戸3 (205~210)

安満遺跡68年度井戸11 (211・212), 88年度井戸12 (213・214), 80年度井戸103(215~221)

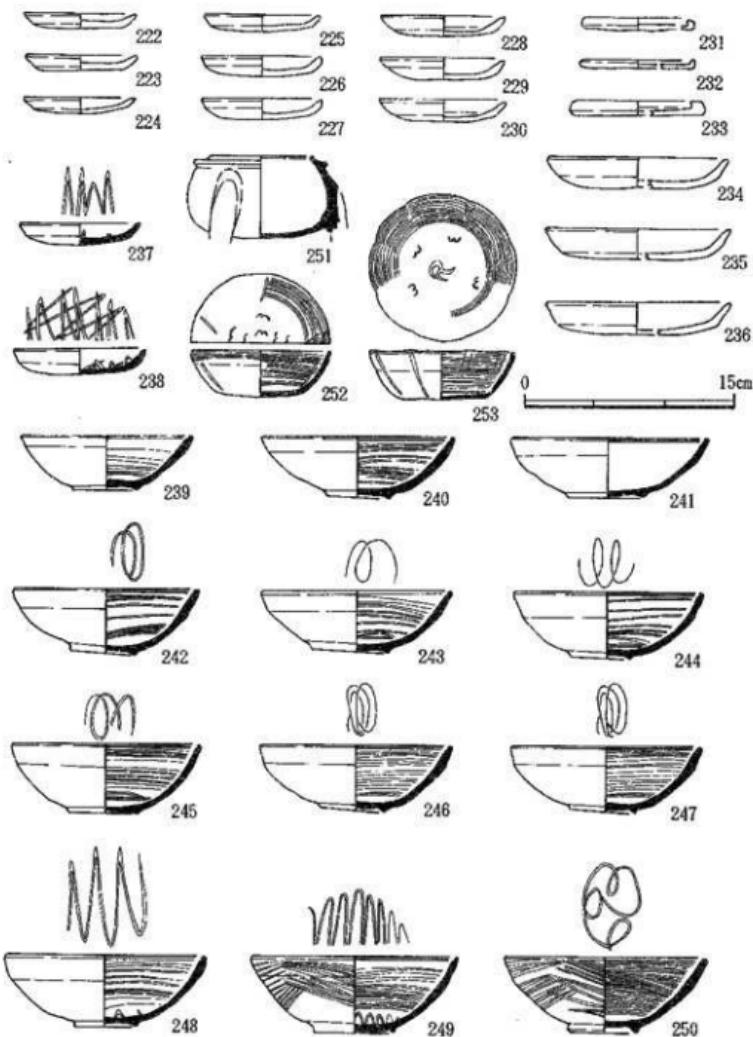


图 8. 上牧遺跡 溝 1 (222~253)

瓦器皿（237・238）や小型の瓦質三足土釜（251）・輪花椀（252・253）は新しい時期に属するものとみられる。輪花椀は以前に古瀬戸の入子を模倣したものと考えたが、この時期には古瀬戸製品もわずかながら搬入されており、その可能性を改めて指摘したい。

#### 上田部遺跡（図9・10）

この遺跡は奈良時代の集落・水田址が著名であるが、II a期やⅢ期の資料もこれまでの調査で出土している。まとまった集落の存在が予想されていたが、89年度の駐車場建設に伴う調査でII b期の資料が多數出土した（図版第12）。

出土瓦器椀は土器だまり（254～268）と井戸2（269～285）に大別することができ

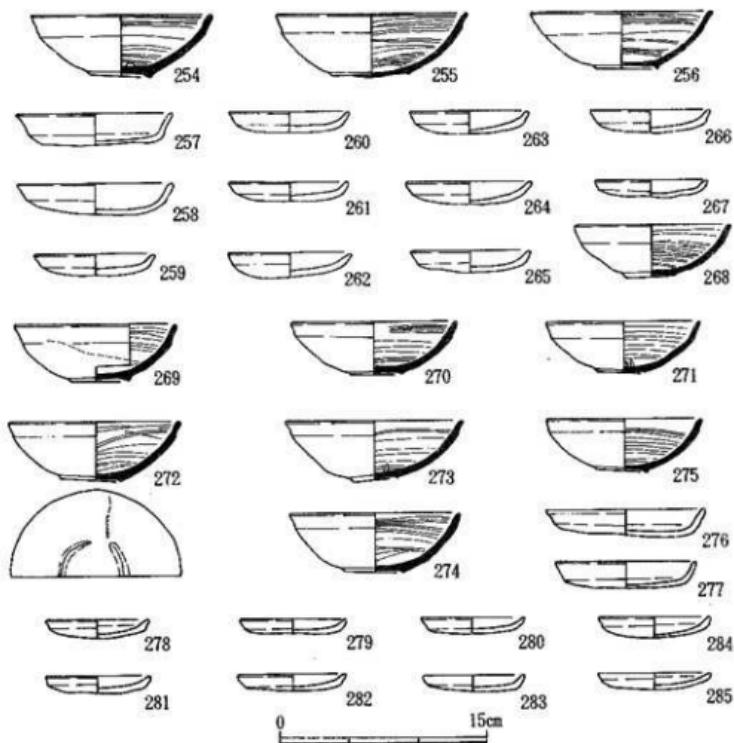


図9. 上田部遺跡 土器だまり（254～268）・井戸2（269～285）

る。瓦器椀は楠葉型Ⅲ-3期、Ⅳ-1期に位置づけられる。

土器だまりの瓦器椀は口径18cm前後、器高4cm前後のもの(254~256)と口径約11cmのもの(268)があり、前者が中心である。土師器皿(257・258)は口径約11cm、皿(259~267)は口径8~9cmにはほぼ収まる。

井戸2の瓦器椀は口径12~13cmを測るもの(269~274)と口径約11cmを測るもの(271・275)に分かれる。土師器皿も口径11cm以上を測るもの(276)と口径約10cmのもの(277)がある。皿も口径8cmを測るもの(284・285)とそれ以下のもの(278~283)に分かれる。これらに古瀬戸四耳壺(図10・286)が共伴している。薄い灰釉が全面に施され、口縁はあまり肥厚せず肩部の張りも弱い。植崎彰一氏の古瀬戸草創期第一段階とするものであろう。

井戸2は瓦器椀の法量面で幅をもつが、土師器皿では8cm以下となるものが多く、土器だまりよりやや後出とみられる。

他に東播系須恵器類や瓦質製品も多く出土しているが整理中であり今回は省いた。

#### 鳴上郡衙跡(図7・11)

楠葉型瓦器椀のⅡ-3期、Ⅲ-1期の資料はあまり知られていないが、79年度調査の16L地区井戸3出土資料はこの時期を埋めるものである。

瓦器椀は口径14cm前後、器高約5cm、高台径5~6cmを測るものが多く、器高指数35前後である。口縁部外面にわずかにヘラ磨きを施すもの(206~208)と施さないもの(205)がある。内面のヘラ磨きには空間がみられるようになる。内底面は鋸歯状で省略気味のヘラ磨きが施され、口縁端内側の沈線を省略するものも1点ある。

共伴の土師器皿は口径13cm、器高2.6cmを測る(209)。白磁皿(210)も出土しているが、内底面の釉を環状に搔きとっている。

80年度調査の17P地区井戸1出土資料(292~309)は瓦器椀終末期の一括資料として良好なものである(図版第13)。

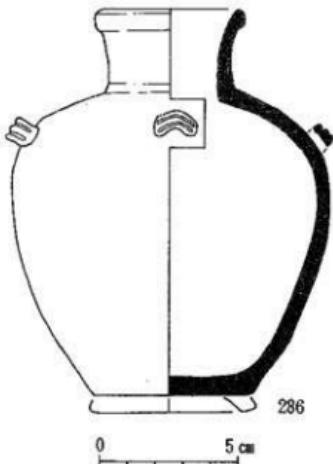


図10. 上田部遺跡出土古瀬戸壺

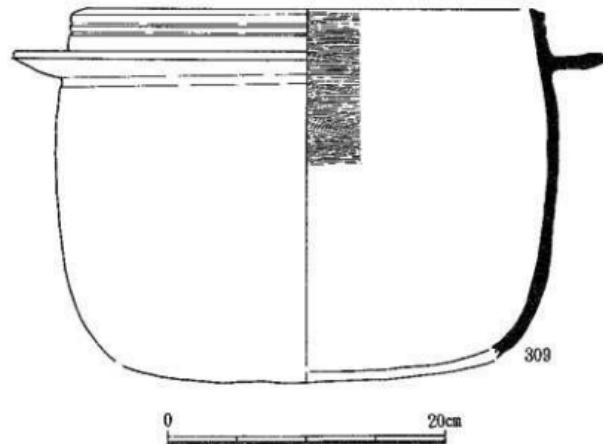
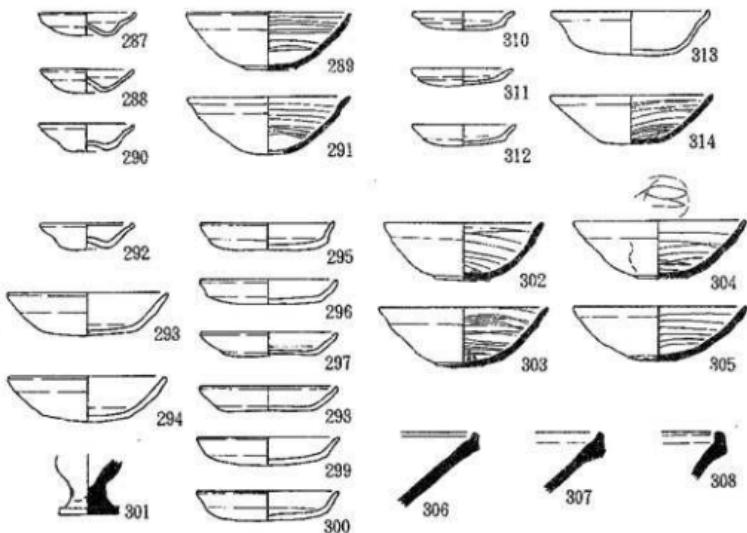


図11. 鳥上郡衙跡18E地区井戸 (287~291)・17P地区井戸1 (292~309)  
高槻城跡土塁4 (310~315)

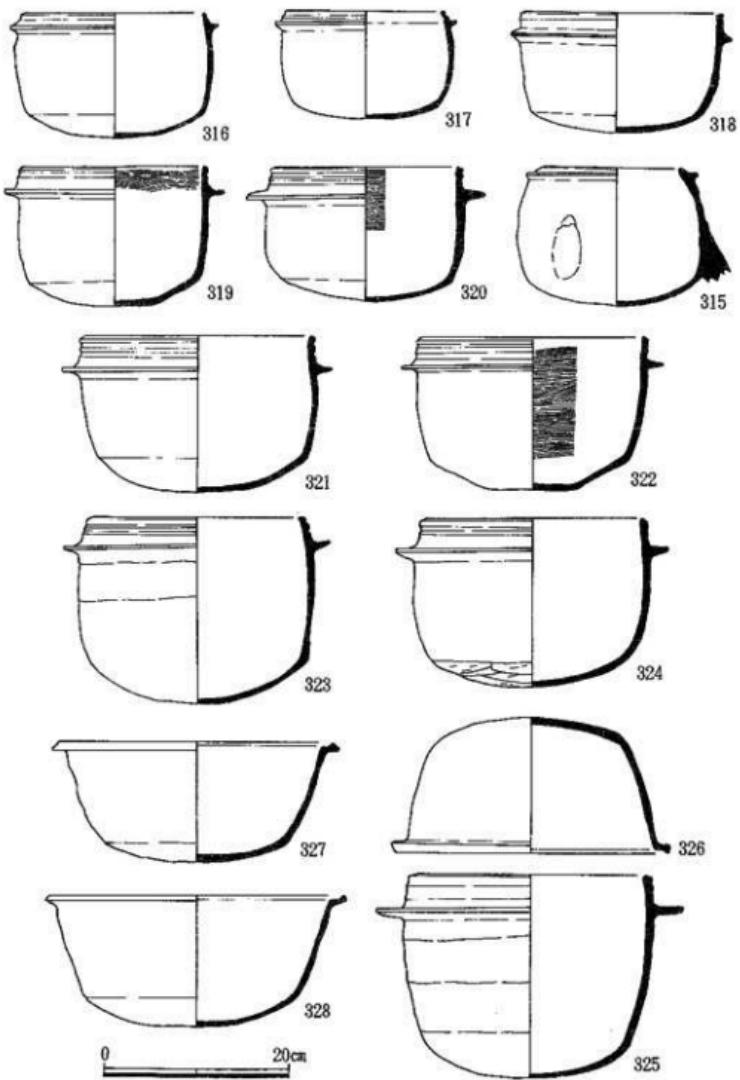


図12. 岡本山古墓群 (316~328)

瓦器椀は高台がまだ三角形を呈すもの(302)と粘土紐をすり付けたようなもの(303～305)がある。口径12cm前後、器高4cm前後を測り、ゆがみの目立つものもある。内面のヘラ磨きは間隔が空き、内底面は鋸歯状である。楠葉型IV-2期を中心とする。瓦質の大型土釜(309)が出土しており、口縁に段を二つ設け、内面はハケ目調整している。図示していないが瓦質火鉢の破片が出土しているが、口縁に菊花文を押印するもので大和産とみられる。

土師器には京都系の皿(292)や椀(293・294)をはじめ、口径10cm程度の杯もある(295～300)。須恵器鉢の破片(306～308)が出土しているが、いずれも東播系の魚住窯産とみられる。口縁上端が立ちあがるものや内傾するものがある。古瀬戸の仏花瓶(301)も出土し、黄緑色の釉が底部近くまで施されている。

17P地区井戸1に類似する資料は周辺部でしばしば出土している。287～291は18E地区の井戸から出土したものである。

#### 高櫻城跡下層(図11)

85年度第一中学校体育館建設時の調査で、土壇4から瓦器椀(314)、土師器皿(310～312)、椀(313)が出土している(図版第13)。瓦器椀は口径11.8cm、器高3.5cmで高台を欠いている。ヘラ磨きは内面に簡単なものが施され楠葉型の最終段階のものである。土師器椀は白色の京都系の模倣である。

#### 岡本山古墳群(図12・13)

82年度に調査されたC地区では丘陵斜面を開削して墓城を設け、中国製陶磁器・備前焼・古瀬戸が藏骨器として使用されていた。これらとともに多数の土釜が藏骨器とされていた。本来、瓦質焼成されるものであるが、大半が酸化炎焼成であり、当初から藏骨器として使用することを意識したものかもしれない。

三足土釜(315)が一点あり、これのみ炭素が吸着している。他は形態によって三つ程に分けることができる。①は体部から口縁が外反気味で口縁の段が一つのもの(318)、

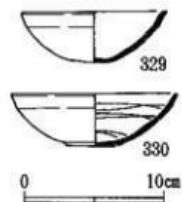


図13. 岡本山古墳群(329・330)

②は①よりやや深目で口縁は段は一つであるが、体部の丸いもの(316・317)である。③は口縁の段が二～三で②よりつばの位置が下位にあるもの(319～325)で、325のように深手のものがある。体部外面はナデを基本とするが、324では底部外面をヘラ削りしている。内面は細かい刷毛目調整で仕上げるもの(319・320・322)とナデのみのものがある。325

には326の鍋が蓋となる。327・328も蓋として使用されたものであろう。323の内部から楠葉型瓦器椀IV-2期(図13-330)、326の内部から楠葉型瓦器椀IV-3期(図13-329)のものが出土している。これらは個々の器形差はあるかほぼ同時期のものであろう。

#### 4) III期

##### 嶋上郡衙跡(図14・16)

85年度調査の5J・K地区の井戸から口縁が大きく外反する皿(331・332)、これとはほぼ同じ形態の小皿(333~335)、内湾気味の小皿(336)が出土している。京都系の器形を模倣したもので、備前焼鉢・瓦質甕・信楽焼甕(382)が出土しているが15世紀後半までの時間幅をもっている。

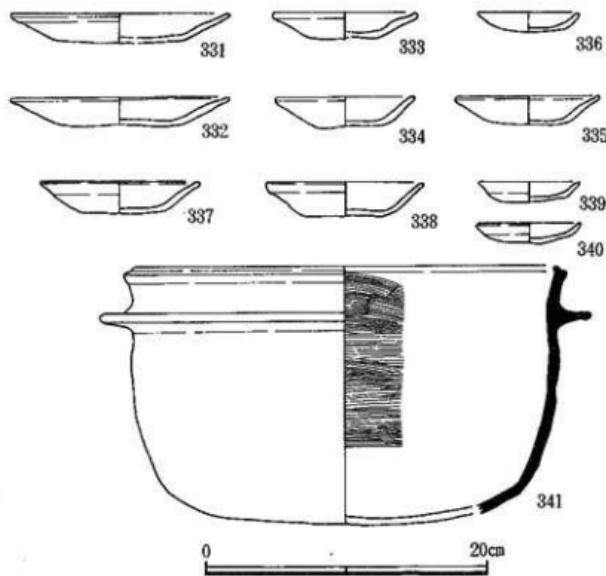


図14. 嶋上郡衙跡5J・K地区井戸(331~336), 安満遺跡80年度井戸101(337~341)

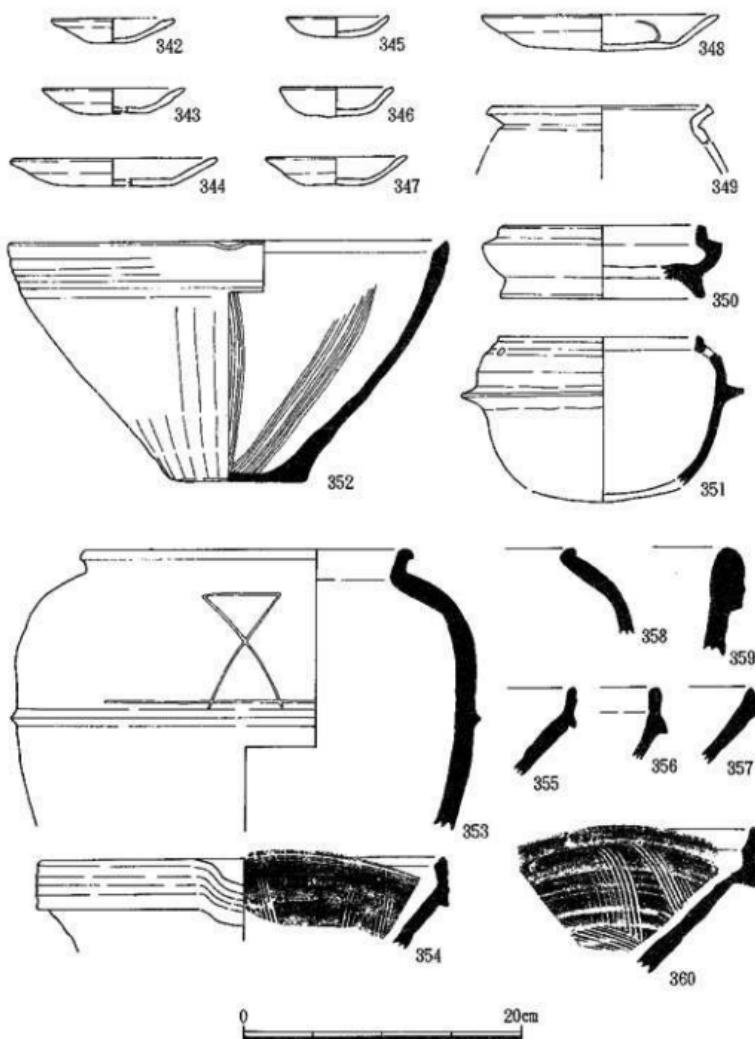


图15. 教行寺跡 (342~344), 高櫟城跡清1 (345~360)

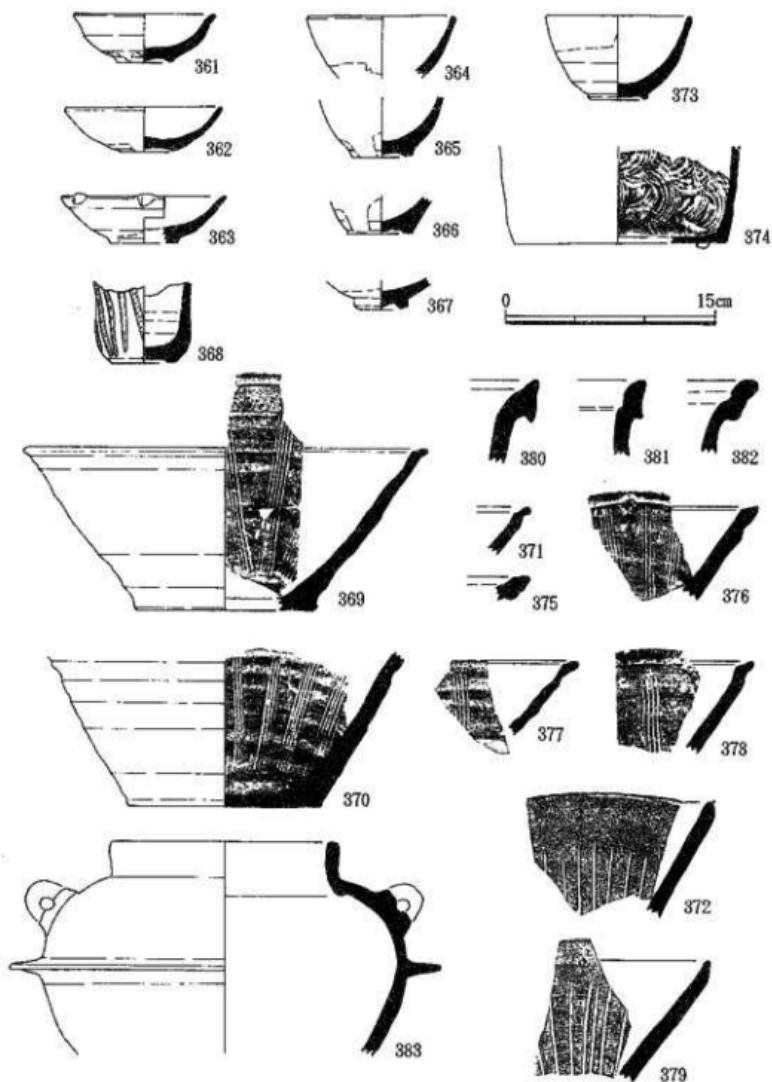


図16. 高櫻城跡土壤3 (361~372)・その他 (373~379)  
 安満遺跡 (380)、上牧遺跡 (381)、鳴上郡衙跡 (382)  
 芥川遺跡 (383)

### 教行寺跡（図15）

富田町6丁目の教行寺は本願寺8代蓮如が文明13（1481）年に細川勝元から土地を寄贈され、北摂布教の拠点として造営したものである。記録では、天文元（1532）年に細川晴元配下の摂州武士団に焼かれ、その後再建されたが承応2（1653）年に再び火災にあったと記されている。81年度に本堂改築等に伴い発掘調査を実施したところ、焼土を含む整地土が堆積し、記録を裏づけていた。

焼土下の土壤から若干の土師器杯・小皿と備前焼鉢が出土している。土師器皿（344）は口径15cm・器高2cmを測る。小皿は口径9～10cm、器高約2cmである。他に口径約13cmを測る破片もある。いずれも内底面に圓線がめぐり、明黄褐色あるいは灰白色を呈し、胎土は精良である。備前焼鉢は口縁はたちあがるが凹線の目立たないもので、V期でも古い時期のものである。これらは京都市内の16世紀前半の資料と極めて類似している。

### 高槻城跡（図15・16）

85年度調査時には、高山氏が和田氏を高槻城から追放した際、城内の大半が焼失したとする記録を裏づけるような焼土層や焼土の混入した溝1が検出されている。なお、和田氏追放は天正元（1573）年とされている（図版第14～17）。

溝1は上層と下層に分けることができる。下層出土の土師器皿（345～348）は教行寺出土例と類似したものである。349は大和産の土師質土釜である。350～352も大和産の瓦質土器とみられ、352の鉢は奈良市古市城などでも出土例が知られている。また、本市の塚脇12号墳出土例もこれに相当するものとみられる。外面体部下位は粗いヘラ削りを施し、口縁外側に数条の沈線が施される。備前焼は壺（353）・鉢（354～357）が出土しているが、IV期（355～357）やV期（354）のものがある。他に瀬戸美濃窯製品（517～520）や中国製染付（521・522）・白磁皿（523）が出土している。

上層からは備前焼壺（358・359）・鉢（360）が出土している。鉢の内面条線は斜め方向に走り、口縁端内側は段をなしている。

唐津焼などの出土した石組貯蔵庫とみられる土壤3がある。唐津焼には灰色あるいは淡灰褐色の釉を施した皿（361～363）や緑灰色あるいは淡灰褐色の釉をかけた壺（364～367）がある。釉はいずれもつけがけとみられ、胎土目痕がみられる。368は縱方向の鉄絵を描き、その上から釉をかけた筒茶碗である。この他、鉄絵を描いた盤（501～503）や杏茶碗（504）の破片もある。信楽焼の鉢（369・370・371）は口縁端がわずかに外反し、内面の条線は5本単位である。いずれも内面は磨耗し、長期間使用された

ことを示している。丹波焼の鉢(372)も出土し、1本づつ条線を刻んでいる。備前焼はV期の鉢が出土しているが、口縁外面の凹線や口縁上端内側が段をなし、条線が斜めのもの(512・513・515・516)が目立つ。瀬戸美濃焼の天目茶碗(505~511)は黒褐色釉と茶褐色釉があり、大窯V期を中心とするようである。信楽焼鉢は木戸雅寿氏分類のB 6類で、16世紀後半のものであり、唐津焼は17世紀初頭と報告される。このため、土壙3は17世紀初頭に廃棄されたものと考えられる。

他に高槻城では16~17世紀の陶器類が出土している。373・374は内堀から出土した唐津焼碗と朝鮮製の瓶である。後者は舟徳利と称されるもので、器壁は薄く、外面は底部まで褐釉がかけられる。内面には叩きしめの青海波文がみられる。やはり16世紀末から17世紀初めのものであろう。信楽焼の壺(375)・鉢(376~378)、丹波焼鉢(379)が出土している。375は木戸分類の壺B 4類で、16世紀前半とされる。

他の遺跡でも信楽焼製品がしばしば出土する。380は安満遺跡出土の壺で木戸分類のA 1類・14世紀後半とされる。381は上牧遺跡出土の壺B 2類・15世紀前半とされる。

#### 芥川遺跡(図16)

三好長慶の拠った芥川城とされる芥川遺跡では各種土器類に混じった瓦質湯釜(383)が出土している。大和産とみられる。(図版第14)

#### 4. 各時期の様相

前章では、高槻市出土資料を概観したが、ここではもう少し具体的な内容を他市も参

時 期		遺 動 構 名
I	a	郡家今城・87井戸2 郡家今城・70井戸8 郡家今城・87道路改良井戸、郡家今城・88井戸2 大蔵司・84土壙2、大蔵司・87土壙1
	b	鷲上郡衙・80-6 J地区井戸1 鷲上郡衙・90-7 O地区井戸、安満遺跡・88土壙3
	a	大蔵司84土壙1、安満・88井戸4、宮田・72土壙1 梶原南・87方形土壙(古) 梶原南・87方形土壙(新) 宮田・72方形土壙 鷲上郡衙・79-16 L地区井戸3(古)
	b	鷲上郡衙・79-16 L地区井戸3(新) 安満・80井戸103 上田部・89土器だまり 鷲上郡衙・79-17 P地区戸1 高槻城跡下層
表1 出土資料の編年		

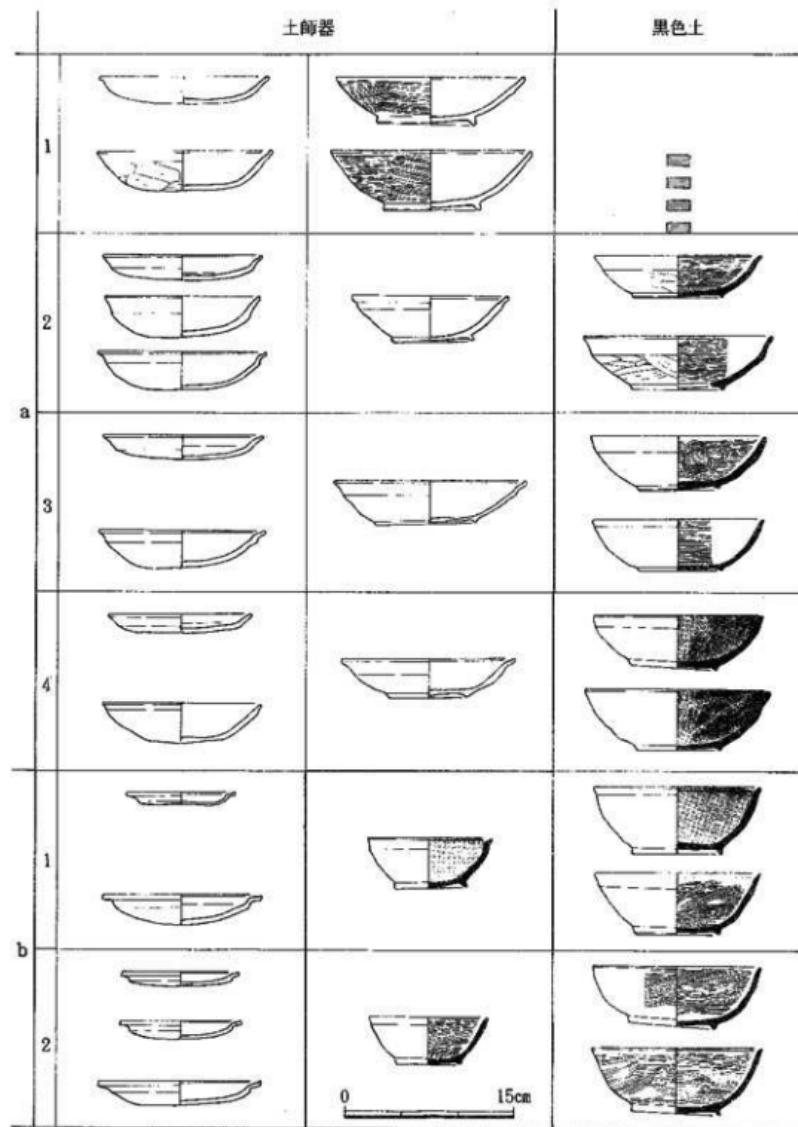
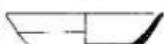
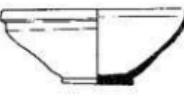
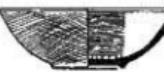


図17. I期の土器

器A類	須恵器	灰釉陶器	綠釉陶器
			
			
			
			
			
<b>黑色土器B類</b>			
			
			
			
			

考しながら検討してみる。

図17・23、表1は高槻市出土資料を縦年に並べたもので、おおよその年代は図29に示しておいた。I a期は9世紀前半から10世紀前半、I b期は10世紀後半から11世紀前半である。II期は、後述のように瓦器椀の終末年代を従来より遅らせたため、II a期を11世紀中葉・後半から12世紀後半、II b期は13世紀前半から14世紀前半とし、II b期下限を14世紀中葉と考えている。III期は14世紀後半から17世紀初頭である。

### 1) I期

大きく前半(a期)と後半(b期)に分けたが、前半では黒色土器はA類に限定され、土師器杯・皿は左手手法による粘土紐巻きあげを基本とする。後半では土師器小皿が出現し、その成形は粘土板折り曲げ法あるいは粘土板結合法によるもので、杯では粘土紐巻きあげ法・粘土板折り曲げ法の両者がみられる。また、黒色土器ではB類椀の出現が特徴である。

#### 土師器・黒色土器

土師器を中心まとめるに、a 1期は杯Bの外面ヘラ磨きがていねいで、全体として平安時代初期の様相を示している。土師器杯にはc手法とe手法があり、その比率をみると、平城VII期とされるSE 311Bよりやや時期が降り、平城京跡東三坊大路SD 650Aあるいは平安京西寺跡SD 1第2層に近い様相である。

大阪北部でSD 650Aに並行するものとして、吹田市垂水南遺跡の河跡上層出土の土器群が最も良好な資料である。ここでは典型的なc・e手法の土師器ではなく、在地的様相を示しているが黒色土器は内外面をヘラ削りした後、ていねいなヘラ磨きと暗文が施されている。須恵器も出土しているが遺物の中心ではない。

図18は84年度嶋上郡衙跡16K・O地区石組遺構出土資料である。須恵器壺(386)は篠塚産とみられ、伊野氏がE期とする袋谷1号窯・小柳1号窯出土例と類似している。土師器杯B(384・385)はe手法で内面に刷毛目がのこり法量も大きい。この資料はa 1期とa 2期の中間に位置するものと考えている。

a 2期は平城京跡東三坊大路SD 650Bに相当し、土師器杯・皿ではe手法が量的に多数を占める。比率を出すには至らないが、郡家今城遺跡井戸8出土資料はこの時期の良好なもので、黒色土器には杯A・杯Bが共存し、外面をていねいにヘラ削りする古相を示している。

a 3期・a 4期は巽淳一郎氏のいう統650Bに相当する土師器杯・皿はほぼe手法に

限られ、杯Bもa 4期を最後とする。黒色土器では内面の暗文はほとんどみられなくなり、法量も齊一化されている。しかし、厳密にはa 3期では大振りの杯が目につき、a 4期ではより椀形態に近くなる。須恵器・灰釉陶器の共伴を考慮し、a 3→a 4期という流れを指摘できる。a 3期を元慶8(884)年直後に位置づけられる京都市北野慶寺SK20出土資料に相当するものと考えている。

b 1期・b 2期はいわゆる「て」字状口縁の皿と黒色土器B類椀出現によって特徴づけられる。土師器皿は平安京内膳町跡SK19およびSK18に相当する。SK19は天禄4(973)年に焼亡記録のある薬師寺西僧坊出土資料と並行である。

黒色土器A類・B類とも椀形態となる。とくに深い椀形が目立つが、この時期に小椀も出現する。これは東海地方、とくに美濃地方の灰釉陶器を模倣した結果である。b 1期の鳴上郡衙6J区井戸1では必ずしも器形的に安定していないが、b 2期の7O地区井戸ではA類・B類とも深椀形態を中心とし、とくにB類椀では灰釉陶器と極めて類似する。

#### 煮炊具

I期の煮炊具は少ない。図19の387・388は高槻市ツゲノ遺跡で土器棺とされたもので、内外面に粗い刷毛目を施す。a 4期の黒色土器が共伴する。389は鳴上郡衙6J地区井戸1出土で、内外面ナデ調整である。390は安満遺跡土壤3出土で、器高が低く、外面を粗い刷毛目で仕上げる。いずれも口縁直下に鉗をめぐらすもので、瓦器椀初期まで使用されている。

#### 須恵器

平安時代になると出土量が減少する。とくに供膳具では、吹田市垂水南遺跡河跡上層を除いて良好な資料はない。高槻市でも郡家今城遺跡井戸8などでわずかに出土するだけである。このように、相対的に須恵器生産の衰退がうかがえるが、これは奈良

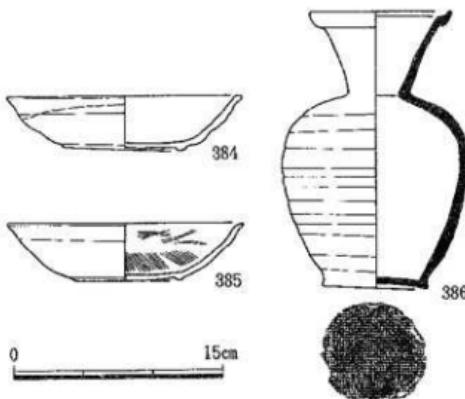


図18. 鳴上郡衙跡 16K・O地区石組造構出土土器

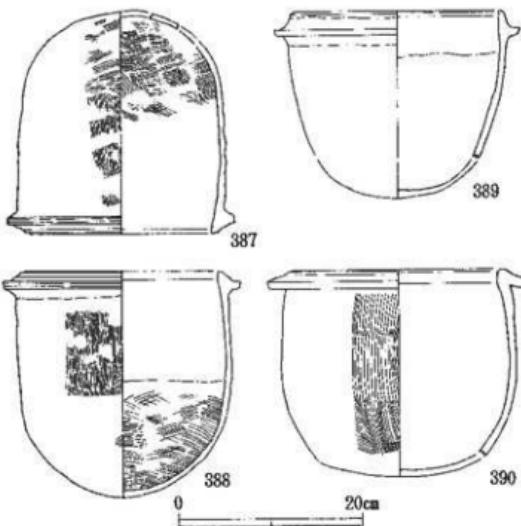


図19. I期の煮炊具 ツゲノ遺跡 (387・388)、嶋上郡衙跡 (389)、安満遺跡 (390)

時代以来の和泉陶邑窯からの供給が困難であったことを示している。しかし、一方ではa2期・a3期頃から龜岡市篠窯の製品が供給されることが、嶋上郡衙跡や郡家今城遺跡出土資料から知ることができる。とくに、b1期・b2期には口縁が倒卵状の鉢の破片が安満遺跡などでしばしば出土する。篠窯製品への認識が

深まれば更に増加するであろう。

しかし、この時期の須恵器貯蔵具が相対的に少なく、どのような製品で貯蔵されていたのかという課題が残されている。

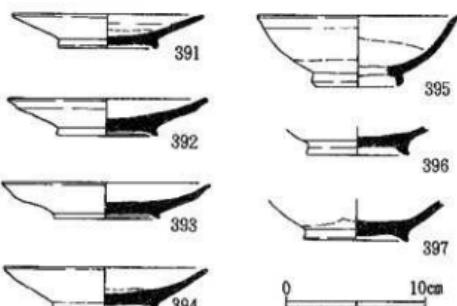


図20. 灰釉陶器 嶋上郡衙跡 (391~393・395)  
安満遺跡 (394・396・397)

#### 施釉陶器

高槻市出土の灰釉陶器のうちK14段階に属すものは郡家今城遺跡・嶋上郡衙跡（図20-392・393）でわずかに出土するだけであるが、安満遺跡跡（391・394）・富田遺跡のようにK90段階には増加する。O53段階以降（395~397）の出土例は少ないが、相対的に

減少するのか調査が限定的なものであるためか検討課題である。

緑釉陶器は初期の洛北窯製品は出土地が限定され、量も少ないが、洛西窯製品は灰釉陶器と期を一にして大幅に増加する。東海地方の製品は認識不足にもよりあまり知られていないが、近江窯のものは資料数が増加している。図21・図版18~20は未報告のものを中心にまとめた。

398~404は郡家今城遺跡出土で、87年度調査井戸2出土例同様、軟質・円板高台で淡黄緑色釉の施される洛北窯の製品が中心で、小梶(401・403)、耳皿(402)の底部には糸切り痕がある。400のみ硬質・蛇の目高台で、外面に重ね焼の目跡がある。なお、郡家今城遺跡では近江窯緑釉陶器は出土していない。

島上郡衙跡でも軟質・円板高台のもの(405~406)や壺(407)なども出土するが、多數を占めるのは硬質で円板高台あるいは蛇の目高台を呈すもの(408~418)で、輪高台のもの(419~420)もある。須恵器質の胎土に緑色釉が施される洛西窯の製品が中心とみられ、釉の施されない素地のままのものもしばしば目に見える。420は篠窯の製品とみられる。これらはいずれも高台部分であり、完形品は少ないが梶・皿にはほぼ限定されるようである。

421~427は島上郡衙跡出土の近江窯の製品である。高台内側の段が特徴であるが、426・427の6J地区井戸1出土例では高いバチ状高台で、段はみられない。森隆氏がⅢ類とするものである。428は岡本山古墳群出土で硬質である。

429~433は安満遺跡出土資料で洛西窯製品と近江窯製品がある。434は宮田遺跡出土の近江窯の皿であるが、初現期の瓦器梶と共に共存しているが前代の混入であろう。435~437は高槻城跡下層出土資料で、洛西窯産とみられる。438は島本町広瀬南遺跡出土の軟質・円板高台を有すものである。

島上郡衙跡と郡家今城遺跡では越州窯系青磁碗の破片が出土している。いずれも蛇の目高台を呈する底部破片であるが、府下では東大阪市神並遺跡・大阪市長原遺跡などその出土遺跡は限定されている。

このような緑・灰釉陶器、初期貿易陶磁を出土する遺構や遺跡の性格について、従来は官的性や祭祀的性格を指摘することが多かった。1977年に植崎彰一氏が作成された彩釉陶器出土地名表(『日本陶磁全集・三彩緑釉』)では、大阪府下の出土地は9ヶ所である。その後、堀内明博氏が1985年に作成した地名表では18ヶ所となり、表2のように現在では高槻市だけでも緑釉陶器出土遺跡10ヶ所、灰釉陶器出土遺跡7ヶ所を数える。このため、出土遺跡個々の状況や地域的な特徴をみて、緑・灰釉陶器出

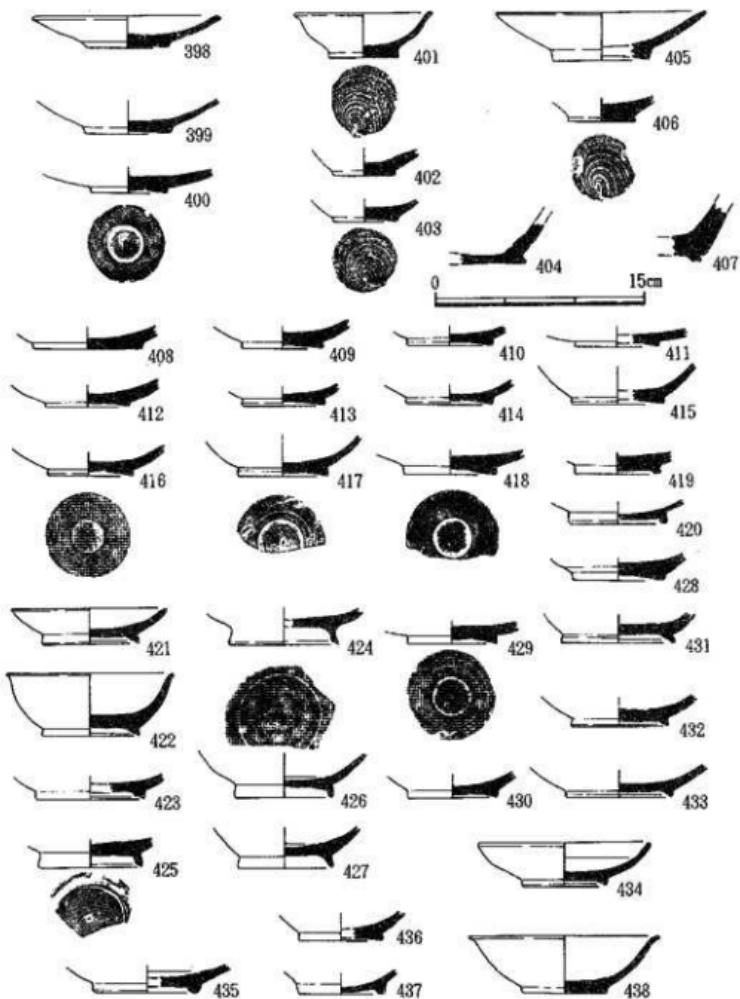


図21. 緑釉陶器 郡家今城遺跡(398~404), 鳴上郡街跡(405~427)  
岡本山古墓群(428), 安満遺跡(429~433), 宮田遺跡(434)  
高槻城跡下層(435~437), 広瀬南遺跡(438)

遺跡名	縁 軸				灰 軸				
	洛北	洛西	東海	近江	K14	K90	O53	虎渓山	九石2
島上郡衙	○	○	○	○	○	○	○		
郡家今城	○	○	○						
大藏司	○			○		○	○		
宮田				○			○		
安満		○		○		○			
高櫻城	○	○							
悉守		○							
黒富	○	○							
本山	○								
田川	○			○			○		
芥柱								○	

表2 縁・灰軸陶器出土地名表

土遺跡の性格を考える必要があろう。

現状では島上郡衙跡、郡家今城遺跡での出土が多く、とくに島上郡衙跡では縁・灰軸陶器が集中するのは7A・B地区、17D・H・P地区、18M地区などである。この地域は島上郡衙跡の史跡指定地東北部にあたっている。

郡家今城遺跡の性格は島上郡衙の官人層の集落とも考えられ、官的性格を示す石帯も出土している。さらに、74年度調査では奈良三彩の小型杯（図22-439）が出土している。口径6.6cm、器高2.3cmを測る。奈良三彩出土遺跡は寺院が圧倒的に多く、住居・集落を除けば仏事・祭事に関する遺構から出土する場合が多い。そして、極めて限られた階層の所有であり、儀器としての機能ばかりでなく、権威の象徴でもあった。府下では大阪市四天王寺、柏原市鳥坂寺、富田林市新堂廃寺という著名な寺院で出土し、茨木市安威の大職冠山出土の火葬骨器として使用された三彩壺は奈良初期の三彩陶器としてとくに著名である。また、最近大坂城跡調査に関連して大阪市東区島町1丁目から出土が伝えられている。

さらに、岡本山古墓群の性格も島上郡衙との関連が強く、施釉陶器需要層の多くが下級官人・富豪層であったことを示している。とくに、平安時代初期にはこのような傾向が強く、京都系縁軸陶器でも軟質・円板高台の洛北窯製品が島上郡衙跡・郡家今城遺跡に出土が限定されている。また、K14段階の灰軸陶器も同様である。

島上郡衙跡は10世紀以降も集落として継続していくが、郡家今城遺跡は9世紀後半

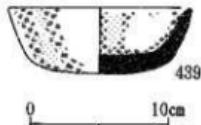


図22. 三彩（郡家今城遺跡）

を境に衰退していく。この時期に京都系でも硬質で蛇の目高台・輪高台を有する洛西窯の綠釉陶器、K90段階の灰釉陶器が増加する。とくに、安満遺跡や高槻城跡下層遺跡のように、この時期に耕地の再開発、新開発に着手したことを想像させ、これらを背景に需要層が拡大したことを見出している。

また、しばしば指摘されるように、洛西窯および近江窯綠釉陶器の出土が汎西日本的に確認でき、両窯の特産品的指向がうかがえる。しかし、綠・灰釉陶器の出土遺跡数の増加はみとめられるものの、遺物全体に占める比率は少ない。このため、需要層はなお富豪層・上層農民に限られたものと捉えられるが、この点については次代の中國製陶磁器需要層とも関連するものであり、慎重に考えたい。

なお、灰釉陶器は丸石2号窯期のもの（386・397）が安満遺跡で数点出土するだけで、山茶碗の出土は認められない。ただ、淀川河床の柱本遺跡で渥美半島の大アラゴ窯期の山茶碗などが出土している。また、枚方市交北城ノ山遺跡、豊中市小曾根遺跡でも出土しているが、これらは例外的なもので基本的に畿内には流通するものではない。

このように一定の需要に応えた綠・灰釉陶器はI b期をもって姿を消してしまう。

## 2) II期

II期は器種別分業が明確になるのが特徴である。瓦器・土師器は主に椀・杯・皿という供膳具と煮炊具に、貯蔵具は東播系須恵器と常滑焼、調理具は東播系須恵器を中心とする。また、少量の中国製陶磁器もあるが主に供膳具である。

### 瓦器椀

II期の編年基準となるが、楠葉型と在地和泉型が共存している。後者は高槻市西部に多いが、まとまった例が少ないので前者が編年の中心となる。

楠葉型瓦器椀は外面のヘラ磨きがていねいに施される段階と省略される段階を前半（a期）、後半（b期）に分けた。さきの編年案のI期・II期がa期に、III期・IV期がb期に相当する。

初現期のa1期では内外面のヘラ磨きが楠葉型・在地和泉型ともていねいで、空間がみられない程度である。このヘラ磨きが序々に省略され、a5期では外面にわずかにみられる程度となる。内面のヘラ磨きも順次省略していく。a1期～a3期では器壁が厚く、深椀形態を基調とするが、器形的には安定せず、安定するのはa4期・a5期からである。a4期については良好な資料が無いため、『上牧遺跡発掘調査報告書』で使用した宮田遺跡方形土壙出土資料を用いた。また、a期とb期の接点につい

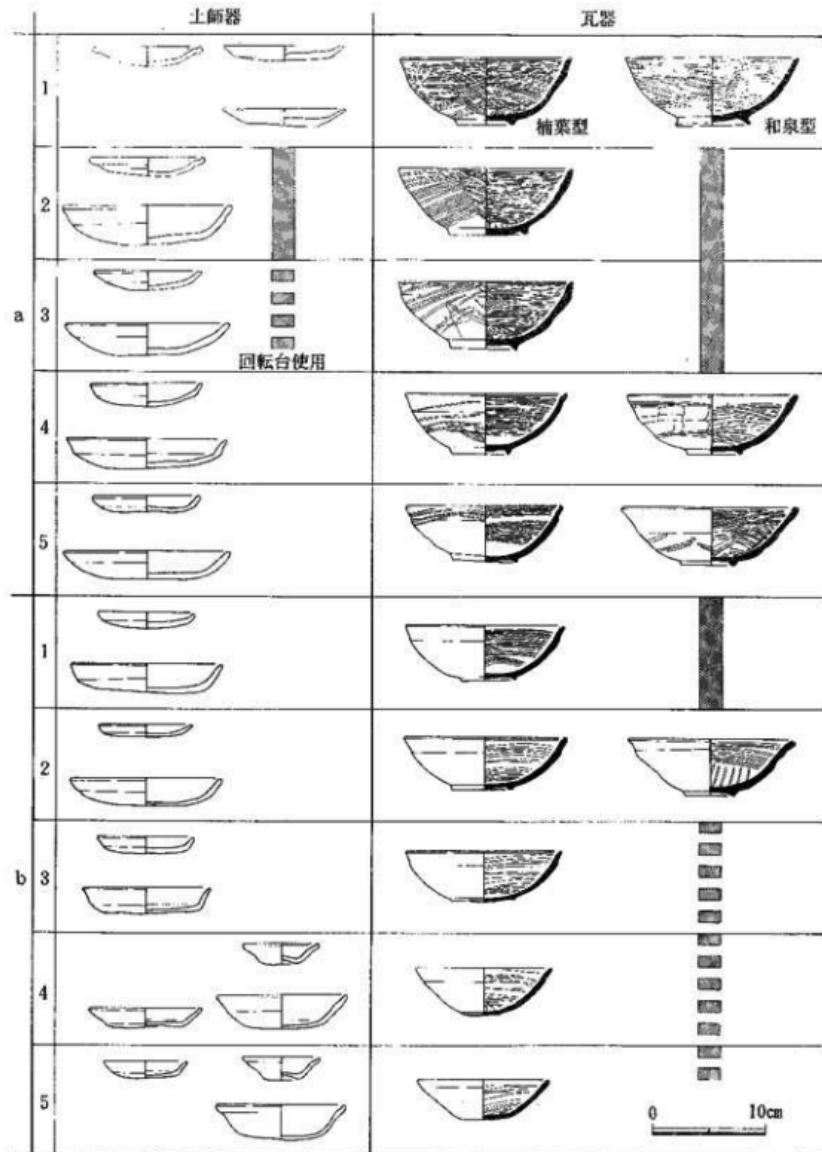


図23. II期の土器

ても、從来から確実性を欠いているのが現状である。今回も島上郡街跡16L地区井戸3出土資料の古・新をa 5期とb 1期にあてている。

b期は外面のヘラ磨きが基本的に施されていない。内面もレコード圓線状となり、口縁端内側の沈線も省略化傾向にある。b 3期以降、法量の縮小化が著しく、b 4期にはその傾向が加速する。高台も形骸化し、b 5期には付されなくなる。

在地和泉型はb期には口縁が大きく外反するなど粗雑化が進行し、b 3期には遺構出土が確認できるが、それ以後は出土量が減じ、終末期の資料は高槻市ではほとんどみられない。

#### 土師器

杯はa 2期までは口径15cm以上、器高3cm以上を測るものが中心で、a 3期以降法量を減じていく。a 4期・a 5期からb期にかけて口縁を二段ナデし、京都の土師器模倣が多少目につく。この傾向は島本町で強いようであるが、今後検討を重ねたい。皿は「て」字状の口縁の屈曲するものがa 2期まで中心であるが、a 3期にはほとんど姿を消す。杯同様法量を減じていくがa期は口径9~10cm、b期は口径7~8cmである。

土師器杯・皿での大きな画期はb 4期の京都系の白色椀・皿の出現である。この椀・皿は胎土・色調とも從来のものとは異なり、京都周辺からの搬入品も相当含まれているものとみられる。a期からつづく杯・皿はこの時期には法量減少の極に達している。

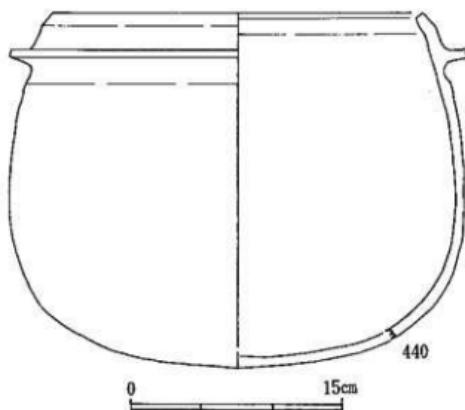


図24. 土釜（宮田遺跡）

a 1期～a 3期には回転台土師器の杯・皿が出土する。底部糸切り、ヘラ切りの二者があり、遺物全体からみれば少ないが、他市の状況も考慮するとⅠ b期からこの時期にかけて普遍的に出土するようである。

#### 煮炊具等

a 1期、a 2期まではⅠ期以来のいわゆる摂津型土釜を中心であるが、a 3期には鉄釜模倣とみられる土師質土釜が守口市大庭北遺跡で出土している。やや後出の宮田遺跡A区建物群北

でも同様の土釜（図24-440）が出土している。やはりこの時期の宮田遺跡方形土壙からは瓦質三足釜が出土し、梶原南遺跡の小型三足釜を除けば高槻市における瓦質煮炊具の初現である。

b期には、土師質土釜もあるが、安満遺跡井戸103のように瓦質の土釜・三足釜が中心である。このうち三足釜は、足が体部上位に付くものや底部近くに付くもの、あるいは深身のもの浅身のものなど多様である。また瓦質土釜は安満遺跡井戸103のようにb2期頃には口縁に段を設けないものであるが、b4期以降は回線状の段を設けるものが中心となり、Ⅲ期にもつづく。

瓦質土器には盤とされるものがある。これは調理用あるいは盛りつけ用に使用されたのではなく、暖房用の火鉢として使用されたものであろう。b3期・b4期頃まで使用されたとみられるが、b4期には鷲上郡衙跡17P地区井戸1出土例のように大和産火鉢がこれに代わるものとなる。このような傾向は京都市内においてもみられ、三足釜もこの時期に姿を消す。

瓦質製品の生産地であるが、上牧遺跡出土の盤内面のヘラ磨きは楠葉型瓦器椀に共通するものである。このため、枚方市楠葉周辺に生産地を求めていたが、焼土とともに未使用の瓦質土器類が多數出土した楠葉野田遺跡がその可能性として高い。この遺跡の三足釜も器形的には統一されていない。

#### 須恵器

Ⅱ期初頭にみられる須恵器には香川県十瓶山窯製品も含まれるが、ほぼa1期に限られる。Ⅱ期全体をとおして中心となるのは東播系と総称される神戸市神出窯・明石市魚住窯の製品である。

表3は東播系須恵器鉢の出土遺跡をまとめたが、13ヶ所で出土している。森田稔氏分類のⅦ期（神出Ⅰ期・11世紀後半～12世紀前半）では宮田遺跡など少ないが、Ⅷ期（神出Ⅱ期・12世紀中～13世紀前半）には8ヶ所に増加し、Ⅸ期（13世紀中葉以降）では11ヶ所と更に増加する。このような傾向は汎西日本的な傾向に合致している。

遺跡名	時 期			
	VII	VIII	IX-1	IX-2
鷲上郡衙		○	○	○
大藏司		○		
宮田	○	○	○	○
安満		○	○	○
津之江南	○			
上牧	○	○	○	○
悉檀寺跡			○	
芥川				○
上田部			○	○
高槻城				○
天川		○	○	
桂本		○	○	○
大塚		○	○	○

表3 東播系須恵器出土地名表  
(時期は森田分類)

東播系須恵器の特色は壺も供給されているが、鉢を主要な製品とすることである。同時期の常滑窯の鉢はまったく出土せず、鉢における東播系の独占が確立していたことを示している。とくに、魚住窯でも赤根川支群に移行したb期に出土量としては最も多く、b4期前後を境にして姿を消してしまう。つまり、出現と消滅は瓦器椀と一緒にものである。

#### 常滑・古瀬戸・備前

表4のように常滑窯製品は8ヶ所から出土しているが、その出現はa4期頃である。東播系須恵器とともに普遍的に出土するが壺・大壺に限られる。Ⅲ期初頭にも安満遺跡で口縁の縁帶部が頸部に貼り付く大壺が出土しているが、これは例外的といえるもので、b期内に姿を消す。

古瀬戸はb3期の上田部遺跡井戸2から四耳壺が出土しているが、岡本山古墳群では四耳壺、瓶子が藏骨器に使用されている。この時期の古瀬戸は宗教的色彩が強く、他地域でも藏骨器として使用されることが多い。このため需要層は武士や上層農民を中心とみられ、普遍的に出土し、日常用器としての性格が強い常滑窯製品とは性格を異にする。

備前窯製品は間壁編年Ⅲ期に属する壺や鉢が島上郡衙跡・上牧遺跡で出土し、岡本山

遺 跡 名	常 滑					備 前						
	1	2	1	3	1	4	1	5	Ⅲ	Ⅳa	Ⅳb	V
島上郡衙			○		○				○		○	
宮 田	○		○									
安 满		○		○			○					
上 牧		○		○								
岡 本												
前 山												
富 塚												
芥 田												
芥 川												
上 田 部				○								
高 橋 城												
梶 原 寺	○											
天 柱	○		○									
大 本 塚	○		○		○							

表4 常滑・備前焼出土地名表  
(常滑は世纪、備前は間壁編年)

古墳群では藏骨器として壺が使用されている。古瀬戸同様、出土遺跡数も少なく、需要層も比較的限定されるらしい。

#### 中国製陶磁器

以前に北摂地域出土資料をまとめたことがあり、Ⅱ期以降は普遍的に出土する。初期の白磁碗Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅴ類に先行する白磁碗が安満遺跡で出土している。これは山本信夫氏がⅩ類とするもので、口縁が薄い玉縁状を呈し、器壁も薄く、淡青白色の釉調である。この白磁は福岡市鴻臚館跡SK01において出土し、越州窯系青磁と白磁Ⅱ類碗などⅡ期の華南産白磁類との空間を埋めるものである。しかし、その存在はまだ一般に認識されておらず、報告例も少ない。いずれにせよ、華南産白磁類の出現は初期貿易陶磁に比べ暴発的な出土である。

華南産白磁類の搬入経路がどのようなものであるかよく判らないが、その需要層を考えると前述のⅠ期における施釉陶器需要層をもう一度検討してみる必要がある。具体的検討は項を改めたいが、この需要層がひきつづき華南産白磁類の需要層となったのであろう。

a期には華南産白磁類が中心であるが、b期にかけて同安窯系青磁・龍泉窯系青磁類が中心となる。遺物全体に占める割合は1%前後と少ないが、その需要層を階層的に区別することが不可能な程出土遺跡が増加する。しかし、岡本山古墳群では白磁四耳壺や褐釉陶器四耳壺が藏骨器として使用されている。また、ここでは龍泉窯系Ⅲ類鉢が出土している。このような中・大型品や優品と呼ばれるものの需要層はやはり限定されていたとみられる。

b期末の中国製陶磁器はほとんど知られていない。簡略化された蓮弁文や無文の粗雑な青磁碗が散見する程度である。このような中国製陶磁器の質低下と他の土器群の変容は関係無しに進行したものとは考えられない。その関係を論じるには多少の日数をいただきたい。

### 3) Ⅲ期

この時期の資料は散発的なものが多く、まとまったものとして高槻城跡関連のものがあるが未整理のため詳しくは判らない。

#### 土師器・瓦質土器

土師器皿では教行寺や高槻城跡溝1出土例のように京都系に極めて類似するものが多く、搬入品も含まれているようである。

瓦質土釜類では、Ⅱ b 期末に出現した口縁に凹線状の段を有すものがひきつづき使用される。これら楠葉系の瓦質土器の下限については現状では不明である。京都市地下鉄烏丸線関係の調査では、No.80土壤あるいはG区4WⅢ土壤2で出土する土釜・鍋がほぼ下限とみられ、後者が本國寺S D166下層に相当する。本國寺S D166上層が天文5(1536)年の天文法華の亂焼亡時に相当することから、16世紀前後の年代が考えられる。京都市内出土の瓦質土器は伊野氏が山城原型とするように器形も若干異なり、楠葉系とは異なる生産地が想定されるが、大阪北部でも同様の変化をたどるものと考えている。

京都市内と類似した現象に大和産瓦質土器の搬入がある。Ⅱ b 4期に大和産火鉢の存在が確認できるが、Ⅲ期全般にわたって搬入されている。このような様子は胎土分析からも知ることができる。

鋤柄俊夫氏らの分析では、大阪府下の瓦質土器の産地は大和・河内・和泉に分かれると、高槻市関係で安満・宮田・芥川・高槻城出土の甕3点、鉢4点、火舎3点、湯釜1点、土釜1点が分析されている。結果は甕はいずれも和泉地方産、鉢は3点が大和、1点が河内である。火舎は1点が大和、1点が和泉、他は不明である。湯釜、土釜はいずれも大和である。これらは破片の分析であり、厳密な時期をおさえていないが、東播系須恵器・常滑焼消失後は必ずしも備前焼が市場を独占するのではなく、和泉地方産の甕や大和産の鉢が搬入されている。とくに貯蔵具以外は大和産が目立つ。

大和産のものとして高槻城跡溝1出土の土師質土釜がある。これは菅原正明氏分類のI 2型とするもので、川口宏海氏の分析では16世紀後半に大和以外の畿内各地に分布することが指摘されている。とくに、摂津・河内・和泉に多量に分布し、この時期に大和型の土釜・土鍋は從来の在地性の強い流通・販売形態から脱し、広域的な流通をするようになり、中世的な流通・販売体制から近世的なものへ変化していくとされる。

#### 類戸美濃・備前

Ⅱ期の古瀬戸製品が宗教的色彩が強いのに対し、Ⅲ期は島上郡衙跡周辺や芥川遺跡において灰釉平碗や卸目皿、鉄釉天目碗などの破片がしばしば出土し、日常用器を中心定量が流通していたらしい。そして、碗・皿を中心多量に流通するのは戦国期とみられ、高槻城跡溝1出土資料はまとまっている。他に梶原寺跡などで天目碗が出土しているが、一般集落への普及状況は判らない。

備前窯製品は間壁編年IV B期の鉢が從来より倍増した遺跡から出土する。この時期

に需要層が拡大したものと思われる。従来、備前窯の鉢は質が堅牢で内面に条線が施されるため東播系の鉢や常滑窯の甕を驅逐したと考えられてきた。確かに搬入経路の高槻市や京都市内では間壁編年Ⅲ期の製品が出土するが、一般的に使用されていたのであろうか。この疑問は和泉地方の瓦質土器を分析した広瀬和雄氏が提起された。和泉地方では東播系須恵器類に代わるものとして瓦質の甕・鉢が使用されたが、和泉地方と高槻市など大阪北部では搬入状況が異なるかもしれないが、前述のように高槻市でも瓦質の甕・鉢が出土しており、Ⅱ期からⅢ期にかけての移行期の備前窯製品の評価には慎重さが要求される。

いずれにせよⅣB期になって出土遺跡も出土量も増加し、一般集落での出土も目立つ。間壁編年V期は高槻城・芥川山城（三好長慶の拠った芥川城はこちらと考える）に加えて富田遺跡でも出土している。戦国時代から近世にかけて地方都市的な富田遺跡のような調査例が増加すれば出土数も増加するであろう。

#### 中国製陶磁器

まとまった調査資料としては高槻城跡溝1ぐらいである。他に芥川遺跡や嶋上郡衙跡、塚脇12号墳などで断片的に出土している。染付類は小野正敏氏がⅡ期・Ⅲ期とする一群や大坂城関係や堺環濠都市遺跡などで出土している、いわゆる扶容手の鉢なども含まれている。なお、89年度の高槻城跡の調査ではタイ製の陶器壺が出土しており、戦国期から近世初頭にかけての国際交流の活発なことを示している。

このようにⅢ期には、Ⅱ期末期から出現した大和型瓦質土器や瀬戸美濃窯・備前窯製品が主要な構成要素となる。一方、Ⅱ期以来の楠葉系瓦質土器は15世紀末頃には消失する。これと前後し、瀬戸美濃窯・備前窯製品が増加する。恐らく中国製染付類や白磁皿C群も多量に流入したであろう。この時期を小野正敏氏は都市型陶磁器組成のはじまりとされたが、このことを高槻市出土資料からも知ることができる。また、唐津・丹波窯製品が高槻城を中心に出土するのは16世紀末から17世紀初頭とみられるが、近世的な陶磁器への再編期であると捉えられる。

#### 5. 古代から中世への変容

I～Ⅲ期に分けて土器・陶磁器の様相を観てきたが、ここではⅠ期からⅡ期にかけて、つまり筆者が古代後期から中世へとする移行期について、黒色土器椀や瓦器椀などを検討しながら、この時期を特徴づけるものを考えてみたい。

## 1) 黒色土器椀の研究

黒色土器椀や瓦器椀はⅠ・Ⅱ期の編年基準となるもので、その生産や流通のあり方を検討することは、土器研究から古代後期・中世を検証することになる。一般的には、黒色土器A類椀の生産から黒色土器B類椀生産へ移行し、最終的には瓦器椀生産へと考えられているが、黒色土器と瓦器研究は必ずしも一体のものとして捉えられてこなかった。このため、黒色土器椀・瓦器椀の評価が実態に即したものではなく、古代社会あるいは中世社会はこのようなものだという先入観がそこに反映していたのではないかろうか。

筆者も先の瓦器椀編年をまとめた段階では、黒色土器椀との関係を論じることができなかった。そして、瓦器椀の出現が量産化あるいは商品化をめざした中世手工業生産の一形態と漠然と評価してきた。瓦器椀出現をもって中世社会と考古学的に捉えるという考えは今日も変わっていないが、その内容については本稿でみてきたように豊富な資料が増加している。このようななかで、森隆氏は最近汎西日本的に黒色土器椀を捉え直し、系譜・編年論を総合的に論じている。森氏の労作に筆者も大筋で合意するが、ここでは大阪北部という地域を中心に考えてみる。

さて、黒色土器椀・瓦器椀を考える時、最も重要視されるのはその系譜関係と専業的生産に関する点である。

従来の黒色土器研究は平城京を中心とする研究であった。そこでは、9世紀には単独で日常容器を構成し、同じ用途の器種でも同時代の土師器とは磨き調整、暗文、黒色処理等の技法面で異なるとされる。そして、黒色土器生産集団は土師器生産集団と分離し、専業生産を開始したと結論された。確かに、大阪北部でも供膳具だけでなく鉢や鍋のような器種に内面黒化処理したものがいる。しかし、それらは在地の土師器類と胎土・色調面で共通している。大阪北部の黒色土器・土師器をみると、個々の地域ごとに胎土・色調を異にしている。このような小地域内の生産体制において、更に分業が進んでいるとは考えられず、黒色土器と土師器の生産は同一工人集団内部での作り分けとして捉えるべきで、平城京におけるあり方を一般化することは、今日的視点からみて不適当である。

I b期に黒色土器A類に加えてB類椀が出現する。A類は前代からの杯B（森氏のいう畿内系Ⅲ類）の発展形態で、器形的には施釉陶器を模倣する。大阪北部で出土する黒色土器B類椀は大半が植葉型である。枚方市植葉におけるA類からB類への移行過程は判らないが、B類椀が内外面を黒化処理し、密なヘラ磨きを施す点を考慮する

と施釉陶器を模倣して、この時期に新たに出現したものと考えられる。

B類椀も施釉陶器の器形を模倣するため、深椀形態を呈すものが目立つ。森氏は黒色土器B類を深椀形態のIV類とこれとは若干異なる器形のV類に分けた。そして、瓦器椀の直接的祖形をV類に求めている。大阪北部や京都周辺出土の初期瓦器椀をみると、深椀形態をとるものや器高の低いものなど多様性がある。また、施釉陶器の器形自体にもかなりの形態差があり、このため森氏の分けたIV・V類もこのような多様性を反映したものであろう。いずれにせよ、楠葉型瓦器椀は楠葉型黒色土器B類椀から連続的に系譜関係を追うことができる。

一方、I b期の黒色土器A類椀から宮田遺跡土壤出土の在地和泉型瓦器椀へ系譜関係を追うことができる。このような黒色土器から瓦器への系譜を検証できる資料がいくつかあるので紹介してみよう。

#### 茨木市中条小学校遺跡

茨城市でも在地の黒色土器A類椀と楠葉型黒色土器B類椀が出土するが、両者の共判例は知られていない。瓦器椀出現直前の良好な資料として中条小学校遺跡土壤1出土資料がある（図25）。

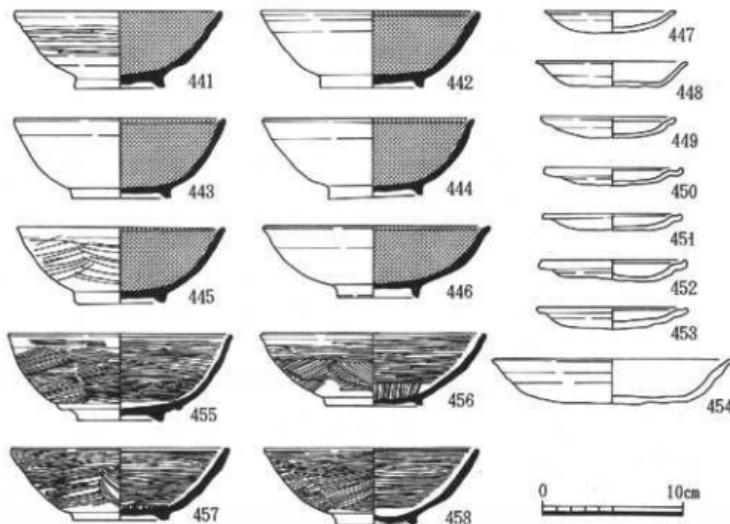


図25. 茨木市中条小学校遺跡 土壌1 (441~454), 包含層 (455~458)

土壤1からは黒色土器A類椀数点と土師器皿・皿が出土している。黒色土器A類椀は口径15~16cm、器高5.5~6cm、高台径7cm前後で、①口縁が直線的なもの(441)、②体部が丸味をもち深い形状のもの(442~445)、③口径に比して器高が低く、浅身のもの(446)に分けられる。器壁の磨耗によりヘラ磨きの観察が不充分であるが、内面は不定方向のヘラ磨きが比較的ていねいに施され、外面は441の口縁部付近を横方向に、445の体部から口縁部にかけて波状の分割磨きが確認できる。②・③には口縁端内側の沈線がある。胎土は粗く、441・442の口縁部付近に粘土紐の痕跡が認められる。土師器皿は口径10cm前後、器高1.3~1.8cmを測り、口縁がまっすぐのもの(447・448)と屈曲するもの(449~453)がある。杯(454)は口径17.2cm、器高3.2cmを測る。黒色土器A類椀の器形は灰釉陶器末期の丸石2号窯期の器形に類似し、土師器皿・杯は平安京内膳町跡S D41 Aに相当する。本稿のII a期初期・11世紀中葉の年代を考えられ、瓦器椀がすでに出現している可能性がある。

包含層からは桶葉型黒色土器B類椀と初期瓦器椀(457・458)が出土している。B類椀には体部下位に凸帶を付ける、いわゆる托上椀の形態化したもの(455)と浅身の椀(456)がある。後者の高台内側にはわずかにヘラ磨きがみられる。土壤1と同時期かやや先行するものであろう。

他に春日遺跡でも在地の黒色土器A類椀と桶葉型黒色土器B類椀が出土しているが、A類椀と土師器皿は同様の胎土である。

#### 能勢町の黒色土器

能勢町の事例について、瓦器椀は在来の黒色土器A類生産者集団が瓦器椀生産に転化したものであると森氏が指摘している。

黒色土器A類椀を中心とする法蓮坂遺跡C区土壤13Iと黒色土器A類椀・瓦器椀の共伴する中筋遺跡IH区土壤1出土資料が検討資料として有効である。前者は本稿のI b 2期に相当し、B類椀もわずかにある。A類椀は粘土紐巻きあげ成形で、深椀形態を基調とする。B類椀は形態、胎土からみてA類と同一生産者によるものとみられる。中筋遺跡ではA類椀が瓦器椀出現後もA類椀が残っているが、本稿II a 1期の大里遺跡(II) G13土壤墓も同様で、11世紀代をとおして両者が共存している。そして、A類椀生産工人の一部が瓦器椀の生産を行ったものとみられるが、瓦器椀のみに集約される高槻市などとは異なった生産・流通体制であることが判る。また、この際、黒色土器B類椀生産をほとんど経ることなく黒色土器A類椀から瓦器椀へと移行するが、このような傾向は和歌山県においても指摘でき畿内の周辺部の様相といえる。

### 大阪中部・南部

近江俊秀氏は八尾市木の本遺跡出土資料を検討し、A類椀とB類椀との間には明らかに形態・製作技法において差があること、また奈良県北部も同様の傾向にあると指摘している。

柏原市高井田遺跡では土壇5、ピット328から黒色土器A類椀とB類椀が出土している。時期は本稿のⅠb2期とみられる。A類椀は器壁が厚く、ヘラ削りはほとんどみられないのに対し、B類椀ではていねいなヘラ削りによって器壁が薄く、比較的ていねいなヘラ磨きが施されている。つまり、黒色土器A類の工人とB類の工人は異なることを示している。そして、木の本遺跡、高井田遺跡の黒色土器B類椀が瓦器椀へつながっていくものとみられる。

従来から中河内地域の和泉型瓦器椀は比較的ていねいに製作されるものと粗雑なものがあることに気付いていたが、前者は黒色土器B類椀から移行し、後者はA類椀から移行したものと考えられる。この点については、改めてこの地域の資料を検討して明らかにしたいと考えている。

しかし、一方ではA類椀とB類椀の工人差が顕著ではなく同一工人とみられる場合もある。近江氏は天理市前森・同在原遺跡出土例をこのようなものと考えている。大阪南部では松原市大和川今池遺跡もこの部類かもしれない。

### 黒色土器・瓦器椀の成形法

黒色土器と瓦器椀の評価にも関わる問題として成形についても考えてみよう。

瓦器椀の型づくり技法については、楠葉型と他地域のものでは粘土紐痕跡の有無をつうじて、各地域のものが同一成形法ではないと問題提起した。最近、坪之内徹氏も奈良県北部の瓦器椀・瓦質土器の検討から筆者と同じ見解をとるようになった。この結果、川越俊一・井上和人氏の行った瓦器椀製作技術の実験的復元はあくまで情況証拠であり、事実に基づくものではないと評価されるに至った。

このような成形法の再検討過程で、黒色土器B類椀については、内外面のヘラ磨きが密であるため、粘土紐の痕跡が認識できず、成形法について語ることができなかつた。

ところが、島上郡衝跡70地区井戸出土黒色土器B類椀では底部外面や口縁部に粘土紐痕跡がわずかながら確認できる。また、内底面中央部あるいはやや外周よりの部分がわずかに盛りあがる。これに対応するように、底部外面中央が凹んでいることが観察される。このような粘土紐の痕跡などは、粘土紐を左手手法によって巻きあげな

がら底部から体部へと成形したいったことを示すものである。このような痕跡は寝屋川市讃良郡条里遺跡出土の黒色土器B類碗にもみられる。

これに対し、楠葉型瓦器碗においては粘土板の結合痕が体部にはほぼ垂直にみられることから、一枚の粘土板を折り曲げて成形したものと考えられる。この際、内型が必要であったか疑問である。この粘土板結合痕と同じものが、I b期の土師器杯・小皿にすでにみられる。この技法は粘土紐巻きあげ技法をさらに簡略化したものであり、これが瓦器碗製作にも採用されるのである。つまり、この技法の検討によって土師器製作と瓦器碗製作の未分離であることが判る一方で、より量産化が瓦器碗において計られたことを示している。

黒色土器A類碗でも粘土紐の痕跡がみられる。この粘土紐巻きあげ法は在地の和泉型瓦器碗に受けつがれていく。

このように、黒色土器A類は伝統的な土師器製作技法を踏襲しながら瓦器碗生産へ移行する。一方、楠葉型黒色土器B類碗は出現当初から内外黒化処理・ヘラ磨きの寄せによってA類碗と異なることが強調され、大阪北部一帯に分布する。そして、焼成と成形法の改良を計って瓦器碗へと転化し大阪北部を中心とする分布圏が確立する。

以上、述べてきたように黒色土器から瓦器碗へという道程にはいくつかの形態がある。これを整理すると、①在地の黒色土器A類碗から黒色土器B類碗生産を十分に経ることなく在地の和泉型瓦器碗へ移行する。②黒色土器A類碗・B類碗生産が未分化な状態で瓦器碗へ移行する。③黒色土器B類碗から瓦器碗へ移行する。この三タイプを考えられるが、①として高槻市西部から茨木市城にかけてみられるA類碗や在地和泉型瓦器碗があげられる。②として松原市大和川今池遺跡例を仮にあげておく。③は楠葉型瓦器碗を展型とし、中河内にもみられるようである。

これらが複雑にからみあって流通しているのがI b期からII a期、つまり10世紀後半から11世紀中頃であるが、黒色土器の専業化を指摘するとするならばI b期の黒色土器B類碗においてであり、それが完成するのは瓦器碗成立後であると考えられる。ただし、その内容については土師器生産と未分離であるという点を欠落させてはいけないであろう。

## 2) 瓦器碗の研究

以前、宮田遺跡A区建物群北の溝内でII a 4・5期に相当する瓦器碗のうち楠葉型が58%、和泉型が42%を占めるため、この時期から和泉型が搬入あるいは生産された

ものと考えたが、前述のように瓦器椀初現期から二系統の瓦期椀が存在するわけである。

#### 和泉型瓦器椀

筆者が和泉型と称した瓦器椀は、製作における粘土組巻きあげ法や粗雑なヘラ磨きによって特徴づけられるが、その分布は大阪湾沿岸から瀬戸内地域へも広がっている。この広義の和泉型瓦器椀について、尾上実・三辻利一氏は胎土分析結果によつていくつかのグループを抽出した。このなかで、豊中市穂積遺跡・宮田遺跡出土資料は南河内などの資料と区別でき、淀川北岸西部地域を中心とする生産を推定された。

このような胎土分析は吹田市出土資料についても行われている。七尾瓦窯跡・都呂須・五反島・藏人の各遺跡出土資料が分析され、A・B・C群に大別されている。このうちA・B群は七尾瓦窯跡周辺で製作され、C群は別の生産地とされた。そして、C群は14世紀前後とみられるため、新しい生産地が出現したものとみられている。この結果をうけて、増田真木氏は12世紀後半に和泉型瓦器椀が流通するようになると、13世紀前半には確実に周辺部で生産を開始するようになるとした。

さきの尾上氏の分析とあわせて、13世紀頃には和泉型瓦器椀内部でかなり細分化が可能であるが、これは地域ごとに生産された黒色土器A類椀の系譜であることを考えると、当然初現期からみられることである。現状では初現期の資料が少ないが、今後の資料増加によって胎土分析も行われるなら、より明確となろう。なお、編年については本稿でも不完全なものに終わったため改めて作成したい。

#### 楠葉型瓦器椀

『上牧遺跡発掘調査報告書』では4期12小期に分け編年案を示した。大枠において修正の必要は無いが、初現期や終末期の様子が鮮明になり、本稿では2期10小期とした(図23)。

従来のものでは、11・12・13・14世紀がそれぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期に相当するようを考え、1世紀を3小期に分けるのが適当と判断した。その後、瓦器椀の初現が11世紀中葉から後半にあり、後述のように終末期が14世紀中頃と考えられるようになった。このため、Ⅰ・Ⅳ期を2小期に整理する方が判りやすいものと考える。こう考えるのは、従来Ⅰ-1期とした編年表に示したものは、現状ではこのような器形を呈すものは一点のみで、瓦器椀の器形が本来施釉陶器模倣であり、単一の器形ではないことが指摘できる。また、初現期のものに個体差が著しいこともあり、Ⅰ-2期に吸収するのが適当と判断した。同様にⅣ-1期としたものもⅢ-3期に吸収した。

従来の編年案と今回のものとの対応は、I-2がIIa1、I-3がIIa2、II-1がIIa3、II-2がIIa4、II-3がIIa5、III-1がIIb1、III-2がIIb2、III-3がIIb3、IV-2がIIb4、IV-3がIIb5である。編年の個々については前述したので省略するが、近時鮮明になってきた終末期の年代観について検討してみる。

前案では最終末のIV-3期としたものが、明徳元（1390）年創建の普門寺下層の富田遺跡から出土したため下限を14世紀末とした。南河内における尾上実氏や大和における川越俊一氏の年代観もほぼ同様であった。

このような瓦器椀終末期を14世紀末とする考えに対し、東大阪市西ノ辻遺跡58-7区井戸7出土資料に大和型瓦器椀IV-B、和泉形瓦器椀IV-4・IV-5期に属するものがあった。これらに元徳2（1330）年銘木簡が共存していた。このため、畿内の瓦器椀全体の終末期の年代が14世紀前半～中葉にまで遡ることが森島康夫氏によって指摘された。この他、府下の調査例で年代論を再考するものが二、三ある。

瓦器椀以外からも終末期の年代を想像するものが現れた。ひとつは、韓国新安海底沈船出土遺物に大和産瓦質火鉢が含まれていることである。この沈船の年代は出土した木簡が至治3（1323）年銘であることから、この年あるいは直後の年代に沈没したものとみられる。大和産瓦質火鉢の出現時期についてはなお検討の余地はあるが、川越編年のIV-B・C期には出現しているものとみられる。

本稿のIIb4期にみられる通称「ヘソ皿」とされる京都系土師器小皿はしばしば他地域へ搬出されている。福山市草戸千軒町遺跡SK990でも出土しているが、このSK990出土の吉備系土師器椀が貞和元（1345）年造営の尾道市浄土寺阿弥陀堂の甕から出土している。この甕は阿弥陀堂造営時のものとみられることから楠葉型瓦器椀IV-2あるいはIV-3期がこの時期に並行するものと考えられる。

このように終末期をとりまく状況から判断し、畿内産瓦器椀の下限年代は14世紀中葉前後とするのが現実的であると考える。また、これにともない13世紀代についても検討が必要となるが、従来の年代観を大きく修正するものではないと考える。なお、従来の編年案が各方面に利用されていることもあり、改めて編年案を提示したい。

### 3) 回転台土師器の研究

I期からII期にかけて、土器様相が瓦器椀、土師器杯・皿へ集約されていくことが判るが、この時期に従来論じられなかった回転台土師器がある。

郡家今城遺跡井戸5出土の杯・皿には回転ヘラ切り痕がある。このような回転力を

利用した土師器は畿内周辺部に存在し、クロ土師器、須恵系土師質土器ともいわれている。

この土師器は、須恵器生産が相対的に低下する9世紀以降に各地で出現するが、近江・紀伊では土師器工人が製作にあたったものとみられ、底部にはヘラ切り痕はない。一方、須恵器生産が依然活発な播磨ではヘラ切り痕があるものと、近江・紀伊に類似する二者が存在している。このため、須恵器工人も酸化炎焼成を行ったものとみられる。畿内では、この時期に黒色土器生産が活発化するため、回転台土師器・黒色土器は須恵器供膳具の不足を補うために生産が行われたものとみられる。郡家今城遺跡や吹田市垂水南遺跡出土例は畿内周辺部からの搬入と考えられるが、大阪府下では泉州地域において紀伊と類似するものが存在している。そして、IIa期には大阪北部でも確実に生産されているのである。

#### 大阪北部の回転台土師器

高槻市ではIIaⅠ期からIIaⅢ期にかけて出土が確認できる。表5のように少ないながら他市においても出土が確認でき、やはり同時期である。

大藏司遺跡土壙1では、底部ヘラ切りのものと底部糸切りの二者が存在する。宮田遺跡神社南地区では皿全体に占める割合がヘラ切り（図26-459・460）が6.11%、糸切りが0.21%である。他地域からの搬入品である可能性もあるが、安満遺跡出土例などでは、他の土師器杯・皿と胎土・色調において区別することが不可能である。

このような回転台土師器を焼成した遺構が、府立高校建設に伴う調査でツゲノ遺跡において検出されている。この焼成遺構（図27）は長径1m、短径0.4mの楕円形を呈し、埋土や底面には灰・炭がみられた。また、壁が赤変・硬化している。出土遺物は

底部糸切りの土師器杯・皿でふたつに分けられる。ひとつは口径9~10cmの皿で大藏司遺跡・宮田遺跡出土例と類似する。もうひとつは肉厚の底部から体部が大きく外反する杯（椀として方がいいか）で完形に復せるものは無いか、安満遺跡出土例

	遺跡名	ヘラ切	糸切	共伴資料
1	池田市神田北		○	楠葉型瓦器椀I
2	豊中市山ノ上		○	和泉型瓦器椀II
3	" 小曾根		○	和泉型瓦器椀II
4	箕面市稲生大日		○	黒色土器B類椀
5	高槻市宮田	○	○	楠葉型瓦器椀I
6	" 上牧		○	楠葉型瓦器椀II
7	" 安満		○	包含層
8	" 大藏司	○	○	黒色土器B類椀
9	" ツゲノ		○	

(461)に類似したものであろう。

表5 回転台土師器出土遺跡地名表

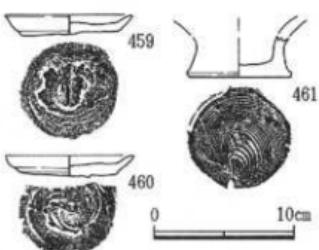


図26. 回転台使用の土器  
宮田遺跡(459・460), 安満遺跡(461)

ツゲノ遺跡のような焼成遺構は他に知られていないが、胎土・色調からみて製品は極めて狭い範囲に供給されたものであろう。

郡家今城遺跡や垂水南遺跡の資料は他地域からの搬入品として理解できるが、II a 期の回転台土師器は在地で生産されたことがほぼ確実である。しかし、土師器形成に回転力を利用する伝統は大阪北部において基本的に、その技術系譜は現状では不明である。

#### 他地域の回転台土師器

他地域でも瓦器椀出現期にしばしば回転台土師器がみられる。平安京跡烏丸小路西側溝出土資料もその一例である。

大阪南部の泉佐野市湊遺跡では11世紀前半とみられる黒色土器椀とともに底部糸切り皿が出土している。ここでも12世紀以後には糸切り皿は消失することを渋谷高秀氏

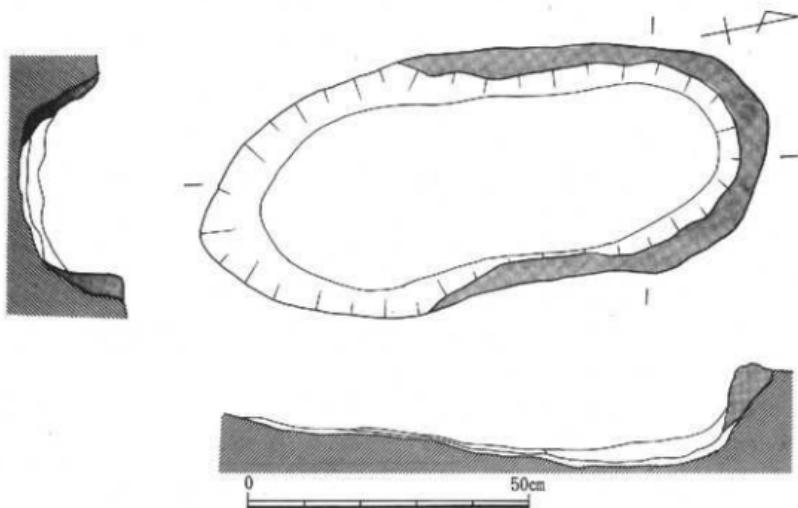


図27. ツゲノ遺跡土器焼成窯

は論じている。紀伊では、瓦器椀出現に呼応して糸切り・ヘラ切り技法による土師器杯・皿生産が開始され、瓦器椀消滅期まで続く。

大阪南部から和歌山にかけては前述のように9世紀から11世紀前半まで、回転台土師器が盛行するため、その技術の延長上として捉えることが可能である。しかし、泉州佐野市では瓦器椀出現後は回転台土師器が姿を消し、紀伊とは異なっている。むしろ大阪北部のあり方に近い土器様相となる。

少し離れるが三重県斎宮を中心とする南勢地方をみると、ここでは斎宮編年の後Ⅰ期・SE2000の時期に煮炊具が伊勢型鍋に転化し、小皿・台付椀など供膳具に回転台土師器が出現する。そして斎宮編年末期のSD3052の時期にほぼ消滅する。つまり、11世紀前後からほぼ12世紀代にみられ、遺物全体に占める割合は少ない。このため、新田洋氏は時期の限定された一過性のものとみている。

南勢地方は東海地方の陶器生産地に近く、灰釉陶器・山茶碗が容易に供給される地域である。このような状況は黒色土器・瓦器椀によって供膳具が賄われる大阪北部にも共通している。つまり、古代から中世へという過渡期に共通してみられる現象と捉えられる。

回転台土師器の系譜をどこに求めるかという問題が残っているが、漠然としているが、Ⅰ期末の古い土器生産体制が新たな生産体制へ移行・再編される過程にみられる現象であり、その存在は新たな生産体制に組み入れられなかった集団が存在し、その消滅はその集団が崩壊、あるいは中世的土器生産体制に吸収されたことを示していると考えられる。ある意味では古代的な生産体制の最終段階を示し、中世的な生産体制の確立と評価することも可能であろう。

また、回転台土師器の生産がつく紀伊など周辺部と大阪北部の相違が、単に現像面だけでなく生産体制そのものが大きく相違していたことが想像される。

#### 4) 中世社会成立期の特質

Ⅱ期の土器群を構成するものは、いずれも出現と消滅（消費地から消失する場合も）がほぼ同時期である。そこには生産や流通に関して共通する背景があるものとみられる。ここでは瓦器椀・東播系須恵器（瓦）、常滑窯製品について諸説を観察してみる。

##### 瓦器椀

黒色土器B類椀において、ある程度の専業化を指摘できるが、瓦器椀においてもより量産化を目指したものと前述した。しかし、今日の商業行為を伴うような性格をそ

こに見い出すことは不適当であろう。加えて、一方では分業形態や商業行為が不十分な瓦器窯が図28や表6のよう、楠葉型だけでなく大和型も生産地以外へある程度の分布範囲を占めることは何らかの歴史的背景がある。

楠葉型瓦器窯の生産地は枚方市楠葉東遺跡周辺にあるものとみられるが、この地域は摂関家領楠葉牧にあたる。12世紀前半の藤原忠実家年中行事を記す『執政所抄』において「黒器」の奉納を楠葉牧に下知している。また『類聚雑要抄』には「楠葉国作手」として内膳司に所属する土器生産者のいたことが記されてある。このため、楠葉型瓦器窯が摂関家や内膳司に従属する生産者集団によって製作さ

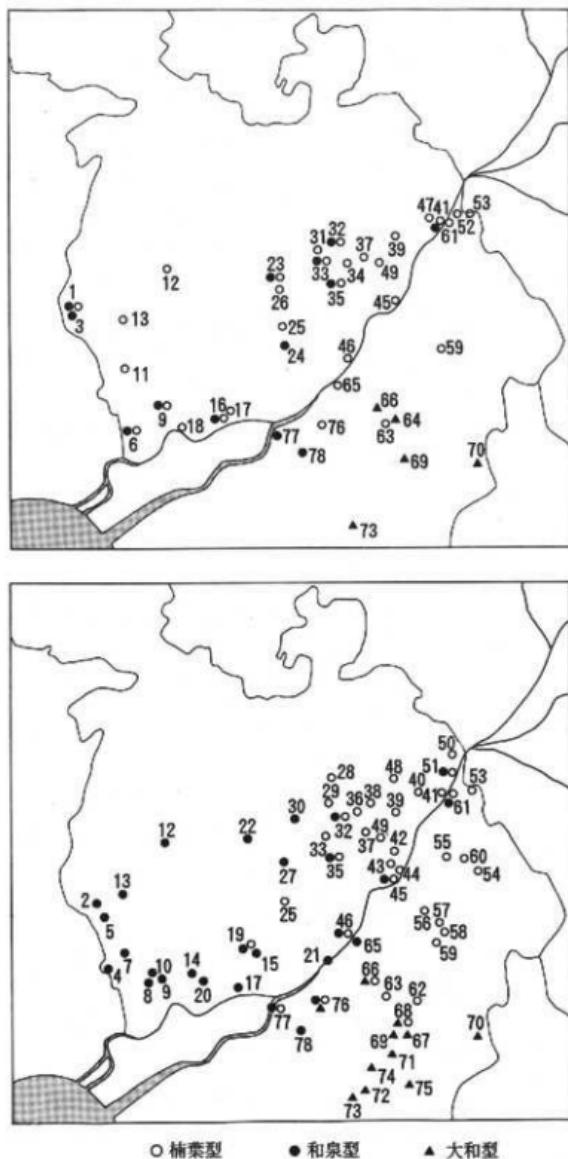


図28. 瓦器窯分布の変化 11・12世紀（上），13・14世紀（下）

表6 瓦器焼出土地名表（時期は橋本・尾上案を中心に）

番号	遺跡名	所在地	楠葉				和泉○		大和●	
			I	II	III	IV	I	II	III	IV
1	神田	北前田	池田市神田1丁目	○			○	○	○	
2	宮の田	南田	“石橋4丁目				○	○	○	
3	神原	西北	“神田3丁目				○	○	○	
4	原田	西田	豊中市原田西町							
5	螢	池	“螢池北町1丁目							○
6	上津	島	“上津島1丁目	○	○		○	○	○	
7	山ノ	上	“山ノ上町						○	
8	穂	積	“穂部西町1丁目					○	○	
9	小曾	根部	“北条町1丁目					○	○	
10	服新	免谷	“玉井町1丁目						○	
11	如意	瀬川	箕面市如意谷					○	○	
12	瀬川4丁目第1地点	人	“瀬川4丁目	○					○	
13	葛	志部	吹田市江坂町2丁目					○	○	
14	義	志	“吉志部					○	○	
15	義	國	“高浜町					○	○	
16	都	呂反	“内本町2丁目					○	○	
17	五	尾瓦	“岸部5丁目					○	○	
18	七	尾	“垂水町1丁目					○	○	
19	垂馬宿	久原	摂津市鳥飼下					○	○	
20	中河宿	西良校	茨木市宿久庄					○	○	
21	東中条	小学校	“中河原					○	○	
22	烟	郡	“沢良宣					○	○	
23	塚脇10・12・C2号墳	7号墳	“新中条							
24	郡家	B33号墳	“郡							
25	塚原	水室	“郡3丁目他							
26	上鶴	郡衙	高槻市塚脇1丁目							
27	宮	之江	“南平台							
28	津富	田	“塚原							
29	芥上	神	“水室町1丁目							
30	安原	原寺	“清福寺町他							
31	堤	原	“宮田町							
32	津	田	“津之江北町							
33	富	川	“富田町4丁目							
34	芥	郡	“殿町							
35	上天	山溝	“桃園町							
36	安原	跡牧	“天神町							
37	梶	原	“高垣町							
38	上天	寺	“梶原1丁目							
39	安原	牧川	“上牧町5丁目							
40	梶	原	“須賀町							
41	上天									
42										

番号	遺跡名	所在地	楠葉				和泉○ 大和●			
			I	II	III	IV	I	II	III	IV
43	中前	寺島	高槻市辻子1丁目 " 前島3丁目地先	○	○	○	○			
44	大柱	塚本	" 大塚3丁目地先 " 柱本地先	○	○	○	○		○	○
45	櫛悉	原禮	" 五領町	○	○	○	○		○	○
46	高	南寺	" 成合北の町		○	○	○			
47	提	城跡	" 城内町		○	○	○			
48	廣	瀬	島本町広瀬		○	○	○			
49	廣	瀬	" 広瀬地先	○	○	○	○		○	
50	楠	葉	枚方市北楠葉町	○	○	○	○			
51	楠	葉	" 野田3丁目		○	○	○			
52	楠	葉	" 山田池南町		○	○	○			
53	出	屋	" 小倉東町		○	○	○			
54	小	倉	" 山之上北町		○	○	○			
55	山	上	" 秩尊寺・藤田町		○	○	○			
56	之	田	" 井下ノ天		○	○	○			
57	藤	田	" 山山浦山		○	○	○			
58	藤	田	" 井下ノ天		○	○	○			
59	交	子	" 茄子作3丁目		○	○	○			
60	交	北	" 交北2丁目		○	○	○			
61	淀	川	" 楠葉地先	○	○	○	○		○	○
62	国	宮	寝屋川市国守町	○	○	○	○			
63	高	宮	" 高宮	○	○	○	○			
64	高	宮	" "		○	○	○			
65	仁和寺(淀川河床)		" 仁和寺地先	○	○	○	○		○	
66	良	郡	" 昭栄町		○	○	○		●	●
67	坪	条	四條畷市坪井		○	○	○		●	●
68	忍	ヶ丘	" 岡山		○	○	○		●	●
69	中	駅	" 中野		○	○	○		●	●
70	田	新	" 上田原・下田原		○	○	○		●	●
71	北	塚	大東市北新町		○	○	○		●	●
72	灰	淨	"		○	○	○		●	●
73	灰	水	"		○	○	○		●	●
74	御	塚	"		○	○	○		●	●
75	寺	淨	" 寺川2丁目		○	○	○		●	●
76	大	庭	守口市	○	○	○	○	○	●	●
77	八雲北(淀川河床)		"		○	○	○	○	○	○
78	西三莊・八雲東		守口市八雲東町・門真市門真		○	○	○	○	○	○

れていたことが判る。

楠葉型瓦器椀はⅡa期には大阪北部一帯に分布しているが、Ⅱb期には枚方市や高槻市を中心とする地域に限定される。このような現象は瓦器椀の簡略化傾向が顕著となる時期にみられる。この時期は、一方では瓦質の中・大型製品の生産が開始されたものとみられ、従来の瓦器椀生産から瓦質製品を含む生産体制へと移行しつつあった。このような動きは一連のものであるが、この時期はまた楠葉牧が攝関家から春日若宮領へ伝領される時期でもある。加えて、政治的には承久の変（1221年）による公家社会の地位が相対的に低下する時期でもある。

最近、大和型瓦器椀の生駒西麓から淀川南岸部への分布がますます明らかとなってきた。四條畷市・大東市では大和型がほぼ独占的に分布していると言える。大和型は南山城地方・近江の一部へも分布しているが、南山城でも独占状態である。

この大和型の分布がどのような契機・背景にあるのかを考える時、大阪府下の瓦器椀が楠葉型や和泉型・大和型が混在しているのに対し、大和国内の瓦器椀は大和型に限定される。これは他地域からの瓦器椀流入を拒む強い規制が存在したことを想像させる。この規制を可能にしたのは興福寺の権威と想像することができるが、後のⅢ期には大和産瓦質土器、とくに火鉢と興福寺の関係は周知されており、Ⅱ期においても興福寺の存在を無視して論じることはできないであろう。

このように、楠葉型や大和型瓦器椀の背景には当時の最高権門・大寺院が存在していたと考えられる。

#### 東播系須恵器

ここでは、東播系須恵器の研究をすすめてきた荻野繁春・神崎勝・森田稔氏の考えをみることにする。

荻野氏は東播窯の性格について、11世紀末における窯業集団の動きは画期的であり、六勝寺系瓦を併焼する点から寺院勢力と窯業生産者との関係を考え、院政という新たな体制の出現と地方の公権力がその必要にかられて窯業集団を再編成したとも考えられるとした。そして、神出窯が「神出保」に所在すること、魚住窯が魚住泊に近いことを考えて、保が国衙領、泊も国衙と関連性があるため国衙との密接な関係を考えている。また、12世紀後半以降、流通の活発化に伴い商品化指向を製品に認め、13世紀後半～14世紀にかけて盛行するものの、新時代への生産の集約化に遅れ、備前窯に比べ商品価値が劣るため衰退したとみる。荻野氏は東播系須恵器の成立に関して院との関係を指摘するが、それが中世かどうかという点については明言を避けている。

神崎氏や森田氏も荻野氏の編年や生産体制の変遷についてはほぼ共通の認識を示しているが、神崎氏は神出窯と院との関係を積極的に考え、「生産と流通が中央の古代的政治権力によって強固に把握されていた側面を看過すわけにはいかない」としている。そして、その関係は古代的性格が濃厚であるとし、東播における瓦生産が衰退し、鉢の生産へと転換すると時期に「中世」須恵器の成立とすべきであると考える。これは院の性格をどうみるかという考え方になり、神崎氏が石母田説に拠って“古代末”とする以上接点は見い出せないであろう。

森田氏は神崎氏が石母田説によって院政を「古代末期権力」とするのが前提であるが、院が古代権力かどうか現状では諸説があるとし、神出窯成立に際し、国司の直接的関与で成立したことは事実であるが、その生産形態は直接密着したのではなく、国司の関心は瓦生産にあり、日常雑器類は在地豪族層が掌握したと考えた。そして、「公権力」による「直接的関与」は中世窯業成立期の大きな特徴ではないかとしている。この森田氏の考え方に対し、神崎氏は政治形態の変化をもって歴史区分を行うべきであるとし、院政を古代末期の政治形態とさらに強調している。

#### 瓦生産

本稿では瓦生産に関する検討はできなかったが、瓦の研究から古代から中世への移行について重要な指摘がいくつもある。

古代的な土器様相が変容していく9世紀後半には、平安京出土瓦は粗悪化が顕著となり、いゆる一本造り技法によるものが11世紀初めまでみられるという。11世紀初めの藤原道長の法成寺造営に際し、龜岡市篠町王子A号瓦窯の瓦が使用されているが、これを契機として、その費用を地方の弁済の形をとったのに対し、11世紀前半段階から瓦そのものの搬入へと変化し、そのあり方が摂関家と木工寮工人との私的従属や国司との私的関係を中心とするものから始まったと近藤喬一氏は指摘している。

つづく院政期に顕著となるのは播磨産瓦である。とくに11世紀から12世紀にかけ西脇・三木・神出・魚住の各窯址群が成立し、須恵器製作技術を駆使した東播磨系瓦が製作された。その性格については各氏が須恵器の研究から指摘しているところである。この東播磨系瓦の主な供給先は六勝寺や鳥羽離宮など院政々権と関係の深い遺跡である。近時、生産地と消費地での研究が進展し、丹治康明・吉村正親氏らの論考がある。ここでは、今里幾次・上原真人氏の説をみることにする。

今里氏は12世紀前半～13世紀初頭とみられる高砂市魚橋瓦窯と同文の瓦が六勝寺などから出土し、これらは院政々権を背景に建立・維持されたもので院立寺院と称すべ

きものであり、また各国で生産する瓦が京都への搬出を目的としているため、各地から鳥羽離宮に一度集められたものが院傘下の寺院に分配されたものと考え、その流通に院の一元的支配をみた。そして瓦陶兼業窯の発足と進展は院政の造寺による需給増加に起因し、それに対処するため地方窯を動員し從来の須恵器窯の転用強化によって生産増を図ったと考えた。そして、その没落は承久の乱によるものとしている。

今里氏が播磨産瓦の京都への搬出には、院政期の播磨国司の成功の問題を指摘したことを見て、上原真人氏は京都出土の播磨系瓦を分析した。氏は尊勝寺南西部の瓦溜出土の軒瓦の大半が播磨系であるが、尊勝寺へは創建時だけではなく、比較的長期にわたって瓦が供給されたとしている。そして、尊勝寺のように国衙と特定寺院の関係が想定できる一方で、魚橋瓦窯製品が多數の寺院で出土することから播磨と特定寺院という一元的説明では不充分であることを指摘している。また、尊勝寺の瓦供給地と記録にある多可郡安田保に関連して、安田保よりも瓦運搬に適した神出・三木に莊園間交易をつうじて瓦生産が依頼された可能性を想定した。そして、この瓦運搬ルートは比較的しっかりした日常雜器運搬ルートとみている。

上原氏は京都搬出のため瓦生産を拡大したのが11世紀後半～12世紀初めとし、この時期に須恵器工人を大量導入し、さらに運搬ルートを須恵器雜器運搬ルートに便乗したと考えるが、確かに11世紀後半には神出窯製品の鉢などは遺跡出土資料にみられるものの、まだ少量であり、瓦の搬出と雜器の搬出が同時進行するなかで、おたがいが増産していったのではなかろうか。また、瓦生産における12世紀のある時点から国衙機構を仲介とせずに京都へ搬出されるということは、雜器、とくに鉢においても大量に出土することからは同じことが指摘できる。

このように、東播磨における須恵器と瓦がどちらが主か従かという論議はあるにしても、院や国衙機構とのむすびつきのなかで成立・発展していったものと考えられる。

ついで注目されるのは鳥羽離宮造営に讃岐産瓦が使用されている。御所の造営は讃岐守高階泰仲があたったが、高階家は院政初期に各地の国司を歴任した家柄である。播磨産瓦が瓦陶兼業窯であるが、ここでは瓦窯跡のみが単独で形成されていることが、十瓶山古墳跡群の調査で知られている。

このような瓦専業体制を保持できた背景は讃岐国司との関係を考えざるをえず、その製品は京都搬出を指向したものである。同時に十瓶山窯の須恵器も京都周辺へ搬出されるが、瓦の出土地が比較的限定されるのに比例してか、12世紀前半には出土例がなくなる。前後して搬入される播磨系の瓦・須恵器の前に後退したものとみられる。

## 常滑焼のあり方

常滑焼と総称される知多半島の製品は、12世紀後半から14世紀にかけて、本稿のⅡa期後半からⅡb期に西日本一帯に分布する。大阪南部の高石市伽藍橋遺跡や京都市内で鉢が出土する以外、出土するのは壺・大壺にほぼ限られている。

近時の研究は赤羽一郎・中野晴久氏が精力的にすすめているが、両氏の年代観に14・15世紀で約半世紀のズレが生じているが、ここでは中野氏の考えに沿ってみた。

成立期の12世紀前半には三筋壺・小瓶・広口瓶という仏器的性格や経塚遺物が目立つ。12世紀中葉には大府市吉田1・2号窯、東海市社山窯などにおいて鳥羽離宮や法金剛院あるいは平安京へ運ばれた瓦を焼成している。これらは在地領主あるいは国司に掌握されて、中央権門への接近を目的に営まれたものと考えられ、同時に知多半島には、政治・経済上の権益を有していた熱田神宮の存在がみられる。

13世紀前後を境に器種が減少し、生産は壺に集約化され、半島中央部の窯が増大し、14世紀前半にかけて生産が最も盛んとなる。中野氏が14世紀後半から15世紀にかけて、知多古窯址群から常滑窯へと表現するように、窯場の集約がみられ、同時に西日本一帯では出土量が激減している。

常滑焼の成立については、中野氏は前代からの伝統によったものではなく突如として出現したものであるとし、知多地方における寄進地系荘園の成立と陶器生産本格化は同時期であると指摘している。また、13世紀前後の変化は燃料枯渇と鎌倉幕府の成立による荘園制の変質という側面に注目している。

このようにみてくると、中野氏は最近の論文で陶器工人が特定の権門・寺社と結びついていたことに否定的であるが、常滑窯のあり方は東播系須恵器などと類似し、そこに権力との依存関係を見い出す方がいいのではなかろうか。

以上、概観してきたようにⅡ期の主要な構成要素である瓦器椀・東播系須恵器(瓦)、常滑窯において、その生産や流通に当時の社会を支配した摂関家・院・寺社が直接・間接に関与したことが認められる。このような関係を神崎氏のように古代末期として捉える立場も存在する。しかし、権門・寺社のこのような手工業生産への関与を中世社会成立の指標とすることも可能であろう。

そして、Ⅱ期全体をとおして生産・流通を支えた権威が存在し、Ⅱa期からⅡb期にかけて、つまり13世紀前後には大きな変化があり、中世窯業生産開始期から比べると弱体化したものとみられる。そして、その権威が崩壊するのはⅡ期の主要な器種組成が姿を消す南北朝期とみられる。

## 6. まとめにかえて

図29は9世紀から17世紀にかけての土器・陶磁器の出土状況を概念図としたものである。これを参考に、今後の研究への展望を述べてまとめにかえたい。

本稿では、出土土器・陶磁器をもとにⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期とした。筆者はこれを古代後期・中世前期・中世後期と捉えている。それは黒色土器の使用された時期・瓦器椀の使用された時期・瓦器椀消滅以後という単純な時期区分である。しかし、黒色土器・瓦器椀それ自体の研究は充分時期区分論を展開するのに有効であることを示した。

Ⅰ期は古代的な法量分化にもとづく器種組成が崩壊し、同時に和泉陶邑窯の須恵器生産の衰退が指摘できる。須恵器供應具の不足を補うものとして黒色土器生産が活発

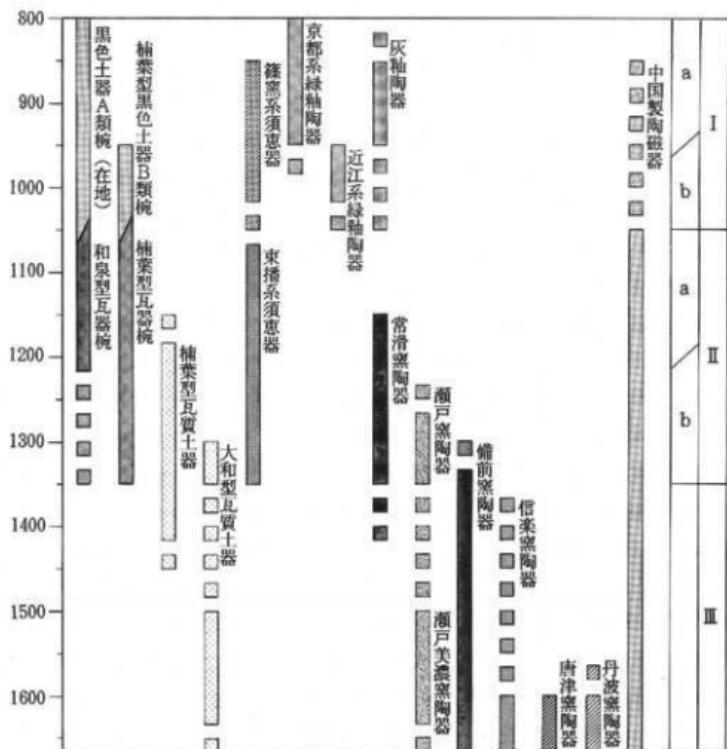


図29. 古代後期・中世の土器・陶磁器出土概念図

化し、畿内周辺部では回転台土師器が中心となる。総体として、律令的な生産体制が弛緩するが、このような現象は綠釉陶器にもみられる。洛北窯から洛西窯へ、さらに近江窯へ移行するに従い、特產品化が強まる。同時に、篠窯産須恵器、とくに鉢が特產品化する。黒色土器B類椀にもそのような専業化、特產品化傾向をある程度指摘できる。

このように、Ⅰ期以前の律令制にもとづく生産体制が保たれていた時期を古代前期とするならば、Ⅰ期を古代後期と捉えることができる。このなかで、特產品化、専業化指向がみられ次代への準備期と捉えられる10世紀中葉以降を古代末期と称したい。

黒色土器や回転台土師器などⅠ期の主要器種が11世紀前半をもって姿を消し、これに代わって11世紀中頃には新しい土器群が出現しⅡ期を構成する。瓦器椀・東播系須恵器などは権門・寺社勢力を背景に生産・流通するもので、明確な器種別分業も強い規制があったものとみられる。ただし、実際の土器生産や流通にあたったのは、権門・寺社と從属関係にあった在地富豪層と呼ばれる勢力であったとみられる。このような新たな生産・流通体制を土器研究からみた中世社会の開始と評価したい。

12世紀後半から13世紀前後には瓦質製品の出現や東播系須恵器・常滑・古瀬戸など諸物資の遠隔地流通が活況を呈し、この時期に中世の開始を考える見解も多いが、筆者はひとつの時期の性格を象徴するような歴史的背景をもつ瓦器椀などを重視したい。

Ⅱ期の終末期には楠葉産瓦質土器に代わり、大和産瓦質土器が出現する。また、東播系須恵器や常滑窯製品に代わり備前窯製品が京都などでは比較的多くみられる。このような諸製品の交替は、從来から質の優劣によって論じられてきた。果して、それが事実に即したものかという疑問は本文中に記してきた。筆者はむしろ中世前期を支配した権威の崩壊という側面が大きな作用を及ぼしていると考えたい。

Ⅲ期は資料も少なく、筆者の方量の及ぶところではない。しかし、近時活況を呈す15・16世紀の考古資料の蓄積は高槻市でも例外では無い。これを論じるのに多くの日数を要しないであろう。

以上、古代後期・中世の土器様相を概観したが、11世紀中頃や14世紀後半～15世紀は大阪北部における集落の画期とも合致している。かつて清水三男は「村落史上、中世近世の区別は時間経過の便宜上の区分によるものではなく、村落自身のもつ諸種の性質から自ら来る時代区分なのである」（『日本中世の村落』1942年）とした。本稿で筆者が古代後期・中世とした時代区分も単なる便宜的・恣意的なものとして設定したのではないことを、そして筆者の研究が清水のめざした中世村落の具体像を解明す

るための一手法であり、土器、陶磁器研究のみを目ざすものでは無いことを理解していただけたであろうか。

本稿をなすにあたり、先学諸氏の業績や最近の重要な報告書・資料を参考とすることができなかった。本文中で重要とみられるものについては参考文献を作成したので参照していただきたい。

また、資料見学等でお世話になった百瀬正恒・奥井哲秀・田上雅則・野口尚史氏に紙面を借りて感謝する次第である。最後に本稿が大阪北部における調査・研究の一助に、中世考古学を志す仲間の参考となれば幸である。

#### 追記

脱稿後、新庁舎建設に先立つ上田部遺跡の調査において、本稿でⅡa期とした楠葉型瓦器碗がまとまって出土した。そのなかに、粘土紐巻きあげ痕の認められるものや、口縁端の沈線がみられない一群が含まれていた。文中で触れたように、瓦器碗成形法において粘土紐巻きあげかどうかということは、専業化の問題とも深く関わる問題である。この点については、本年2月に開催された大和古中近研究会においても、大和型瓦器碗の成形法について論議され、多様なあり方が指摘されている。

このように、瓦器碗研究は80年代の編年・成立過程論を踏まえて、技法面での解明も大きな課題として残されている。このため、畿内の中世土器研究の柱としての瓦器碗研究の再構築を呼びかけたい。

- 瓦器銘文など（遺跡番号と同じ）
1. 「池田市埋蔵文化財発掘調査概報」 1986年度 I 池田市教育委員会 1987年
  2. 同上
  3. 「池田市埋蔵文化財発掘調査概報」 1989年度 J 池田市教育委員会 1990年
  4. 「原田西遺跡（大阪府域）」 I 浦名川流域原田下水処理場遺跡調査団 1981年
  5. 「鹿島市埋蔵文化財発掘調査概要」 1983年度 J 鹿島市教育委員会 1984年
  6. 「上庄中津市埋蔵文化財発掘調査概要」 府宮上庄島住宅遺跡調査団 1984年
  7. 「鹿島市埋蔵文化財発掘調査概要」 1982年度 J 鹿島市教育委員会 1983年
  8. 「徳島横跡発掘調査説明会資料」 鹿島市教育委員会 1981年
  9. 「小小庭横跡発掘調査記録と資料」 昭和52、53年度 J 鹿島市教育委員会 1979年
  10. 「鹿島部遺跡第13次調査報告書」 鹿島市教育委員会 1988年
  11. 「鹿島部遺跡第23次発掘調査報告書」 鹿島市教育委員会 1988年
  12. 「如意谷遺跡調査報告書」 如意谷遺跡調査団 1978年
  13. 「如意谷遺跡調査報告書」 番面市遺跡調査会 1982年
  14. 「鹿島人遺跡」 吹田市教育委員会 1979年
  15. 「昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要報」 吹田市教育委員会 1986年
  16. 「昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要報」 大阪府吉光寺発掘調査の遺物 「古代学研究」 第54号 1969年
  17. 「文化財紀要」 I 吹田市教育委員会 1989年
  18. 「古代を考える」 50 古代を考えて文化財を考える 1989年
  19. 「昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要報」 吹田市教育委員会 1985年
  20. 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要報」 吹田市教育委員会 1990年
  21. 「概算津史」 津市役所 1977年
  22. 「宮脇薰氏から資料を拝見
  23. 同上
  24. 同上
  25. 「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要報」 天木市教育委員会 1990年
  26. 「宮脇薰氏から資料を拝見
  27. 「昭和62年牧野遺跡発掘調査概要報」 I 天木市教育委員会 1988年
  - 28~46. 「上牧野遺跡発掘調査報告書」 高槻市教育委員会 1980年など
  47. 「高槻市立高槻遺跡調査報告書」 高槻遺跡調査会 1988年
  48. 「鳴尾上郡御術史跡発掘調査報告書」 13 高槻市教育委員会 1989年
  49. 「高槻城史跡ノ丸跡発掘調査概要報告書」 高槻城跡遺跡調査会 1987年
  50. 「野口尚史氏から資料を拝見
  51. 「宇治川方市埋蔵文化財調査報告書」 I 枚方市文化財研究調査会 1980年
  52. 「宇治川方市埋蔵文化財調査報告書」 II 枚方市文化財研究調査会 1981年
  53. 「出土品目一覧表」 枚方市文化財研究調査会 1985年
  54. 「小山田上天王堂跡発掘調査概要報告書」 枚方市文化財研究調査会 1978年
  55. 「小山田上天王堂跡発掘調査概要報告書」 遺物 藤田山遺跡調査団 1975年
  56. 「枚方市埋蔵文化財調査報告書」 枚方市文化財研究調査会 1983年
  57. 「枚方市埋蔵文化財調査報告書」 V 枚方市文化財研究調査会 1984年
  58. 「字治田上生氏から資料を拝見
  59. 「国守遺跡調査概要報告書」 I 寝屋川市教育委員会 1979年
  60. 「高麗寺遺跡調査概要報告書」 IV 寝屋川市教育委員会 1985年
  61. 「高麗寺市教育委員会で資料を保管」
  62. 「高麗寺市教育委員会で資料を保管」 I 大阪府教育委員会 1989年
  63. 「忍鳥ケ丘駅前遺跡発掘調査概要」 II 四條畷市教育委員会 1983年
  64. 「忍鳥ケ丘駅前遺跡発掘調査概要」 I 四條畷市教育委員会 1978年
  65. 「大東市良多里から資料を拝見
  66. 「北条寺遺跡調査概要」 I 北新町遺跡調査会 1986年
  67. 「北条寺遺跡調査概要」 II 大東市教育委員会 1987年
  68. 「大庭北遺跡発掘調査概要」 I 大阪府教育委員会 1984年
  69. 「守口市教育委員会で資料を保管」
  70. 「中野原川遺跡発掘調査概要」 I 四條畷市教育委員会 1980年
  71. 「大東市北新町遺跡第1次発掘調査報告書」 北新町遺跡調査会 1986年
  - 72~74. 「寺川・北条寺遺跡発掘調査報告書」 大東市教育委員会 1987年
  75. 同上
  76. 「大庭北遺跡発掘調査概要」 I 大阪府教育委員会 1984年
  77. 「守口市教育委員会で資料を保管」
  78. 同上

## 参考文献

- ア 赤羽 一郎「當清焼をめぐる若干の考察」『知多半島の歴史と現在』2 1990年  
 " " 「當清」『世界陶器全集』3 1977年
- イ 池田市教育委員会「池田城跡・主郭部発掘調査概要報告Ⅰ-1」1990年  
 石浦 清司「旗東縣出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第7号 1983年  
 伊野 近富「織窯原形と阿波系原形の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号 1996年  
 今里 幾次「播磨窯瓦裏跡」『播磨考古学研究』1990年  
 芙木市教育委員会「平成元年度免強調査概報」1990年  
 ウ 上原 真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 1978年  
 オ 大阪府教育委員会「大庭北遺跡免強調査概要・Ⅱ」1984年  
 " " 「神立・西ノ辻・鬼虎川遺跡免強調査概要・Ⅱ」1984年  
 " " 「法善寺遺跡免強調査概要」1988年  
 " " 「中筋跡免強調査概要・Ⅳ」1987年  
 " " 「大里遺跡免強調査概要」1985年  
 " " 「同Ⅱ」J 1986年  
 " " 「同Ⅲ」J 1986年  
 " " 「ツゲノ遺跡免強調査概要・Ⅲ」1988年  
 近江 俊秀「黒色土器から瓦器へ—大和地方出土資料を中心として—」『中近世土器の基礎研究』VI 1990年  
 小野 正敏「出土陶磁器よりみた15・16世紀における窯期の素描」『MUSEUM』No.416 1985年  
 菊野 駿春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学公々誌』第3号 1985年  
 " " 「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶器』14号 1986年  
 フ 川口 実海「16世紀における大和型土器の動向」『中近世土器の基礎研究』VI 1990年  
 井崎 雄「古代末期の瓦張廬における須恵器生産—加古川流域史の一観(三)」『季刊河』第12巻第1号 1987年  
 " " 「東播磨における中世須恵器の成立—中世および中古土器の成立をめぐって—」『季刊河』第13巻第3号 1988年  
 キ 木戸 驚寿「近江における15-16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究』V 1989年  
 京都市埋蔵文化財研究所「北野天香寺免強調査報告書」1983年  
 コ 近藤 翁一「瓦からみた平安京」1985年  
 シ 稲原 芳秀「SK900土器について」『草戸千軒』158 1986年  
 沢谷 高秀「和泉国における土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』V 1989年  
 ス 吹田市教育委員会「成人遺跡」1979年  
 " " 「昭和63年度埋蔵文化財緊急免強調査概報」1989年  
 " " 「鶴呂領遺跡の免強調査」『文化財紀要』2 1986年  
 篠原 俊夫「大阪府南部の瓦質土器生産」(2)『中近世土器の基礎研究』V 1989年  
 タ 高橋市教育委員会「上牧遺跡免強調査報告書」1980年  
 美津 淳一郎「陶器(原始・古代編)」『日本の美術』No.235 1985年  
 ナ 中野 曜久「鐘塙・御林古墳群の編年的研究」『知多古文化研究』2 1988年  
 " " 「中世業地としての知多半島」『知多半島の歴史と現在』2 1990年  
 佐良島国文化財研究所「平城京免強調査報告」VI 1975年  
 " " " " " 同" V 1985年  
 ニ 新田 誠「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」『マージナル』No.9 1988年  
 知如意谷遺跡調査団「如意谷遺跡」1982年  
 ノ 鹿児島県埋蔵文化財研究会「姶勢町における埋蔵文化財の調査」1985年  
 ハ 橋本 久和「北浜出土の中岡製陶器について」『筑河章文化資料』29・30号 1982年  
 " " 「中世土器の製作技法ノート(1)」『中近世土器の基礎研究』III 1987年  
 " " 「中世成立期の土器様相」『日本史研究』330 1990年  
 " " 「80年代の瓦器統研究をめぐって」『博物館学芸員課年報』第5号 進手門学院大学 1991年  
 フ 府営上津島住宅遺跡調査団「上津島南遺跡免強調査概報」1984年  
 マ 前川 要「平安時代における日本出土施釉陶器研究の現状と課題」『歴史時代土器研究』第5・6号 1989年  
 " " 「平安時代における施釉陶器の編年的研究」『古代文化』第41卷第5号 1988年  
 " " 「平安時代における施釉陶器の模式論的研究」(上)・(下)『古代文化』第41卷8・10号 1989年  
 松岡 良憲他「垂水南遺跡免強調査概要」『第・香・仙』第40号 1986年  
 関壁 忠彦「考古学ライブラリー-60、備前焼」1991年  
 モ 百瀬 正恒「平安時代の鍍鉄陶器」『中近世土器の基礎研究』II 1986年  
 森 伸「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究』IV 1988年  
 " " 「能勢の古代末・中世土器」『中世土器研究』55号 1989年  
 " " 「西日本の黒色土器生産」(上)『考古学研究』第37卷第2号 1990年  
 " " " " " (中) " " " " " 第37卷第3号 1990年  
 " " " " " (下) " " " " " 第37卷第4号 1991年  
 森田 稔「東播磨系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 1987年  
 ヨ 吉岡 康悟「中世陶器の生産と流通(二)」『考古学研究』110号 1981年

## 編集後記

昭和63年度・平成元年度の高槻市文化財年報をまとめることができました。

この2年間も開発行為にともなう多数の発掘調査を実施いたしました。このなかには、調査途中のため本書には掲載していませんが、新池遺跡のように古代史研究に新たな一ページを書き加えることのできる調査もあります。

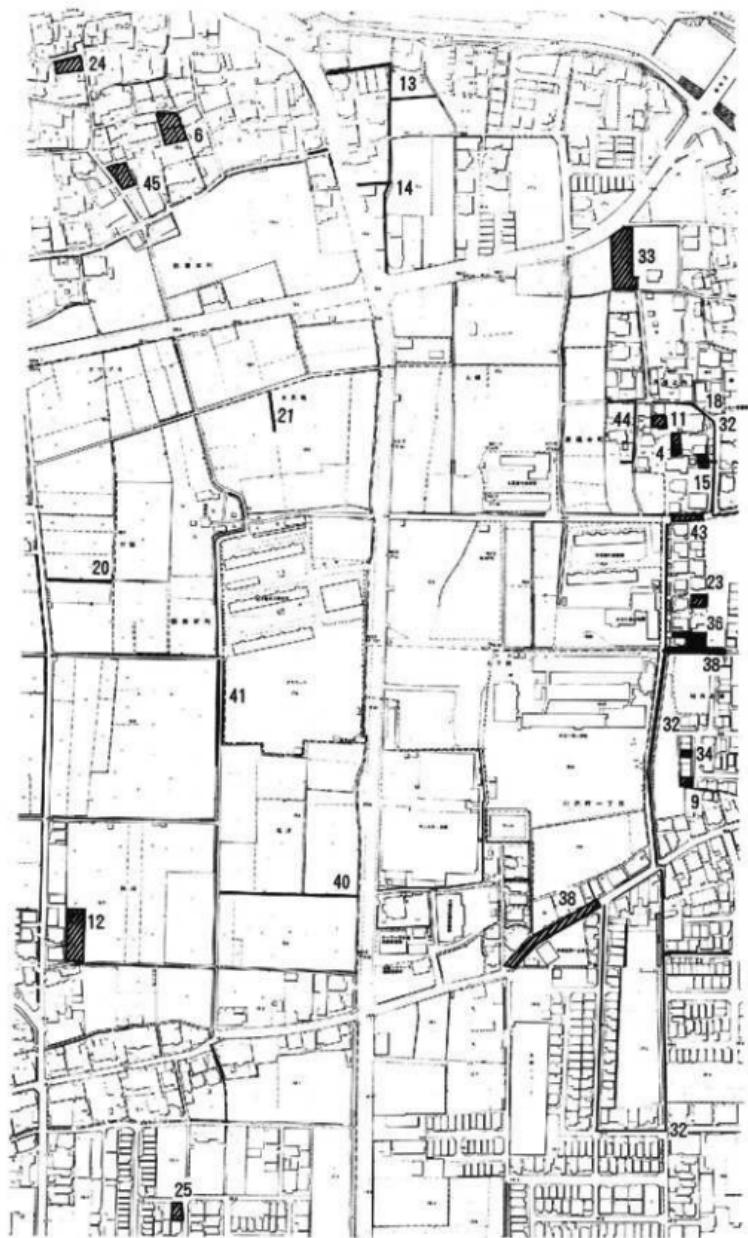
発掘調査だけでなく、とかく古代史研究でとりあげられる阿武山古墳の環境整備や清福寺太子堂の移築復元を実施するなど、遺跡や建造物がより市民に親しみを覚えていただけるよう努力しています。

前回から発掘調査担当者の自己研鑽の成果を発表する場としても年報を活用しておりますが、今回は高槻城跡から出土した駒の資料紹介と本市を中心とした大阪北部の古代後期・中世土器に関する研究ノートを掲載しました。これらが、今後の調査・研究だけでなく、市民に広く利用されるよう、今後も努力していきたいとかんがえています。

(橋本)

# 図 版





埋蔵文化財調査位置図（鳴上郡街跡）

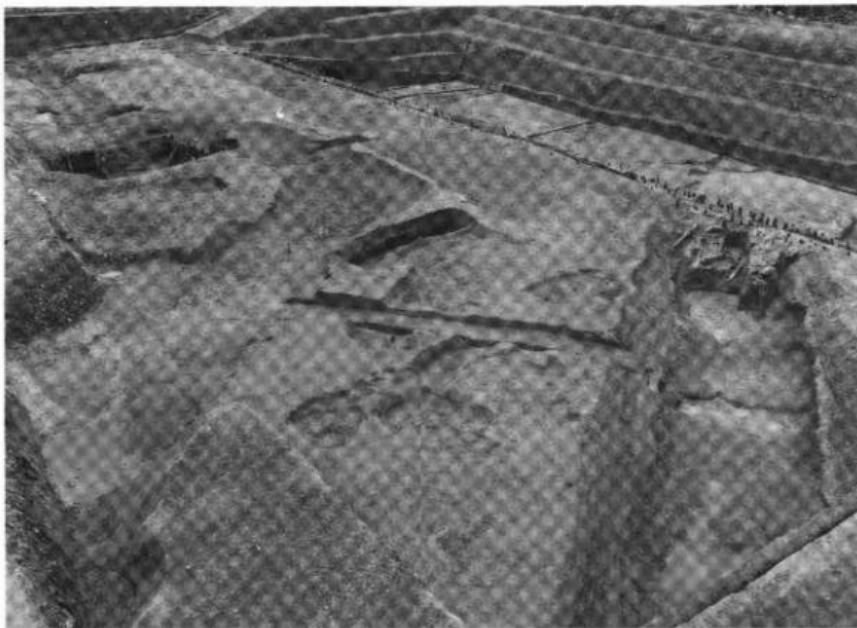


埋蔵文化財調査位置図

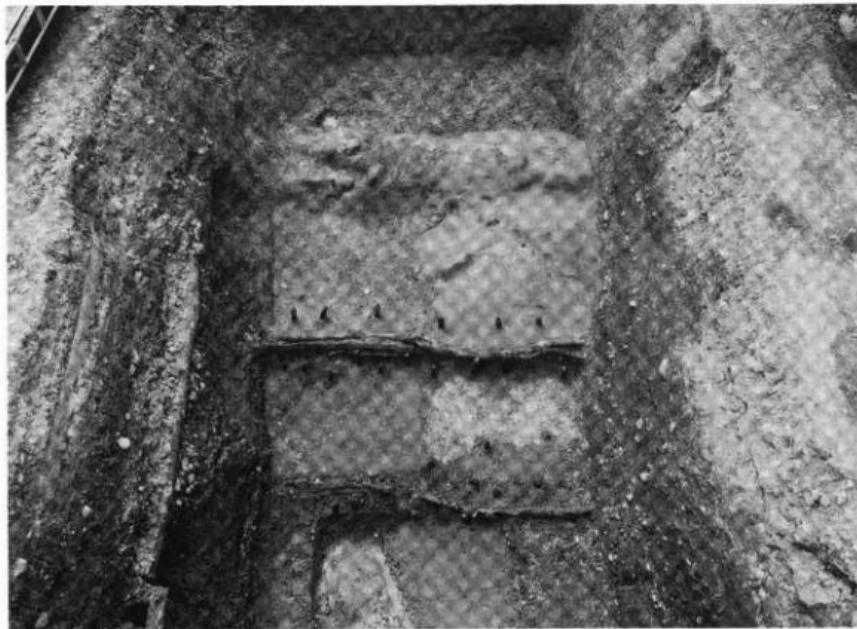
岡版第  
3

枚方市

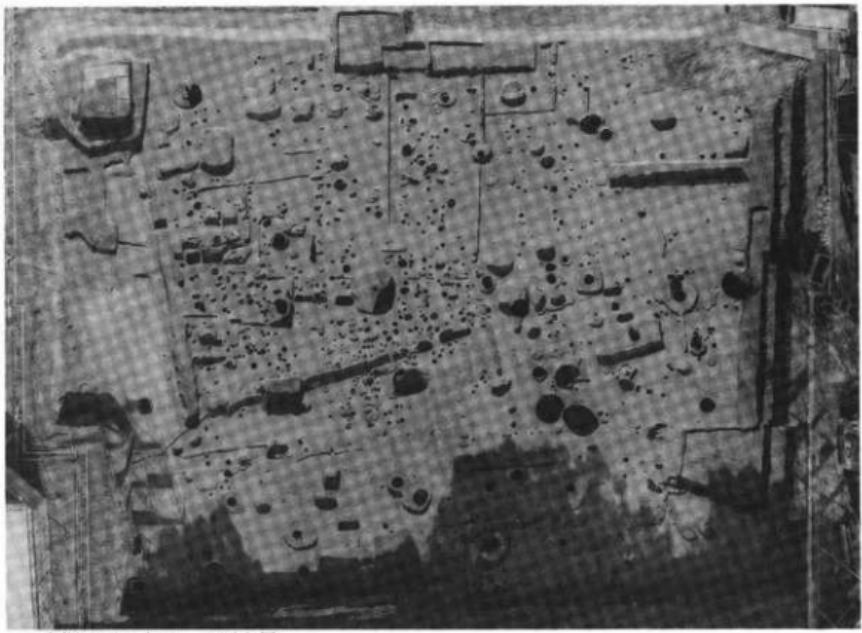




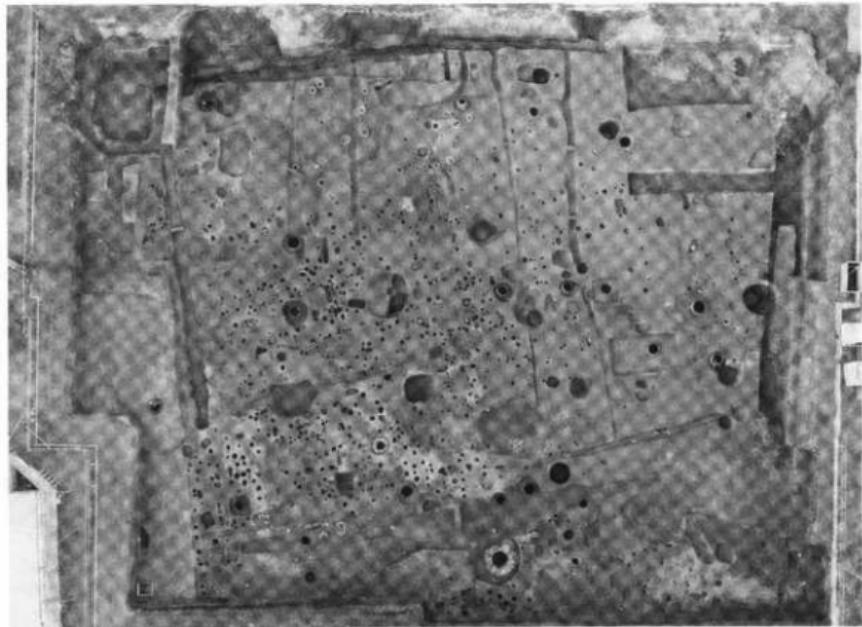
a. 高櫻城三ノ丸跡・A区（東南側から）



b. 高櫻城三ノ丸跡・B4区（東側から）



a. 高槻城三ノ丸跡・C区上層



b. 高槻城三ノ丸跡・C区下層



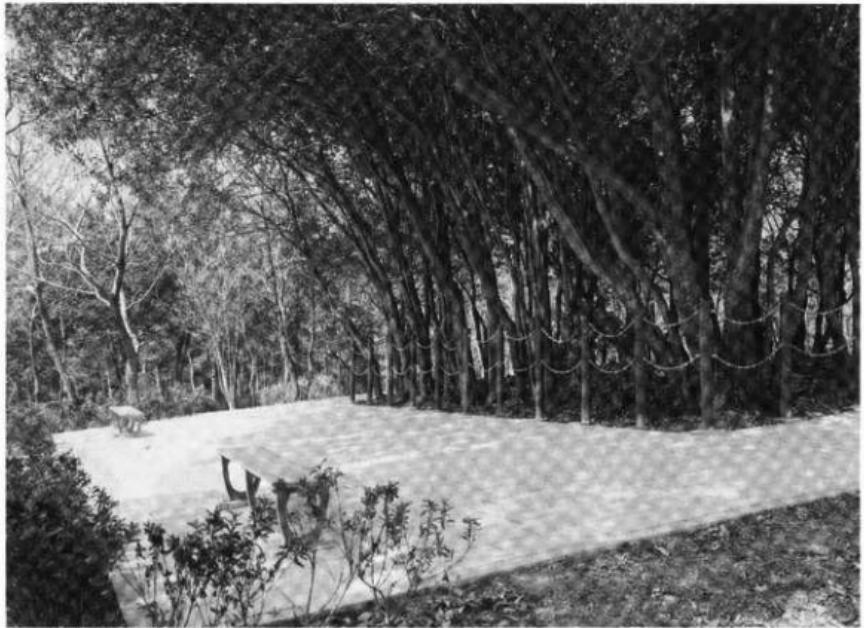
a. 清福寺太子堂移築前



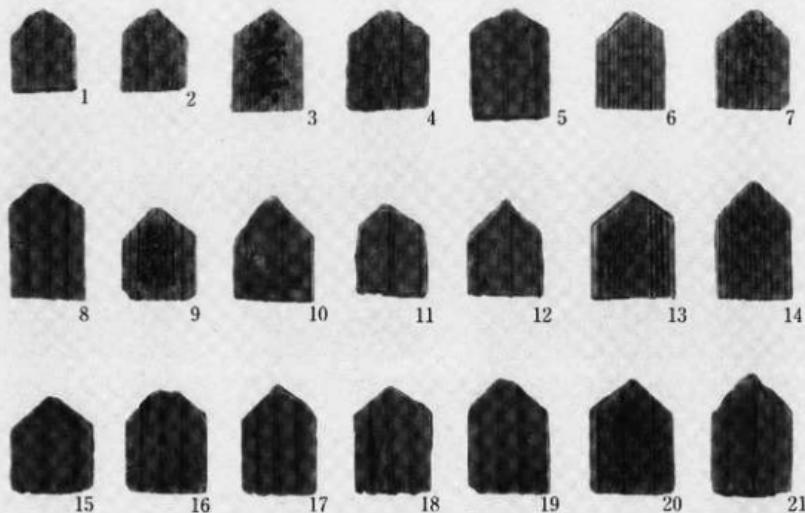
b. 清福寺太子堂移築後



a. 阿武山古墳整備狀況遠景

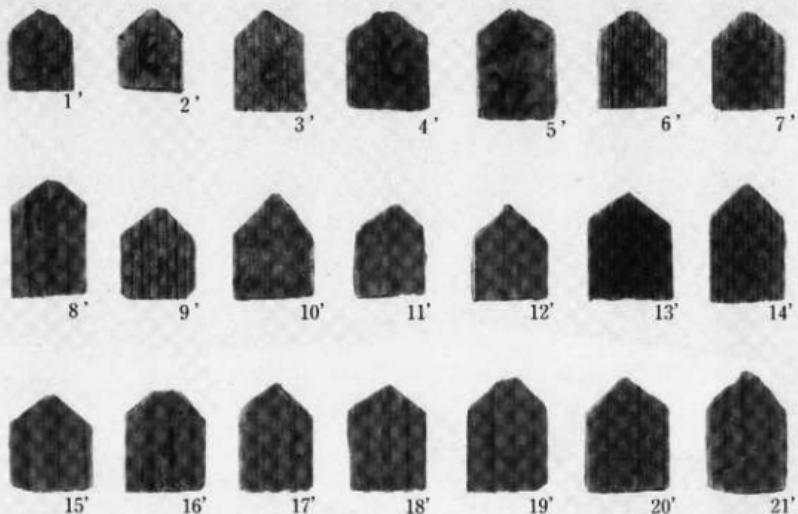


b. 阿武山古墳整備狀況近景



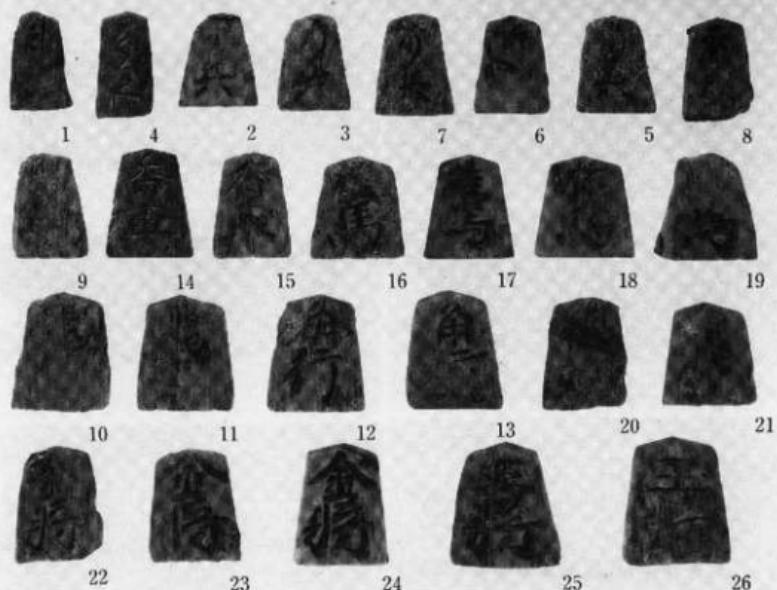
a. 高櫻城跡出土中将棋の駒 (表)

約1/2



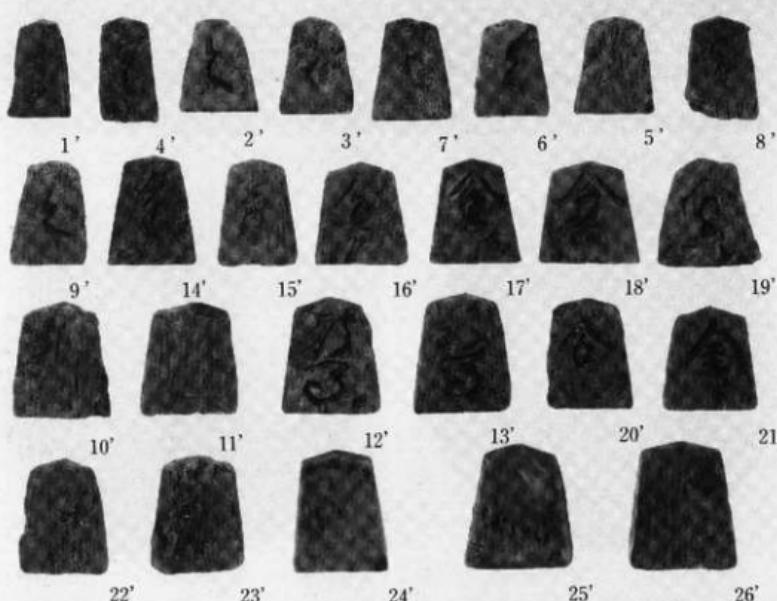
b. 高櫻城跡出土中将棋の駒 (裏)

約1/2



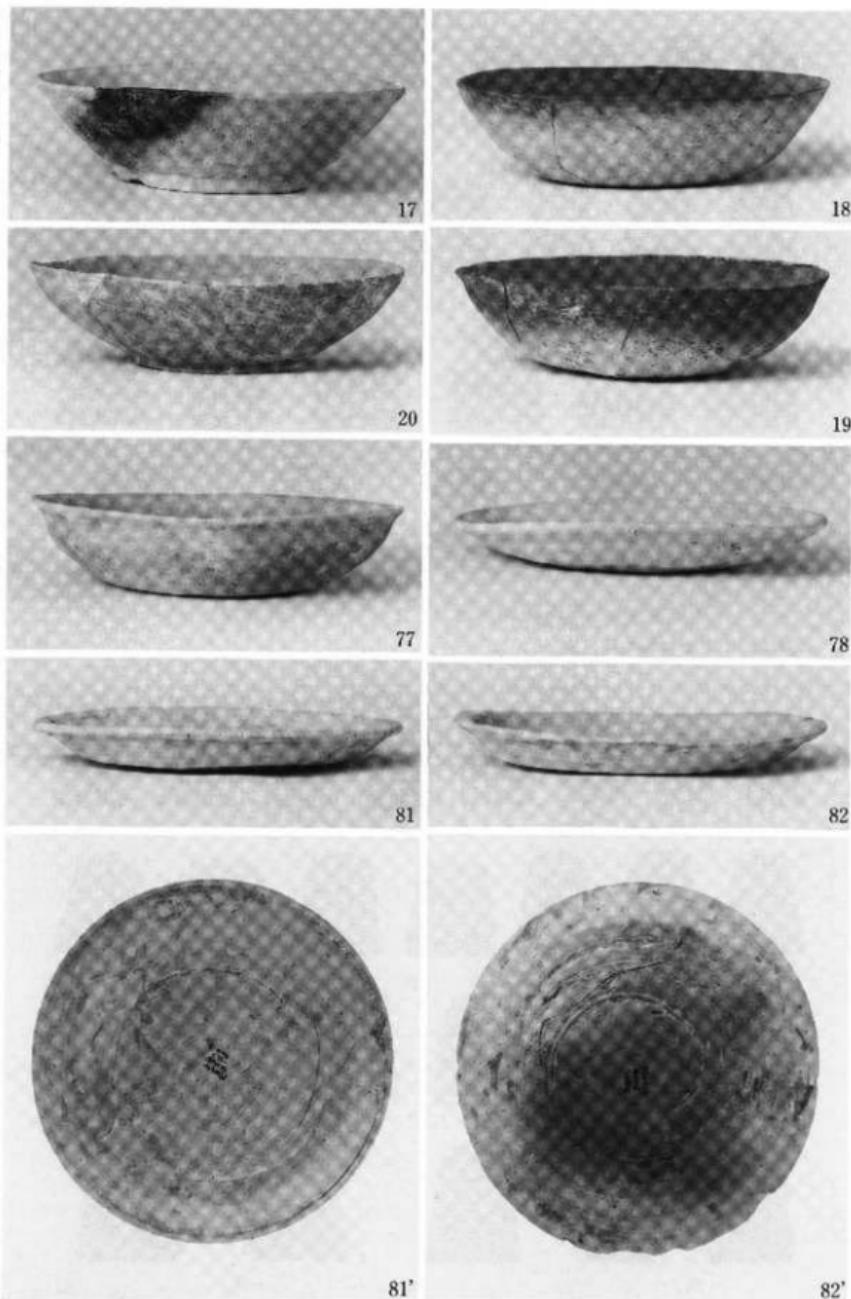
a. 高槻城跡出土小将棋の駒 (表)

約1/2



b. 高槻城跡出土小将棋の駒 (裏)

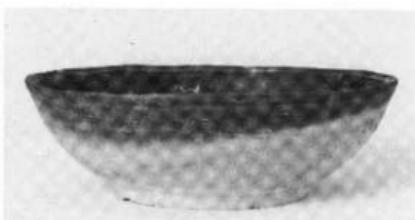
約1/2



都家今城遺跡 70年度井戸8 (17~20)・70年度井戸5 (77・78・81・82)



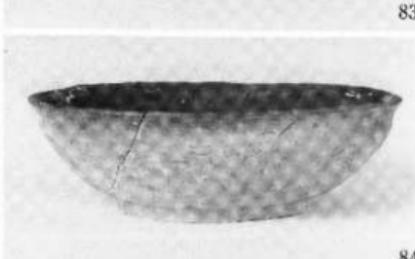
80



83



86



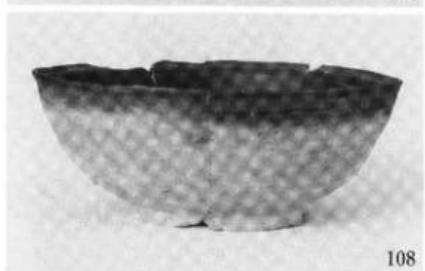
84



103



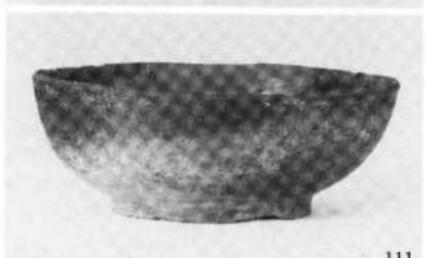
113



108



114



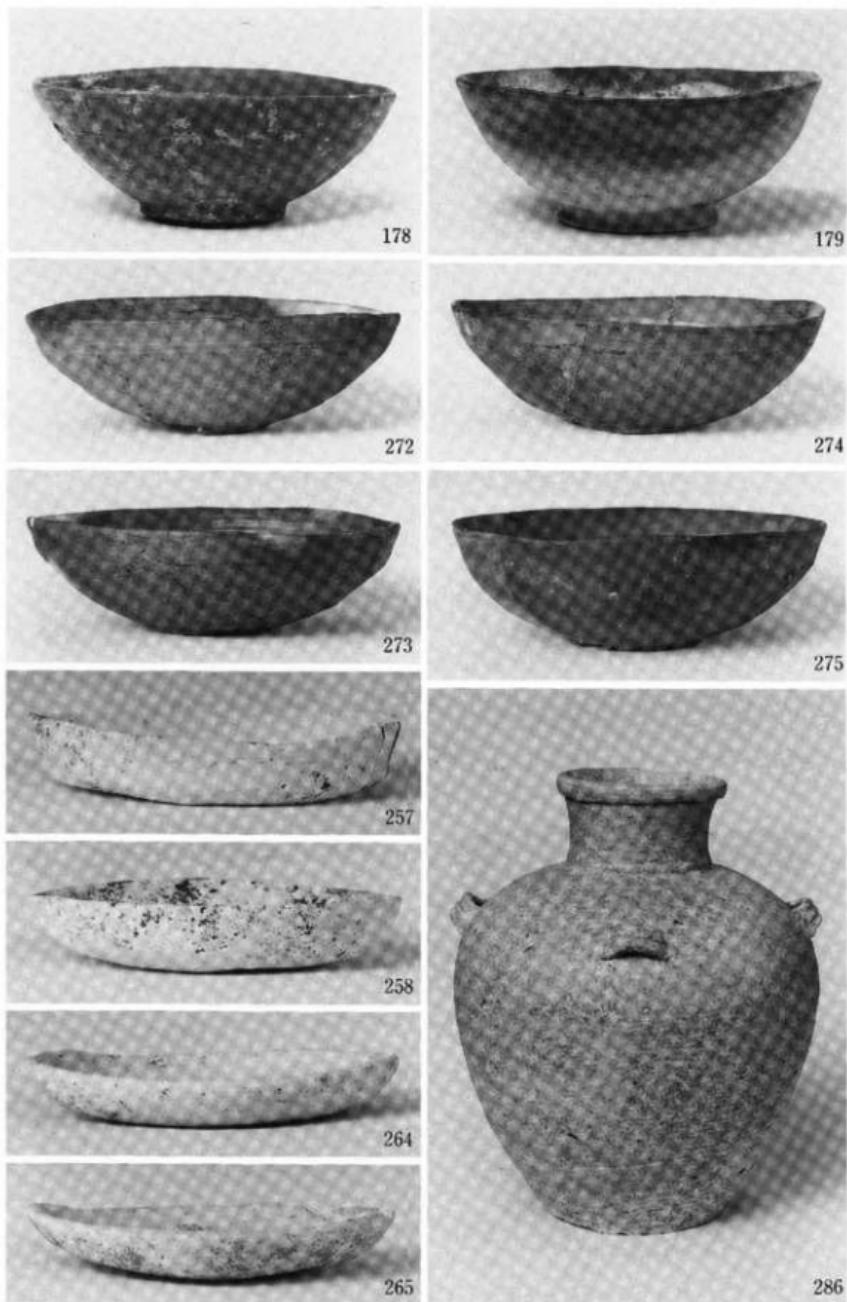
111



115

郡家今城遺跡 70年度井戸 5 (80・83・84・86)

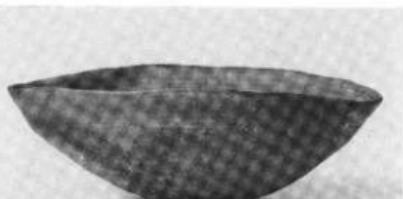
鳴上郡衙跡 70地区井戸 (103・108・111・113・114・115)



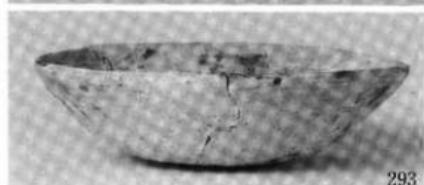
宮田遺跡 (178・179) , 上田部遺跡土器だまり (257・258・264・265) ・ 井戸 2 (272~275・286)



292



302



293



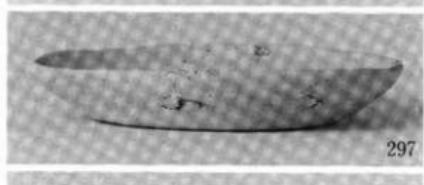
303



294



304



297



305



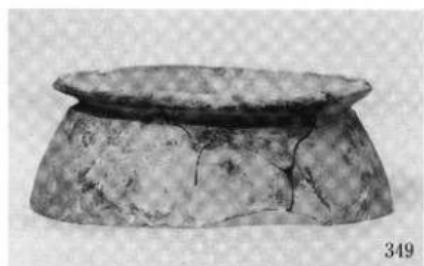
313



440

鳴上郡衙跡 17P地区井戸1 (292~294・297・298・302~305)

高櫻城跡 土壙4 (313・314), 宮田遺跡 (440)



349



350



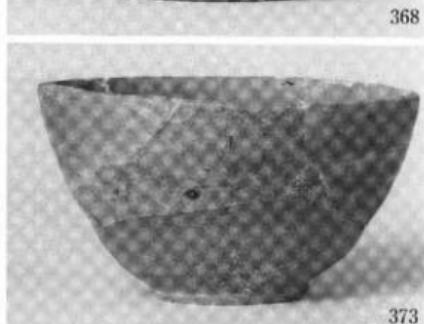
351



352



353



354



355

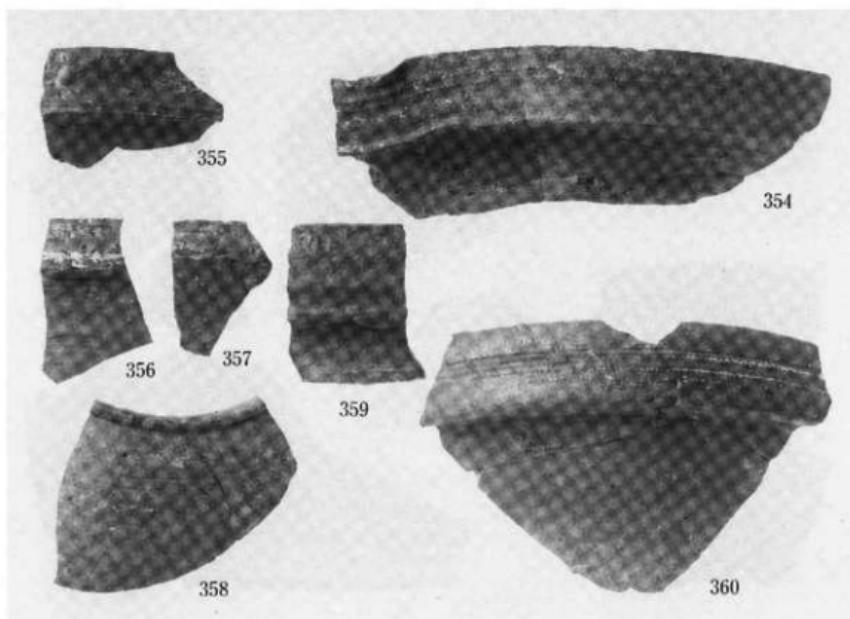


356

高槻城跡 溝1 (349~353)・土壤3 (356)・堀 (357), 芬川遺跡 (353)

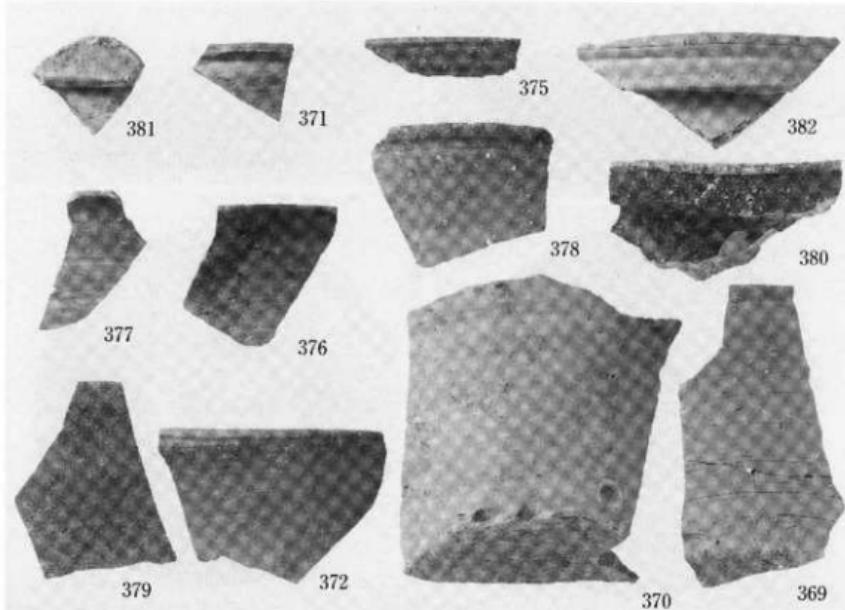


a. 高槻城跡土壙3 (361・362)



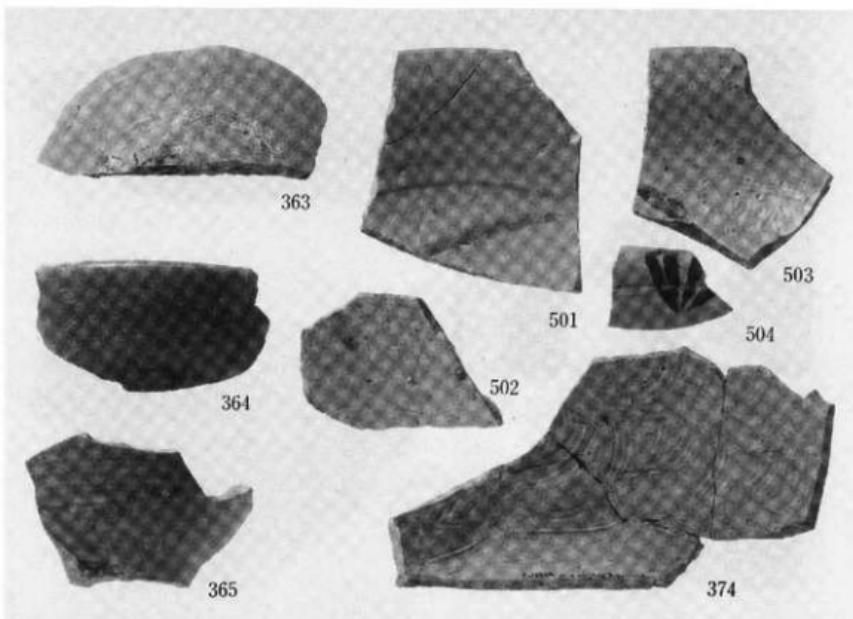
b. 高槻城跡 溝1 (354~360)

約1/3



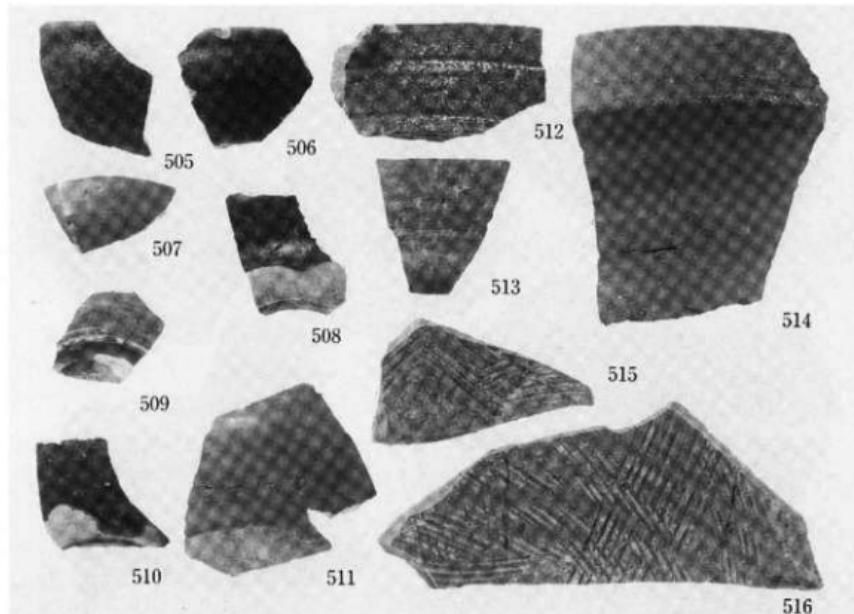
a. 高櫻城跡上塙3 (369~372・375~378) ほか

約1/3



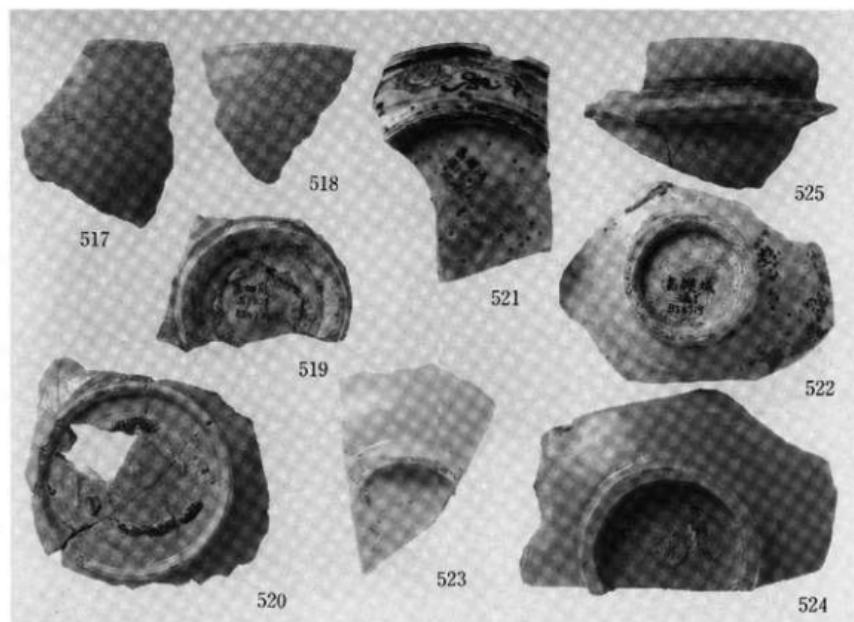
b. 高櫻城跡 土塙3 (363~365・501~504) ほか

約1/2



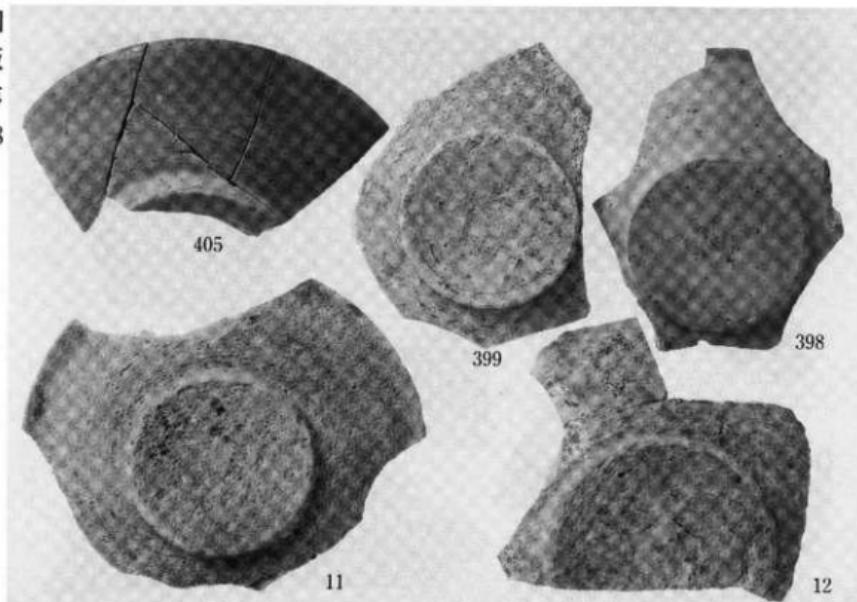
a. 高槻城跡土壤 3 (505~516)

約1/4



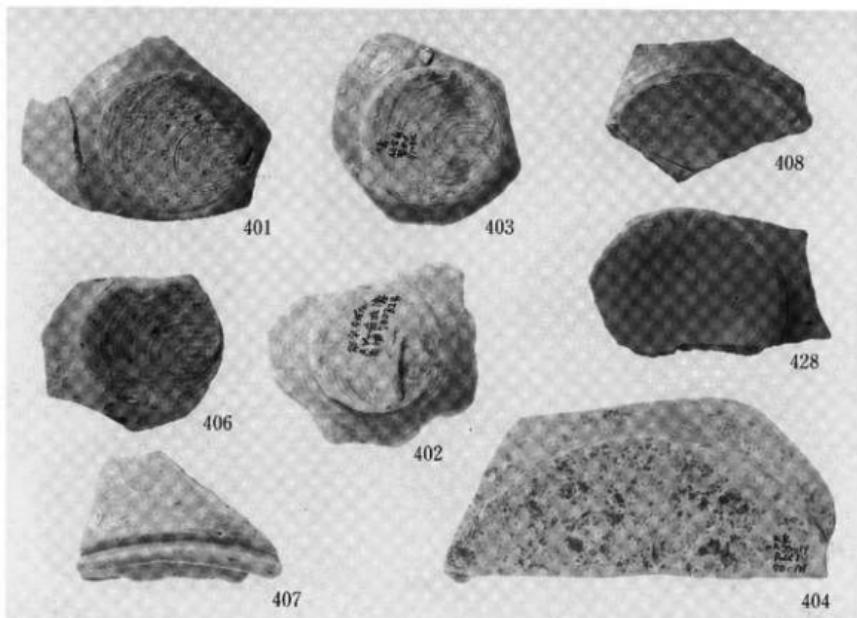
b. 高槻城跡 溝 1 (517~524)

約1/4



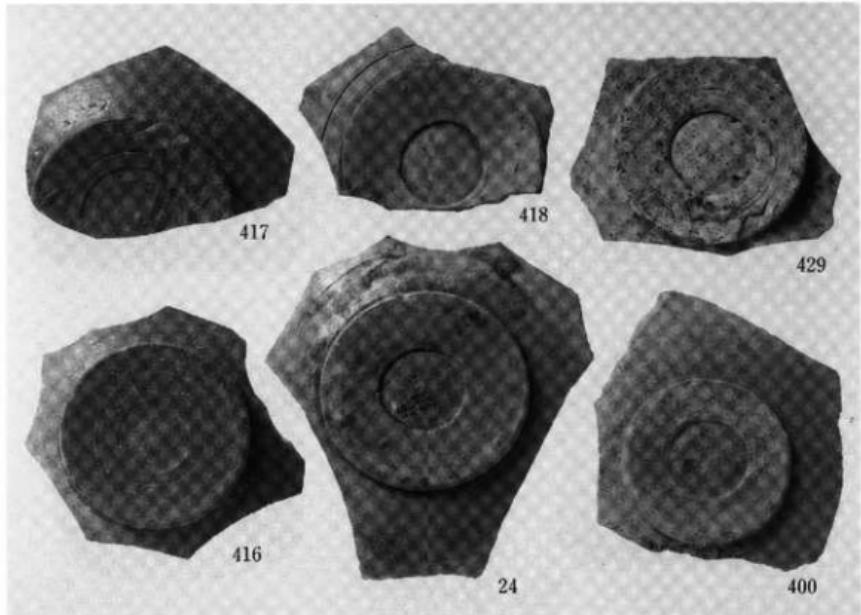
a. 郡家今城遺跡 (11・12・398・399), 鳴上郡衙跡 (405)

約1/2



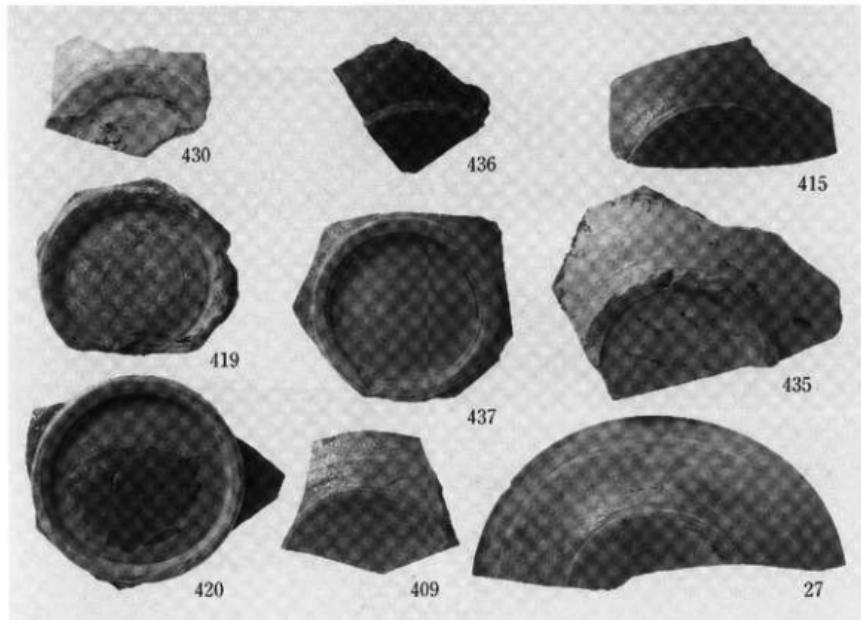
b. 郡家今城遺跡 (401~404), 鳴上郡衙跡 (406~408・428)

約1/2



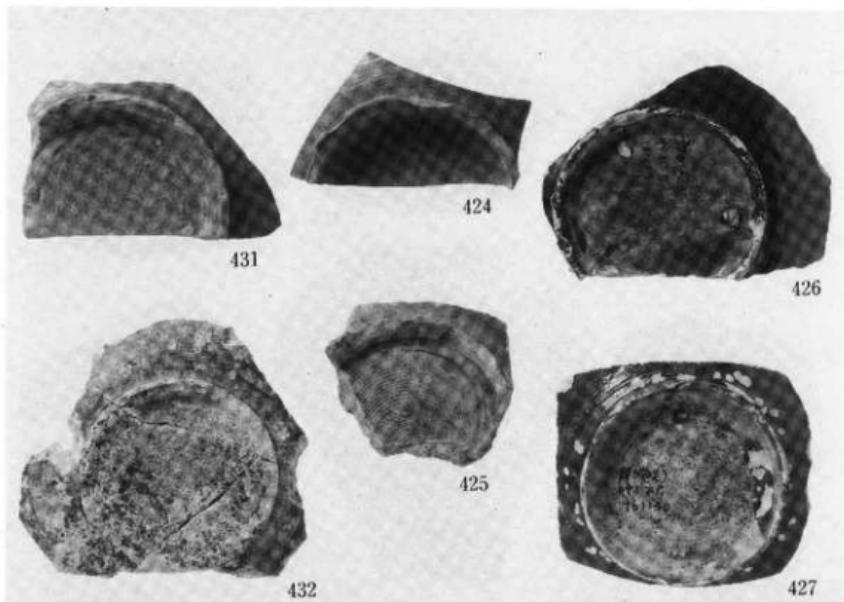
a. 郡家今城遺跡 (24・400), 鳴上郡衙跡 (416~418), 安満遺跡 (429)

約1/2



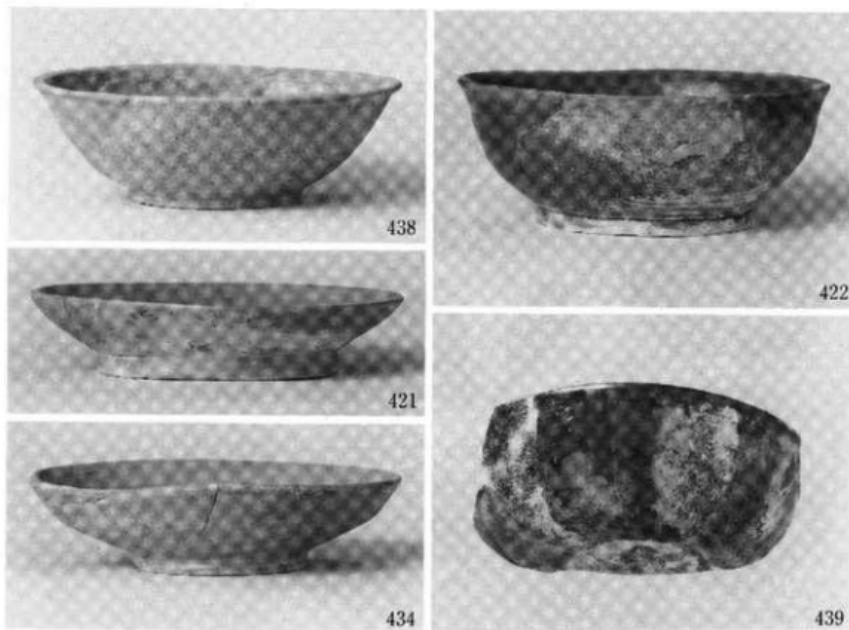
b. 郡家今城遺跡 (27), 鳴上郡衙跡 (409・415・419・420)  
安満遺跡 (430), 高槻城跡 (435~437)

約1/2



a. 鳴上郡衙跡 (424~427), 安満遺跡 (431・432)

約1/2



b. 鳴上郡衙跡 (421・422), 宮田遺跡 (434), 広瀬南遺跡 (438), 郡家今城遺跡 (439)

高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度

平成3年3月30日

発行 高槻市教育委員会

高槻市立埋蔵文化調査センター

〒569 高槻市南平台5丁目21-1

印刷 株式会社 邦文社

〒533 大阪市東淀川区大桐1丁目4番9号